

---

# 続瑠璃色紀

川中流一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続瑠璃色紀

### 【Nコード】

N3157P

### 【作者名】

川中流一

### 【あらすじ】

千年続く貴族の世に、世継ぎとして生まれた青年、天。世にも不遜な父親と世にも美しい母親に振り回されて、花魁に恋する青い春。仮想19世紀末にあったかもしれない歪つな純愛ストーリー。

【扇子】って？

貴族が続べる世。かつて『扇子』と呼ばれる特殊な奴隷制度があった。奴隷身分の美しい少女達を貴族子弟の小間使いとするもので、表向きは『扇子持ち』という意味からの名称とされている。しかしその本来の意義は結婚前に妻との初夜に備えるという因習である。通常、結婚後には用済みとしてその命を奪う。

近年では完全に人権を無視され、俗に『情欲を扇ぐ子』と解されて使い捨ての愛玩人形として扱われていた。貴族でも最上流層しか持たず、市場では流通しない程の高値で取引される。その為商品価値の向上に拍車がかかり、貴族にさえ覆い隠された非情な手段によって『人形』となる「躰」が行われていた。『扇子』となった少女達は皆、意思を持たず決して笑わないと言われる。

【前作のあらすじ】

瑠璃という異国の風貌を持つ『扇子』を手にした大貴族の跡取り、霧崎千次は、いずれ破棄しなければならない自らの『扇子』を愛してしまう。しかし霧崎家を継ぐ者としてやがて皇女との結婚を迎える。それでも瑠璃を妾として愛そうとした千次だったが、「扇子を全うしたのもう死なせて欲しい」と泣く瑠璃。定めから逃れず、そして瑠璃の笑顔を見る為に千次は「掟そのものを壊す」決意をした。かくして奴隷制は廃止され、瑠璃を妻としたのだが。本話は、時系列としてはその後続く。

( 瑠璃色の奴隷    <http://ncode.syosetu.com/n2897m/> )

## 【登場人物】

霧崎千次：天の父。瑠璃を溺愛するあまりに「つい」苛めてしまうのが今の悩みでもない悩み。世に対して廃類的な見方を持つが、母を亡くした幼少時に既に貴族として生きる覚悟を決めており、家を守る心も審美的な性格もその死に由来するのもかもしれない。

（【白庭】 <http://ncode.syosetu.com/n2519n/>）

瑠璃：天の母。血は繋がっていないがそのことを天はまだ知らない。異国の血を引いているようで、銀髪碧眼を「月と空のようだ」と愛でられる。元は千次の傍仕えだったが、見初められ紆余曲折を経て妻となる。その転身に未だに自信を持てず、うっかり何か口走ると「お仕置き」を受けるので気をつけている。なんだか可哀想。でも天曰く「能天気」

天：まともな奴ほど苦労人。年は15程を想定している。自分の名前についてさりげなく意味を引いてみたら「若死にする、少年のうちに死ぬ」と言う記述を見つけ、以来最低な父親だと思っている。手に取った瞬間に名づけられたらしいが「俺の一時は人の三年だ」と言うので三年間分考えられた結果の名前……であってほしい。

ひいじいさん：天の祖祖父。本名不明。瑠璃を千次に与えた張本人。どこか飄々としており千次が唯一一目置いている人物。しかし黒幕にはならないのでご安心を。引退した良き理解者。でも出番はあまりない。

じいさん：天の祖父。本名は総一郎。掟に厳しくまさに貴族の鑑。と自負している。放蕩な息子（千次）に嘆き天の当主教育に力を入れる。散々天を本家に戻せと言っても聞かなかったくせに元服前に

は戻し、しかも基本的な勉強はわりと押さえていたのでちよつと千次を見直している。勿論口には出さないが。しかし本家に戻した大きな理由は瑠璃と引き離す為で、勉強も勝手に瑠璃が教えていたことは知らない。

瑠璃が最も怯えている人物だが、掟に忠実なだけで別に瑠璃を卑下してはいない。手を伸ばしていたので「醤油を取ってあげた」が「触るなと取り上げられる」という勘違いレートが度々起きているだけである。息子は気づいても訂正しない。

竜：竜之介。元は霧崎家の護衛士だったが、瑠璃を連れて逃げようとしたために罰を受けた。罰は千次に命を差し出す事。要するに言いなり。瑠璃とは幼馴染のような関係。隠されていた血縁関係があるらしく、霧崎本家の血を継いでいる。その為千次に当主を押し付けられたが、認められず今は東国の治める代理をしている。

光次郎：千次のかつての悪友。（【琥珀色の友人】 <http://ncode.syosetu.com/n4656m/>）

ちよ：光次郎の傍仕えだった。瑠璃とは「ちよつと綺麗やからつて調子乗らんどいてくれる」「うるさいです、不良品」と言い合う仲。えりか：千次の元妻。ということは天の実母。千次とは昔「恋仲だった」らしいが、妻としての愛を受けられない不満から瑠璃を毒殺しようとし、千次に離縁を申し渡された。

（【若草色の皇女】 <http://ncode.syosetu.com/n6301m/>）

### 【身分】

大きく皇族、貴族、平民、奴隷に分かれている。

皇族：天皇家の血を引き位としては本来貴族の上にある筈だが、實質は政治に關与できずお飾り状態。表立っては軽んじられることはないが、独自の財源を持たず、姻戚關係のある貴族に依存している為存在力は弱い。

貴族：最上流、上流、中流、下流と家柄による上下關係があるらしい。朝廷と呼ばれる場で政治を取り仕切っている。茶、花、和歌なども教養としてある。茶が社交の場であつたりと室町時代のもとは完全には一致しない。

平民：「皇族と貴族以外の下々」と一括りにされているが、その中には僧、武士、商人、農民などが含まれる。一括りにされている為この間での差別は文律上は定めていない。

奴隸：今は廃止された。元々は貴族特有の所有物であつたが直接貴族が関わることはなく、領地に附屬した最下層の勞働力として子孫永劫死ぬまで酷使されていた。

例外は『扇子』として選ばれた時であり、貴族の子弟に愛でられれば美しい着物を着て食べものにも困らないとして少女の憧れだった。實際はその半数以上が過酷な訓練中に命を落とし扇子となつても長くて数年しか生きられなかった。

### 【霧崎家】

全ての貴族の頂点に立ち、一族支配に近い形で政治が行われている。代々この家の当主がこの世を統べたと言つて過言でない。しかし比較的早い世代交代が為され、聞くところによると「当主は家の意向とやらに沿う操り人形」らしい。独裁支配と言つわけではなく、幼い頃からあらゆる英才教育がなされて既にある掟や慣習を遵守して政治を行う。

「掟による秩序」により絶対的存在を保ってきたので、それを覆す事は自らの地位を揺るがすことであり、当主こそが掟の番人でないければならない。

ちなみに

### 【霧崎家の歴史】

霧崎家の興りは元を辿れば千年前に遡るらしいが、初めから強大な力を持っていた訳ではない。むしろ都から左遷され、面倒な対外関係を押し付けられて長らく政権争いからは蚊帳の外にいた。しかし覇権を握っていた貴族とその対抗勢力との間で史上に残る大きな戦いが勃発した時、遂に転機が訪れた。国内防衛の軍事力と貿易による経済力で着々と力をつけていた先祖の貢献により争いは終結する以降、弱体化した両勢力に代わって覇権を握ったのだった。

都に返り咲く前、積年の労を噛み締めその御崎の地で霧崎という氏を新たに定めたのが興りである。この地を霧崎発祥の地として祀りに行くのは今でも霧崎家の年中行事となっている。

この由縁もあってか特に外交経済の職は必ず霧崎家が押さえ、教育でも代々その手腕や知識に力を入れている。天が日々ガリ勉しているのはこの為である。普通、貴族の子弟は「学問」まではせず、和歌や漢文にほどほどに励むゆとり教育がされている。また、霧崎家ですら武芸まではしなかったが、これは父親の代に父親の要望で取り入れられたらしい。

## 一・祝言

ひっそりと佇む家屋を訪ねる。玄関口をがらりと開けると、板敷きに正座をしていた女が微笑み深々と礼をした。

「お帰りなさいませ、旦那様」

それでもいいと笑ってくれた。

奴隷制は廃止した。家主を譲った。妻にした。だが現状現実は何も変わらなかった。認められなかった。幾ら力づくで勝ち取っても、それだけでは土の底まで根付いた因習は変わらなかった。未だに奴隷 元奴隷への差別は歴然としていて、家は自分がいなければ立ち行かず、祖父によって引き止められた皇族の元の妻が家にいる。女は孕んでいた。それでも追い出すこともできないが、元は奴隷のあいつを今のあの家に妻として迎え入れるのは風当たりが強

すぎて、可哀想な思いをさせてしまうだろう。

結局、離れたこの家に匿うように暮らさせて、夜通っては朝実家に戻る。だがこれでは。

「旦那様、召し上がりませんか」

箸を止めていた自分を伺い見て鈴の鳴る声でそう言った。

「いいや、旨い」

芋の煮物を箸で一口に切って口に運ぶ。

結局、何も変えることなどできないのか。

これではあの時祖父が提案した通り「平民の身分にして妾として匿う」の事実上変わらない。あの祖父は、そこまで悟っていてそう言ったのだろうか。あの女を家に引きとめたのも、俺が足掻くことの無駄に自ら悟り受け入れるだろうと見越した老成の達観なのか。

白い肌衣の女を布団に抱いて無くなってしまいそうなほど華奢で



小柄な体を抱きしめる。

足掻いても足掻いても元から変わらない。むしろ足掻いた分だけ擦れて戻されて、奇妙な形に進んでいく。

「旦那様……？」

これだけが、腕の中のこれだけが俺の足掻いた証だ。これの為に他の何が擦れようと構わない。

「笑ってくれ、瑠璃」

女は口元を微笑んでみせた。

「お前もそういう作り笑いが多くなっただな。前は偽り無く笑ったが」

「旦那様が幸せでないとりは笑えないのです」

「俺は幸せでないか」

「とても辛そうです、旦那様」

「そうか」

男は腕を解いてごろんと仰向けになった。

「俺も、お前が笑ってくれなきゃ笑えねえよ……」

「おめでとうございます」

朝方帰れば口々に祝いの言葉を述べられて、ああ、遂に産まれたんだな、と知った。別離の言葉を述べて以来会っていないしその後、に孕んでいたことを知っても気にもかからなかった。最早当主でなくあいつが妻でないことは、家の外の者どころか中の者でさえ知らぬ振りだ。「妾を寵愛し妻に酷薄」とそう外でも中でも身内にさえもそう思われている。

「御嫡子出産」の噂は広まって、あいつの耳にも届いてしまうだろう。そんなことを噂から突然聞かされて、あいつは何を思うだろう。どんな顔をするだろう。

いつになろうとも、あいつは子を産まないから。

祝言が次々と届いて家は幸事に浮き立ち、うんざりして家を出た。  
一体何が目出たい。

「おめでとうございます」

につこりと、あいつは笑っていつもより嬉しそうに出迎えた。

ほくほくと差し出してきた赤飯の茶碗を俺は割った。

「お前まで、一体何が目出度い」

がしゃんと割れた音に怯えたように声を震わせる。

「旦那様　　るりは旦那様の御子が生まれたのを本当におめでたく  
思つて、」

「本当にそう思っているのか」

睨み付けるようになってしまっているだろう。鋭くあいつの表情  
を捉えて言う。

「嘘ではありません。御子が生まれるのはとても、とても幸せなこ  
とです」

少しだけ睫を伏せた女の肩を掴み胸に閉じ込めて抱く。

「ならお前が俺の子を生めよ…！」

「ごめんなさい、旦那様：るりはもつと頑張ります」

そう言った女をきつく抱きしめる。

「すまない、瑠璃。そうは思っていない。俺はお前がいれば他は望  
んでいない」

顔を持つて哀しい淡色の瞳を見つめる。

「だから何も考えるな。考えないでくれ　　」

そうして深く口付けた。

そういう施術をされていたらしかつた。土に埋もれていた因習を  
引きずり明かす内に吐き気がするような事実が芽づるのよう掘り  
出てきた。例え関知しないものであってもこれほどまでに厭わしい  
ものは全て貴族の為に作られたものだった。人間を加工して貴族の

為の人形を製造する工場とっていい。人形は笑わない。人形は意思を持たない。人形は孕まない。

無駄ではない。

少なくとも、そんな狂った制度を壊してやったのだ。

例え、何も変わらなくとも。

## 二・母親

ねんねんころりよ、おころりよー

子守唄に目を凝らした。いつもより早い夕闇の中、縁側で赤ん坊を抱いて揺すり歌っている女がいた。そんな馬鹿な、と思って急いでがらりと戸を開ける。縁側のある部屋に行くと、吃驚して慌てた様子の女がいた。

「おかえりなさいませ、旦那様」

「先の子はなんだ」

部屋をぐるりと見回すが何もない。ただ、女が薄桃の肌掛け布団をぎゅ、と握っただけだった。それは先の子を包んでいた。夕焼けに染まる空色の瞳と一時時が止まったように見詰め合う。鳥がカアカア鳴く。

「ごめんなさい」

震えた声が静寂を破った。

「何故お前が謝る」

「るりが旦那様を辛いお顔にさせている……」

「俺はお前がいれば他は望まない。だがお前は俺の子が欲しいんだな？」

「それほど大きなことをるりは望んでいません、旦那様。とてもいけないことです」

「じゃあ何故子を模して抱いていた」

「そ、それはただ少し、考えてみただけなのです。もしもるりが……」  
女は口を噤む。「それだけです、旦那様」と言った。

「だから考えると言っただろう」

女を抱いて男は言った。

「御免なさい、旦那様」

「もうお前は何にも謝るな。分かったな？るり」  
「はい、旦那様」女は小さく返事をした。

子の生まれて少し落ち着くと早々に女は里帰りした。というのは名目で、実質子を取り上げて実家に帰らせたのだった。子は跡継ぎとしてこの家で育てる。

男は寝る子を見た。似ているそうだが自分の子という実感は無い。決まっていたことなのに女は随分取り乱したそうだが、何故女は子に執着するのだろう。とはいえ自分は他に女を娶る気は無いから自分の血を宿すのはこの赤ん坊だけで、これは家の為に必要だった。自分にとってはそれだけだが

『ねんねんころりよ』

菩薩のように穏やかで優しげな空色の瞳を想い出す。男はそれを抱き上げた。

「え」

嬉しそうに赤ん坊を抱かせてもらっていた女は男の言葉に驚いてきよとした。

「お前が育てろ、瑠璃」

女の顔はきよととするばかりで、何も理解できていないようだった。

「けれど、この御子様は」

「俺の子だ。そしてお前は俺の妻だ。何が悪い」  
誰にも文句は言わせない。

「けれど、るりが旦那様の御子をお育てするなんて、それはとてもいけないことです」

「嫌か」

「嫌ではありません！そうではありません。ただそれはるりにはと

ても身に余ることなので」

「あのなあ」

男は女の細い肩を強めに掴んだ。

「もつと堂々としろよ。誰がなんと言おうと、お前は俺の妻なんだ」

「旦那様……」

「お前迄が、ただ一時の戯れだと思っている。お前ですら俺をお前の夫と認めてはくれない」

「けれどもるりは奥方として旦那様に何のお役目も果たせないのです」

女は顔を伏せて畏まるように小さく言った。

「役目とはなんだ。家柄で支えることが。子を為すことが。妻として表に出して自慢になることが。全て薄っぺらだ。この世に価値など見出せない。ただお前だけが俺の安らぎだ。お前がいるから俺はまだ俺を保っていられる。お前は俺の在りかなんだ」

女を見下ろす。

「お前が役目を果たしたいと言うのなら、これを育ててみる。大勢の召使にかしづかれて物心の無いうちに習いと考えを染み込まされる、貴族の人形をわざわざ作る必要は無い」

女の抱く黒髪の子を見下ろす。

「母親の温もりに育てば、少なくともこうも心の冷たい人間はできないだろう」

女は瞳を真っ直ぐに、訴えるように男を見上げる。

「旦那様は冷たくはありません。るりにとても温かくしてくれます」

男は必死な様子にふ、と笑って女の頭に手を置いた。

「できるな？ 瑠璃」

「はい、旦那様。るりは必ず旦那様のように御立派にお育てします」

女は涙ぐんでいた。

「泣くな」

「これは、嬉しいのです。るりが旦那様の御子を育てるなんて、本当にるりは幸せです」

「名は天だ。お前が母親だ」

「はい」返事をして自分の腕の中を見る。

「天、お母さんですよ」

女は幸せそうに小さな赤ん坊に微笑みかけた。

### 三・子守（前書き）



### 三・子守

ねんねんころりよーおころりよー

がら、と襖が開かれて子守唄は止んだ。

「お前、あやしたらすぐに来ると言っただじゃねえか」

女は嬉しそうな表情で振り返った。

「旦那様、見てください。天がるりの腕で寝付いたのです」

「いいから早く来い。俺は待つのが苦手なんだ」

「あ、はい。すぐに、旦那様」

からりとまた引かれた襖に女は赤ん坊を籠に寝かせて少し急ぎ足でぱたぱたと襖へ行く。「おやすみなさい、天」と微笑んだ。

深夜、ほあほああと泣き声が聞こえて女はもぞもぞと動いた。しかし起き上がりかけて手首が掴まれた。

「いい。放っておけ」

「旦那様、そういう訳にはいかないのです。天は赤ちゃんなので」女は立って行った。幾晩目のことか、ち、と男は舌打つ。間もなく泣き止んで、暫くして冷えた体もぞもぞと入ってくる。二度目に起きた時、男は「お前は寝ている」と言い立って行った。

「泣くな」

赤ん坊を無感情に見下ろすと、余計に大きく泣き出す。ぐい、と顎を掴んで睨める。

「一度言っただけで判らねえか」

しかしその手を諫めるように白く細い手が被さった。

「旦那様、」おろおろと遠慮がちな目で見上げてくる。

「天は赤ちゃんなので許してください」

「嫌だな。煩い。今度泣いたら屋敷に戻す」

「旦那様、許してください。赤ちゃんは泣くものなのです」

「そうだな、俺は甘く考えていたようだ。やはり使用人にやらせよう」

「るりではやはり駄目なのですか……」

「そうじゃねえ。可愛いお前を煩わせたくねえ」

男は女の顔に手をやる。

「ほら、お前だって隈ができまってるじゃねえか。可愛い顔が台無しだ」

「旦那様、後少し、後少しるりに任せて下さいませんか。るりは頑張りますので」

「だから頑張らなくていいって言ってんだよ。それより俺を慰めろ」

「どちらもるりは頑張ります、旦那様」

はあ、と男は溜息を吐いた。

「お前に必死になってお願いされると俺は弱い」

そう言って布団に戻っていった。

そうは言っても女はいつも眠そうだった。疲れているようにも見える。それなのに頑なにどうかもう少し自分に任せて欲しいと言う。前は自分が帰るのをじっと正座で待っていたのに今は世話をしていたり、うつらうつらと眠ってしまっていて声をかけて初めて気がつき慌てて時計を見て謝る。口を開けば天が、天が、と楽しそうに話しそわそわしている。料理も品数が大分減った。とはいえそれはまあ、以前が一人では作りすぎる程多く、凝っていたのだが。あまり眠そうで反応もつまらないので営むことも稀になった。夜は幾度も起こされる。

男の通う足数は減った。

「お父さん、帰って来ませんねー」女は赤ん坊を揺すった。

「とても、忙しい方なのです……」

一寸寂しそうな顔をしてから笑顔を見せて言う。

「けれど、お母さんがいますよー。るりがきつと天を旦那様のようなご立派なお方に御育てしますからね」

「つまんねえなあ」

久々に呟いた言葉に気がついて、男はふ、と自分を笑った。

あいつが俺以外のことに夢中だなんて、本当につまらねえ。いつそ取り上げたいが、そんなことをしたらあいつに嫌われちまう。本当に不味いことをした。喜ぶ顔が見たくてつい早計をしてしまったな。

しかし。まあ、実際あの寂しそうな顔をしなくなっただけいか。子を孕まないのを勝手に自分で責めやがるから。まあ暫くは構わないで置いてやろう。俺が傍にいればどうしても気を一番に引けないことに苛立つちまうからな。少し構いすぎたから、今度はあいつから甘えてくるのを愉しみしようか。

#### 四・寂寥

親父はたまにふらりと帰ってくる。帰ってくる度に母さんは大喜びして、「旦那様、旦那様」と尻尾を振るように媚びてその日だけは俺を構わない。それ以外は俺にべつたりの心配性で、それはむしろ、普段があいつの代わりであるような気がした。

「天、クッキーですよ」

次の日はご機嫌で、俺が好物だと思っているらしい焼き菓子を焼いて持ってくる。筆で書いた字を覗き込んでわあ、と大げさに感心する。

「天はとてもお習字が上手ですね。大人のようにです」

「前も見ただろう」

「天のお父様もとても字がお上手なのですよ。お母さんもお父様に習ったのです」

俺の不機嫌な顔にも嬉しそうに答える。

「習った？あんたと親父ってどういう関係だったんだ？」

「あの、それはですね、」ちよつと気まずそうにして「天、あんたではなく『お母さん』ですよ」と代わりにごまかして言ってきた。

「お習字だけでなくお琴もお茶も、御教養でお父様より優れた方はいないのです」

歌うようにどこか誇らしげに言うのに、は、と鼻を鳴らした。

「あんな奴が？」

「めつ。駄目ですよ、天。お父様をあんななどと言つては」本気で怒っているらしいのに頬を膨らませたそれはつねってやりたくなるほど面白い。怒るのは親父の悪口を言った時くらいで、それもなんとなく気に食わない。

「母さんには可哀想だけどさあ、あいつ絶対女と遊んでいると思うぜ。仕事が忙しいなんて、母さんが勝手に信じ込んでいるだけだ」

「なんということと言うのですか、天は。クッキーをあげませんよ」

「はいはい、その甘いの持ってとつと出て行けよ」

母さんは眉をぎゅっと寄せて、意を決してその皿を持って立ち上がった。

「謝ったら、食べていいんですからね……」寂しそうにそう言って出て行く。

「誰が謝るかよ。そんなもので」

小さな背中に向かってそう言った。

そんなことも忘れてくあ、と背伸びして食堂に向かった。もう食卓は用意され、母さんは座っている。

「酢豚か」俺は椅子を引いて座ると頂きますと言って食べ始めた。

母さんはいつまでも手が付かずに、少しだけ唇を噛んでぎゅ、と箸を見つめている。俺が黙々と食べ終わり、そのままがた、と椅子を引くとうやく母さんは口を開いた。

「待ってください、天」ぎゅ、と俺を見つめあげる。少し瞳は潤んでいる。

「何だよ、」面倒くさそうに言った。

「天は……謝らなければなりません」

「誰に？」

「お父様にです。悪口を言うのはいけないことです」

「嫌だね」は、と笑って見下ろす。「それに、悪口でなく事実だと思っぜ？」

「天、」

「あんたが信じたいんだろ、悪口だって。そんなに不安なら直接聞いてみたらいいじゃねえか」

「……るりは天にとっても甘かったようです。天が今謝らないのならお父さんに言わなければなりません」

「帰ってくんのかよ、今日？」

食事はいつも三人分用意されているが、一人分は大抵毎日翌朝に捨てられる。寂しそうに捨てている。元から作らなければいい話な

のに。

「お帰りになられたら、お話します」

「好きにしろよ？ だけど残念だがあいつは俺のことなんか興味ないと思うぜ」

「そんなことはありません。旦那様は天にとっても御期待なさっています」

俺はもう相手にせずそこを去った。母さんは哀しげに銀色の睫を伏せぎゅ、と小さな手を握っている。

布団を敷いて正座して、すっかり体も冷えて時計を見てもう諦めて明かりを消してもぞもぞと入った。暗い中眠れないでいた。

「るりは何か間違いをしたのですか」心細く問う。「旦那様：」

ようやくとうとうとしてきた頃、から、と襖が開いた。吃驚して起き上がるが、その影姿に頬が自然と緩まる。

「お帰りなさいませ、旦那様：！」

「ああ、ただいま」

嬉しく、立って羽織を受け取ったりする。

「ごめんなさい、るりは先に寝てしまって、今日はお帰りにならないかもしれないと思ってしまっただけ」

男はとき、と布団に体を横にした。少し酔っているような気がした。

「もうお休みになれますか」

「ああ」男は瞳を瞑る。

女は布団を掛け、自分もおずおずと入る。

「旦那様：少し、良いですか」

「何だ？」男は片目を開けて言った。

「天のことなのですが、」

「また天か」男は少し不機嫌な声で言った。

「お怒りになってはいけないのですが：天はとてもいい子で、少し

悪ふざけをして言ってしまっただけなのですが、

「なんだ、今日は告げ口か。言ってみろ」

「本当に、大きなことではないのですが、」

「なんだよ、早く言え」

女はも頭をもぞ、と自分の足のほうに傾けて小さく言った。

「旦那様が、他のお女とお遊びになっていると思うと……天が」

「へえ」男は面白そうに口元を上げた。

「勿論るりはきちんと叱ったのですが、天はあまり聞いてくれなくて困ってしまつて、」

くすくすと男は笑つて女の髪を撫でた。女は頬を少し染めて男を見上げる。

「別にいいんじゃないか？ 事実だしな」

「え」大きな空色の瞳が揺れて見つめる。「だ、旦那様……？」

「近頃遊郭に可愛い娘を見つけたんだ。そいつと遊んだ」男は今だに髪を撫でながら言った。「少し昔のお前に似ているかもしれねえ。華奢で可愛い、大人しげな娘だ」

「え」

「俺が水揚げして色々教えてやろうと思っている。愉しみだ」男はくす、と笑う。「お前はすっかり床上手になつちまつたからなあ」

「旦那様……そう、なのですか」女は何故か無理に微笑もうとしたが、どう見ても無理があつた。男は我が意を得たりと可笑しそうにそんな女の様子を見ている。

「武家の子でな、末娘で哀想に遊郭に出されてしまったそうだ。

初めは慣れない様子だったが、今は俺が来ると嬉しそうにする。あの場には勿体ない綺麗な子だ」

「そうなのですか……それは良いことです。旦那様と出会えたのとはとても良いことです」

「嫉妬するか？ 瑠璃」男は笑いながら女の顔を覗き込んだ。「お前よりも随分と若い」

「いえ……るりも旦那様にはたくさん教えて頂いたので……」

「そうか」

男は手を離して自分の頭に組む。

「できるのなら……るりにも旦那様をお慰めできたらいいのですけれど」

「ん？」と男は横目で見て自分の帯を無意識にか摘んでいるのを微笑に笑う。

「慰められたいのはお前じゃねえのか？」

首筋を撫でると女はぼ、と顔を赤く染めた。

「今日はもういい。俺もそう若くねえからな」

男はくすりと笑って目を瞑った。女は赤いままもぞもぞ布団に潜った。



## 五・姿見

「いつてらっしゃいませ、旦那様」

「おう」

出て行く男を正座に笑顔で送り出して、女は立ち上がった。そうしてふらふらと廊下に行く。

「確かめてみたか？」

声がして、にやりと笑った息子がいた。

この様子じゃ凶星だっただろう。全く作り笑顔に嘘をつけない。

「はい…るりが間違いでした。ごめんなさい、天」

母親ぶるのも忘れてふにやふにやとまた作り笑いをした。

「…別に謝る必要ねえけど」

「はい…お洗濯をします」女はまた廊下を歩いていく。

「おい、」

女はぼんやりと振り返った。

「昨日のクッキー、食ってやつてもいいぜ」

「はい、捨ててしまったのでまた作ります…天はやはりクッキーが好きなですね」

また仄かに笑う女の肩をぐいと掴んで、自分の胸に压した。軽かった。

「天…？」

「気持ち悪い作り笑いすんじゃないやねえ。だったら泣けよ」  
ふる、と少し肩が震えた。

「天はとても優しいですね…旦那様にとっても似ていらっしゃいます」

「似たくねえよ、あんな奴」

「だめですよ、天」女は離れて忘れず嗜めると、言った。

「ありがとうございました、もう大丈夫です。るりはお母さんの

で」

そうして笑って、淡色の着物姿はとこと先に行く。

「歩く姿は百合の花：」背姿に息子は呟いた。

片付けている布団に水滴が落ちて、慌てて手で払った。しかし手に押されて雫は染みになる。

旦那様は、触れなかった。

口を吸うことも胸の中にすっぽりと入れてぎゅ、抱きしめることも、耳に優しい言葉を囁くことも撫でることも、何も無かった。

女は姿見を見た。鏡の中にいる女は、出会った時よりもすつかりと年を経ていた。もうあどけなさの残る少女ではなく、成熟した大人の顔つきだった。

いっそ人形だったら良かった。

そうすれば、いつまでも変わらない姿で愛しく思ってもらえただろうに。人間の機能を取り払うだけでなく、人形の機能を取り付けられれば良かったのに。

「仕方の無いことです、旦那様はお美しいのが好きですから…」

『お前よりずっと若くて、初々しい』

教えるのが愉しみて、教えてしまったらきつともう愉しくないのだ。

「もつるりは旦那様のお役に立たない…」

ぼろりとこぼれてぐしりと擦った。

「泣くのはいけないことです。とても我が侘です。るりは」

『お前が母親だ　できるな？瑠璃』

「るりはお母さんなのですから」

まだ旦那様のお役に立てる。大事なお世継ぎをお任せくださっているのだから応えなければならない。

美しくなった。

ようやく出来上がった真珠を眺める心地だった。髪先から爪先まで白く光り輝いている。姿のどこをとつても美しい。心もからめとるように手に入れて、体も思う通りにできる。それでいて何時までも生娘のようだった。これほど完璧な女がこの世に二度といるだろうか。

子も為せず世から匿った、むしろその故にあれ程の美を為せたのではないだろうか。全くものは捉えようだ。

後少し辛抱するか、と思った。あいつが泣いて抱いてくださいと縋つて来たその時真珠は真円となるだろう。ここまで待ったのだから後少し辛抱できないとうことはしない。それまではそれはそれで苛めるのを愉しめばいい。

「千次様、なにかお考えですか」

「妻のことだ」と笑うと膨れ面をする。しかし男は気にせずまた何か思索に耽るようだった。

天もそろそろ本邸に移すか。

息子の存在があると俺のいない寂しさを紛らわせちまう。それに天も頃合の年だ。そろそろ元服させて、本格的に跡継ぎとして育てる時期だろう。

それに、俺に似ていると言うから少し気に掛かる。瑠璃の美しさに目が眩んでは面倒だ。血が交じっていないと判ってしまう前に本家に離そう。

漸く意識を戻したかと思えば、男はすぐに身なりを整えて畳を去っていた。

## 六・針子

「つ、」

針子の途中、針が刺さって赤く濡れた指を口に含む。ちゅぷ、と舐めて、それから丁寧に舐めてしまう。細く長い、けれど男の手つきのあの指を想い出してしまった。そう、舌はこういう風に指に遊ばれて……自分の指を口に入れ、目を瞑った。歯や舌の口の中を弄って、それは自分の指でないように感じて止まらなくなってしまった。

「は、あ……」

唾液に濡れた指を見て、体が芯から火照っていた。正座の足が尻から離れて崩れ、いけないと思いつつその指は着物の袂に差し込まれ肌着の上から乳をなぞってみる。気持ちよさが頭を痺れさせていた。もう片方の手も胸に伸び、柔らかいそれを揉む。

「ん……旦那様……旦那様……」

かたりと音がしたのには気がつかなかった。す、と襖が引かれたのには気がついた。刹那止まり、そして体中が一気に燃え上がって、下を見るしかなかった。そこには息子が立って見下ろしていた。

「よ、天……どうしたのですか」女は恐らくさりげなくを装って着物を直しながら相変わらず真つ赤に下を向いて言った。手は針を持って急いで縫っている途中を始めるが、縫い跡はばらばらになった。

くつく、という笑い声が聞こえた。男に余りに似た笑い方思わずもしかしてと思って僅かな希望に縋って見上げるが、やはりそれは息子の方だった。

「そりゃあ、欲求不満か」

笑いを噛み殺した声で見下ろしている。

「こ、これは、これは違うのです。違うのです、天、」

女は細く言って針も糸もこんがらがって動きが止まる。

「針が刺さってしまったて、それを舐めて、」

とん、とんと近づいてくる。

「そう隠そうとしなくとも、別に見下してなんかないぜ？」

「天……」

女はどうしていいか判らず、ちよつと見上げようとした。そうしたら案外に顔は至近にありますます赤くなる。男の若い頃よりもつと若い、出会う前のその人がいるようだった。いつの間にこんなに大きくなったのだろう。赤ちゃんだったのに。小さな子供だったのに。もう自分より背が高い。

「俺もだ」

くい、と顎を持ったのに、ひやりと背筋が寒くなった。

「よ、天……？」不安げな声になってしまつて伺う。

「ばあか」

くす、と笑つて手が離れた。

「何構えてんだよ。流石にそこまで馬鹿じゃねえ」

相変わらずどこか可笑しそうに、しかしどこか呆れたように息子は襖に手を掛ける。

「ちゃんと閉めろ、息子をまともに育てたかつたらな」

頼むぜ、とさりとともう一度笑つて出て行った。

蟲惑的な黒の瞳と意地悪な笑み……あれほど似るなんて、血とは濃いものだ　と女は思った。

「天を屋敷に戻す」

女は複雑な顔をした。それから哀しそうにしかし諦めたように「はい」と小さく従つた。

「意外だな」と男は本当にそう思った。

「また後少し後少しと縋るか裏切られたような眼で俺を見るか、泣き落としに出るかと思つた」

「まあ、どうしたところで変える気はねえが」

「るりの気がつかない内に、天はとても大きくなつてしまつていま

したので…天の為には、お家でお過ごしになるのがよいと思います。るりのお教えられることはずっと前からなくなってしまうていたのに…るりはいけないことをしていました」

「……」男は女のやけに聞きわけの良さに得心いかなかった。それから微かな不安がよぎる。

「まさかあいつに、何かされてねえだろうな？」  
びくりと女は動いた。

「違います、違います、そんなことはありません」

「何だ、そう慌てて。何をされた？」

周囲を灰にしそうな低い声で、女は泣きそうになる。

「本当です、旦那様。るりをお信じになってください」

「信じよう。偽り無く話せ」

その瞳から逃れるように四方に落ち着き無く瞳を動かすが、遂に女は観念する。泣きそうに震えながら俯いた。

「るりはお裁縫をしていて、その針を刺してしまったのを舐めて、それでどうしてか旦那様の御指を思い出してしまったら体が熱くなってしまうて、るりは旦那様を思い出しながら自分で自分の胸を撫でてしまったのです…。それを天に見られました」

女はかああと真っ赤になって自分の小さな拳をぎゅ、と握る。

「けれど、天はるりに何もしません。扉をきちんと閉めると言って出て行きました。天はるりの様にはしたなくなく…とても冷静で、とても大人だと思っただのです……」

「ほお」と男は面白そうに聞いていた。

「全く、息子に痴態を見せるとは母親失格だな」

女の瞳からぼろりと大粒に涙が落ちる。

「それで、俺のことを思い出して？」

「はい…ごめんなさい。るりはとてもはしたないようです…」

「最近はお話をしなかつたからな」

男はにやりと笑って顎を持ち、涙目のその顔をあげさせる。

「お前が強請るなら、その体にまた教えてやってもいいんだぜ？」

「はい、旦那様…るりをいい子にしてくださいませ」

「駄目だ、もつと本当を言え」

口元の近くで言われ女はふるふると唇を震えさせた。

「ごめんなさい、旦那様。とても欲張りなことですけど、本当はるりは旦那様に抱いて頂きたいのです」

「それで？」

「お願いします。るりを抱いて下さい、旦那様…」

涙に震えながら頬を染める、この世に無い程美しい氷の精のような女を見て、男はにやりと笑う。

「いいだろう」

噛み付くように吸い付き吸い付かれ、歓喜の震えを男と女は一つにした。

## 七・祝誕

一人になってしまつて、以前に一人でこの家に居たというのが信じられなかった。

「天……」

一見は無愛想だったけれど、優しくつたように思う。何かとは言えないけれど、届かないものをさり気なく取ってくれたり、食べ物を残さず、失敗したお菓子も眉も動かさず食べてくれたし、よく仕組みの分からないものを直してくれて、刃向かったりしないで大概自分の言うことを聞いてくれた。邪魔しても怒らなくて、家に居てくれて、祭りに行こうと言えば仕方なしにも付き合ってくれた。いつも何も言わなくても黙つたままさり気なく何とは言えない何かをしてくれるのだった。

甘やかしていたのではなく、なんだか自分が甘えていたようだ。時々旦那様のように意地悪に笑う時もあるけれど、自分に合わせてくれる存在は初めてだった。

「天は元気にしていますか、旦那様」

そう聞けば、「さあな」と答えるのだった。

「寂しくしていないといいのですけれど」

「何を寂しいんだ？屋敷の方が人は大勢にいるだろう。他の貴族と交流だつてあるだろうしな」

「あ、それはそうですね……」

「寂しいのはお前なんだろ？」

男が聞く。

「全く、許せねえなあ。お前は俺のことだけ考えてればいいのに」

「旦那様のこともたくさん考えます。るりは今とても幸せです」

「そうだろ？もう天は忘れていい」

「え」女は目を瞬かせる。「それはいけません、旦那様……るりはお



母さんなのです」

はあ、と男は深く溜息を吐いた。

「流れる血よりも飲む水の濃きかな」

月日は経って、寒空を見上げて花に水を遣る。

一度もこの家に帰ってきはしない。旦那様が帰っていらつしやるのだから一度は顔を見せてくれても良いのに、と思うのは我侭なのだろう。三人で食事をしたり、どこかへ行ったりしたことはない。だけれどももしもそんなことができれば。ふるふると首を振る。一体いつからこんなに欲張りになってしまったのだろう。

「何か甘ったるい匂いがするな」

「あ、」と振り向き笑顔になった。

「お帰りなさいませ、旦那様。クッキーを焼いているのです」

「クッキー？お前が？」

「はい、旦那様。天はるりの作ったクッキーを好きでした」嬉しそうに女は男を見て言う。

「へえ」男は何故かちよつと不機嫌になった。女は急いで言う。

「もしできたのなら旦那様にも召し上がって頂きたいです」

「俺はいい。甘いものは嫌いだ」

それからしょんぼりとした女の体を包む。

「お前なら食べてもいい」

首を舐めて、ひや、と女は耳を赤くした。

朝出て行く時になって、女は後ろ手に何か持っていた。

「なんだ？」

いつまでもおずおずとしているのでいい加減に聞く。

「あの、今日は天のお誕生日なのですが、」

「そうなのか？」

「はい、旦那様。それで、るりは何も大きなことをできませんが、女はぐずぐずと止まる。」

「なんだ？」

「や、やはりなんでもないです。　　いつてらっしゃいませ、旦那様」

男はぐい、と女の腕を掴んで引き出した。手紙つきの、リボンをつけた包みがそこにあった。昨日のいつの間に用意したのか、風呂の間か、俺の寝ている間か。甘い匂いのするそれを取り上げた。

「あ、」女は不安げに慌てる。

「天に渡せばいいんだな？」

途端にはにかんだ笑顔になった。

「ありがとうございます、旦那様。旦那様はやはりとても優しいです」

「お前にだけな」

男は微笑し女の前髪をあげて額に口付けた。

「行ってくる」

「行つてらっしゃいませ、旦那様」花のように女も微笑んだ。

面倒だがしかしこれは今日中に確実に手渡さなければならぬだろうと、長い廊下を西に西に歩いた。全く遠すぎる。と思うのは、大分俺もこじんまりしたあの家に落ち着いてきたかな、と秘かに笑んだ。

近づくにつれ、そこらの家臣が千次様、千次様と驚いて騒ぐ。旦那様がいらっしゃられたと慌てて走るのを「大げさにするな」と止める。

「天はいるか」

「は、いかなる御用事であられますか。承り仕りまするが」「いいから通せ」

そうして先に先にと歩き、ようやくその扉を引く。

から、と開けて、大きな机にいるその息子が視線を上げた。互いに何も言わない。

「瑠璃からだ」

そう言つて奥まで大分距離のあるそこに投げると、慌てもせずばしりと余裕で受け止めて、ち、と思わず舌打ちした。

長居は無用、というか実際には部屋に踏み入れずにくるりと踵を返す。

「親父、」背後からの鋭くひゅ、と空気を切る音に、振り向きもせず後ろ手で受け止める。

「初めて言われるが想像以上に身の毛がよだつな」男がそれを見ると、花の咲く木の枝に何か和紙が括り付けられている。

生け花のそれと同じらしいが、既に用意されていたのかこの場で即時にに用意したのか。自分ならばできる自信はあるが。

「残念だな、瑠璃は和歌は解らないぜ。必要がねえから教えていない」

「知っている」くす、と息子は笑った。

「送れば自分で読もうと懸命に勉強しだすだろ？あんと遣り取りする必要はなくても」

「ほお」穏やかな口調で、力も込めてないようなのにしかしぼきりと木の枝は折れた。

「しかし俺が人の運び人を承つてやると思うのは甘いんじゃないのか？例外はこの世に瑠璃だけだ」

「あの家には踏むどころか文さえ届かない」

嘆かわしく溜息をついてみせる。

「天下の霧崎家当主の妻と息子、その二人だけ住まう家によくも悪党も媚売りも寄り付かない訳が出てみて初めて分かった」

「瑠璃を無防備に放つて家を出る訳がねえだろう」

くす、と男は笑う。

「息子への祝に一つ見逃してくれねえか」

「残念だったな」男は和紙を紙飛行機にしてひゅるりと部屋に飛ば

し口元を上げる。

「俺はお前の誕生を祝ったことなどない」

だが、と言って折れた木の花を摘む。

「生ける花の美しさに免じてこれは届けてやろう  
てやらねえけどな」

花言葉は教え

男はふ、と笑って出て行った。

「本当、意地の悪い親父だぜ」

生けた花を眺めて彼は呟いた。

## 八・切花

「天がこれを瑠璃に？」

女は花の咲くように無邪気に顔を綻ばせた。

「届けていただいてありがとうございます、旦那様。とても綺麗です」

木の枝に一つ咲いた花を慈しむようにちょっと触る。木枝の端は水を含んだ綿をつけていて、花はまだ水水しく咲いていた。

「とても嬉しいです。天はるりを忘れてしまいたいのかと少し思っています……」

ちよつと涙ぐんでさえいる。

「なんで忘れたいんだ？やはり何かあったのか」

「いえ…旦那様は怒るので言えませんが」

「隠せば絶対に言わせるとそろそろ分かれ」

男は木枝を取り上げた。

「あ、」と女は切なそうに声を上げる。

「言わなければこの花を摘む」

「旦那様はそうしません。お花を大事にする方です」

「そうか？ただ観賞する為に命を短く切り取って、こちらで造作を加えて針に刺して飾るんだぜ？お前の様に、野にある花を愛でている訳ではない」

「けれど旦那様はお優しい方です」

「はいはい、お前にだけな。全く、便利な殺し文句だな」

男は返して軽く溜息を吐くと今度は撫でた。

「ほら、言ってみる。隠し事はいけないだろう？」

「はい、旦那様」もじ、と女は少し手元に俯いた。

「るりは身分が相応しくないのです…天がそのことを言われたら、とても辛い思いをすると思って」

言い切った途端にぐに、と頬を引っ張られていた。

「は、はんなはま、ほほらはいへふははい」

「怒ってねえ。少し傷ついた衝動だ」

手を離して男は言った。

「お前の身分？俺の妻で不満があるとは知らなかった」

「それはそれはとんでもありません、旦那様。旦那様の奥様のお役目はるりの身に余ってしまつて、るりは幸せで今も信じられない程です。そうではなく、」

「今も信じられねえ、て…お前…お前を妻にしてから一体どれほど経っていると思つてゐるんだ」

女の言葉の途中で男はくたりと女の肩に手を置いた。

「しかも微妙につつかかるが、役目と言うな。お前は正真正銘俺のただ一人の妻だ。戸籍でもそうなつてゐる」

「え。それでは本当に天はるりがお母さんとなつてゐるのですか」  
きらきらと空色の瞳が輝いたのは一目瞭然だ。

「継母つてやつか…まあそつなるな」

男は少し嫌そうに答えた。

「なんだか腹が立つなあ。お前は離れてゐる方に情が行くようだ。どちらにせよつまらねえ」

「そんなことはありません。るりは旦那様も天も同じほど……」

女は遠慮がちに口ごもつたが、促すように軽く眼を眇められて、ごによごによと恥ずかしそうに先を続ける。

「あい…してゐるのです」

出過ぎた言葉でないかとちら、と伺い見る。

「同じ程？」

男が聞きとがめたのは違う箇所で、今度は本当に睨んだようだった。

「聞き捨てならねえな。俺とあいつが同じ程とはどういうことだ？」

「違う気持ちですけれど…」

「当然だ。同じだったなら許さねえ。しかしそれにしても半分もお前の心を持つて行かれるのは許せねえ。前は全部俺のものだと言つた

「じゃねえか」

男は女の体をひよいと抱き上げた。

「どうやらきつく仕置きをしてやらないと本当のことを言わねえらしいな」

「あ、旦那様、旦那様の方を少し大きく思っています！」

「少し？」 必死になりだしたのに構わず男はとんとんと歩く。

「とてもです、旦那様！」

「どちらにせよ嘔吐きには仕置きだ」

「旦那様、嘘ではありません。旦那様をととても想っていて、天もとても考えていて、それで半分にはならないのです。るりの心はその分だけとてもとても大きくなるのです…！だから旦那様、」

「まあ良いとしてやろう。しかし今日はなんだか気に食わない日だから付き合え、瑠璃」

「はい、旦那様。るりはいつでも旦那様にお付き合いさせて頂きますけれど…」

女は空気の抜けたように大人しくなったが、男の着物をしかと掴んだその顔は強ばっていた。

「いい子でいれたら褒美もやる」くす、と笑って男は抱えた女を黒の流し目で見下ろす。

「ありがとうございます、旦那様」

女は男に身を任せるようになっていたりとして、どこか諦めたようにやはり浮かなかった。

「名前を呼べ」

「千次様 お仕置きの際はるりにとても厳しい…」

「虐める程可愛く鳴くからいけねえんだ」

「気をつけます、旦那様…」

「そうしてくれ」

男は笑って女を撫ぜた。

## 九・本邸

「瑠璃、お前も来い」

玄関口で女を引いた。

「え」

「お前は俺の妻だと、お前も他も認識する必要がある。暫く本邸で生活しろ」

しかし女は足を板に踏ん張った。

「るりは今でもとても幸せです、旦那様。るりは旦那様がお認めになつてくれるので十分なのです」

「可愛いことを言つて、本当はお前はあそこに行きたくないだけだろう、瑠璃」

「旦那様は高貴にお育ちになつたので分からない……るりはあそこでは息ができないのです」

「俺だつて今となつては息苦しい」

引つ張られるのを懸命に後ろに体重をかける。

「どうかお許しになつて下さい、旦那様。そぐわない場所にいると良くないことが起こるのです。るりはそれがとても恐いのです」

「まあ、お前はあそこで殺されかけたりと散々酷い目に合つたからな……」

憂う表情になつて手が緩んだ。その弾みで女はとん、と後ろによりける。

「しかし心配するな。俺が守つてやる」

よろけた女を支えて男はきっぱりと言う。

「それにいい子にしていたら、たまになら竜や天に会わせてやつてもいいんだぜ？」

「え、天と竜に……」

女の足が緩んだ隙に、男は女を掬いあげて浚う。

「あ、旦那様！」



「それになるり、お前を本当に幸せにするにはお前自身も戦わなくては駄目だ。自分で努めなければ自信はつかない」

「そしてお前の幸せは俺の幸せだ」

男はにやりと笑う。

「愛する俺の為に、その卑屈な根性を叩き出してみせろ」

「できるな？るり」

抱き上げられたまま手を取って見つめられれば、こくんと頷くしかなかった。

「はい、旦那様」

それに黒い眼差しはとても強い意志の力に満ちていて、揺ぎ無い自信の一欠片が注ぎ込まれてくるようで、女は夜のような黒の瞳を眩しく想った。

「よし、堂々としているよ。初めが肝心だ」

化粧に着物、はたはたと人が動くのにぼっと突っ立っている内に支度は済んでしまった。その間、鶴の一声の瞬く間に家中の主な家臣や使用人が集められていた。

「旦那様…るりは何をすればよいですか」

「何もしなくていい。俺の傍に立っている。余裕があれば微笑んでやれ」

「こうでしょうか」

女の引き攣った口元に男は苦笑する。

「それはやめておけ。家臣相手に緊張を見せるな。そうだ、お前は昔無表情が特技だっただろう。あれを試してみろ」

「特技ではないのですけれど…やってみます」

女はそう言うのと表情は消えた。というか、生気が消えた。本当にどうなっているのか、人形そのものだ。

「微妙だな。しかしかちこちよりはまあいいか。もういいぞ。」

戻れ」

男が声かけるがどうしたことが反応はなく、頬をつんとつついても人形のままだった。

「おい、悪ふざけは終わりにしろ」ぴくりとも動かず、男は心配そうな表情になる。

「瑠璃？」

心配気に女の唇を触って、それから食らうように口付けた。

「ん…ふ、」

ようやく頬に赤みが戻って解凍でもされたように頬が柔らかくなつたのを感じ男は口を離した。

「どうしたんだ、俺の言うことをきかねえなんて」

「あまりころころとは切り替えられないものなのです、旦那様。るりも感覚を忘れてしまっていて、戻り方が難しかったです」

「そんなものか。仕組みが全く謎だな」

まあ戻ってよかった、と男は安堵の息を吐いた。

「旦那様…やはりるりはこのままでいきたいとします。るりも忘れかけていましたが、なんだかあれは怖かったです。心がとても寒くなつて、るりは独りでどこかへ行ってしまうようでした」

「そうか、それは怖いな。悪かった、もうするな。俺も一瞬怖くなつた、お前が戻らなくなつたらと」

男は確かめるように女を腕に包んだ。

「今はとても温かいです、旦那様」

女は微笑んだ。男もその柔らかな春日のような笑みに表情を和らげる。

「それがいい」

男は頭を撫でて笑う。

「家臣は奴隷だったときのお前を見ているが、しかし今はお前は歴とした俺の妻だ。頼むから俺の伴侶であることを誇りに思ってくれねえか」

「はい、旦那様。旦那様と天に誇らしく思つて貰えるようるりは頑

張ります」

「大丈夫だ、お前は美しい」

男はふ、と笑って女の手を引く。

「さあ、行くぞ」

ひどく大勢の人がいた。まるで町の全部の人を集めたようで、初めてこんなにたくさんの人を見て、頭がくらりとした。皆こちらを見ている。とても怖くて、足が崩れてしまいそう。幾百のこの視線の槍からとても逃げたい。

ぎゅ、と手が握られて、男を見上げると少しも物怖じせずとても堂々としていて、口元は僅かに微笑を湛えていた。黒の瞳は何にも揺らぐ真つ直ぐで、全ての槍を吸い込んでしまっているようだった。皆しんとして、男の言葉を待っている。

「俺の妻だ」

旦那様は言った。拍子の抜ける程、たったそれだけ。

ぼーっと遠くから見るようにお顔を眺めていると、そして突然にこちらを向いた。

「こら、俺に見惚れていないで皆に顔を見せてやれ」

くすりと小突いていつものように旦那様は笑う。

「る、るりと言います。宜しくお願い致します」

上ずってぺこんとお辞儀をする。旦那様はくつくと笑う。

「自己紹介までするとは上出来だ。褒美をやるう」

そして男の唇が自分の唇を覆っていた。深く、深く、貪られて。いつものように、もうどこだかなんだか判らなくなつて、へたりと膝がつきそうになるのをかくと旦那様が抱きとめる。

男は女と自分の口を拭った。

「祝福しねえ奴は、いねえだろうな？」

不敵に言い放つと下にいる前の人たちがぎ、と膝を付く。それは

漣のように後へ後へと伝播して、瞬く間に幾千もの人達は一人残らず膝を付き深く深く礼を取っていた

男の家族のいる場所に息子の天がいて、凜々しくなった久々のその姿に一気に心が弾んだ。

「行くぞ、瑠璃」

「はい、旦那様」

女は揚々と晴れた笑顔で、男に付いて行った。

## 十・家族

「どうした、口に合わないか？瑠璃」

男の家族の揃った食事の席に座っていた。

進まない自分に男は上品な微笑のまま問いかける。上品。皆上品だった。行儀悪く食べてる訳ではなく、フォークやスプーンの使い方もよく見て真似て違くないように思う。だけれどもそこにいる四人の男達と自分とは明らかに違った。食事をしているだけなのに、皆品がありとても優雅だった。

決定的に違うのは育ちだと思えたが、しかし息子もそこに溶けているようだ。これまで自分と一緒に暮らしてきたとは思えない。やはり、貴賤は血からして違うのだろう。

天に自分の卑しい血が交じっていなくて良かった。

「まあ、こいつの作る料理の方がずっと旨いからな」

なんてことを。なんてことを。この国一流の選った料理人を召抱えてなんてことを。泣きそうになってふるふると首を振って必死に男に目で訴えた。

どうかそっと、るりをいないように振舞って下さい。

「ほお、それは是非食してみたいのう」

しかしあるうことが男の祖父が応えて言葉も無く静かだった食卓に話題が上る。

「何が得意なのかのう？」

自分に視線が投げかけられているようだが、口を僅かぱくりと開いたまま声が出ない。そんな会話を自分がしてもいいのだろうか。言い訳が無い。窮して気まずく雰囲気途切れかけて、男の口が開いた。

「肉じゃが」

そこでちょっと止まったのは、二つの声が重なったからだった。

男はもう一人、子を見殺して構わず続ける。

「あとは里芋の煮転がしたものが好きだな、俺は」

「そうかそうか、それは是非食してみたいのう。わしにも作ってくれんかの、瑠璃さん」

冷たい汗が背筋を伝って、目がちかちかした。帰りたい。この場からいなくなってしまうたい。透明になれたらいいのに。

「誰がじじいの為に女の手を冷たい水にさらさせるかよ。瑠璃は俺の為に作るんだ」

なあ？と悪戯な口元が笑う。

「何を縮こまっているんだ。ほら、食わせてやる」

男はフォークに人参を刺して差し出す。どうしていいか判らず泣きそうだった。ここで口を開けて与えられるなんて、ひどく恥ずかしいことである気がした。

「俺も飯が終わった」黙っていた息子が口を開いた。

「この家で良く使いそうな場所を母さんに案内してやるよ」

「それは無用だ」男はフォークの手を戻す。

「瑠璃はこの家にいたことがある。大体は頭に入っている筈だ」

「そうか、」

男の言葉に特別な反応は示さず、ご馳走様、と先にそのまま席を立って広間を出て行ってしまった。

「さて、もういいのか？お前がその様子じゃ此処にいる意味は無え」  
こくと頷いた。ほっとした素振りに言い訳するように小さく付け足す。

「るりは少し食欲が無くて」

そう言う「じゃあ行くか」と席を立つ。

「千次、」

男の父親が初めて口を開いた。

「話がある、お前はここに残るのだ」

ち、と男は舌打ったがこちらを向いて「一人で戻れるか」と聞い

た。

「はい、旦那様。るりは道を覚えています」と答えて立つ。自分は席を外した方がいい雰囲気だ。

早足にその部屋を出た。ばたんと閉めて、何か逃げるようで落着かなかった。

きつと何か失敗したのだと思う。どうしてきちんと食事を食べられなかったのだろう。会話もできなかった。今思えば、特別な晩餐だった気がする。旦那様はいつも帰ってきていたから、普段はご家族と食事を一緒に取らない筈だ。自分を家族として認めてもらえるように特別に会食の場を用意してくださったのかもしれない。貴族に交じってきちんと振舞えるか見定められていたのかもしれない。この食事の前、『お前は普通にしていればいいからな』と安心させるように手を握って言っていた。緊張してしまわないように言ってくれた、きつと大切な言葉だったのだ。

どうして自分はこんなに間抜けなのだろう。

普段は聞きそうに無い父の言葉を聞き入れ自分を帰らせて残ったのは、自分の余りにひどい態度の埋め合わせをして、何か庇っているのかもしれない。

どうしてこんな自分なのだろう。

釣り合わなさ過ぎるのに。目元がじんわり熱くなるのを慌てて引っ詰め部屋に戻るまで考えないようにして足早にてこてこと歩いていった。

きつと天も呆れている。よいお母さんらしくなかった。

「るりはやはり相応しくないのです、旦那様……」

呟いて、こんこんとノックがなって吃驚した。部屋に帰っても帰った訳ではなかった。

旦那様はいない。

女は軽いパニックになっていた。自分が出て行くべきなのだろう

か。いない振りをしては駄目だろうか。

それきり、しいんとしている。もう帰っただろうか。女は立って、ドアの方に近づいた。そろそろドアノブに触る。開いてみると人がいて、また竦んでしまった。旦那様より若く天より年上の若い男の人だ。

「お休み中失礼致します、瑠璃様」

「あの、いえ、」しどろもどろと答える。なんだろう。出て行けと言われるのだろうか。

「これをお渡しするよう天様から預かっています」  
そうして薄茶の包み紙を差し出した。

「天…？」

思わず両手を差し出すと、そこに丁寧に包みが置かれる。つしりと何か入っている。

「はい。では私はこれで失礼致します。お休みなさいませ、瑠璃様」  
そうして恭しく去っていった。

ちよつと呆然とした後、それをテーブルに置いて、早速細い紐を解いてみる。

包み解くと、ふわりといい香りがしてそこに干し芋が現れた。

「これは…」

ぐーっとお腹が鳴ってしまつて恥ずかしくなる。

「天、有難うございます」

そうして一つ手に取り、齧る。甘くてとても美味しかった。くにくにと噛みながら、やはり頑張らなければと思った。天のお母さんで、そうであるためには霧崎家次期当主の母親なのだ。

干し芋のお礼をしたくて、お話がしたくて、そわそわした。

ひょこんと扉から顔を出し、どこまでも続く廊下に出る。部屋の場所は分からなかったけれど、歩いていけば誰かに会うだろうから、聞いてみよう。

女は干し芋をそこにのけたまま広い部屋を出て行った。





## 十一・干芋

こんこんと戸を叩く。

「天、天、お母さんです」

扉が開いて黒髪の子が現れた。

「天はせいが伸びましたねー」

寝台に腰掛け息子を見上げる。ソファも何も調度品が無い。広い板張りの部屋に、大きなベットと机しかなかった。それと幾つか生け花が床に置いてあった。だが部屋が広すぎるせいもあって殺風景だった。

「元気にしていましたか」

「ああ、それなりにな」

隣に腰掛け布団が少し沈む。

「母さんは？」

「お母さんも元気でした」微笑んで答える。

「今」

「今は…今も元気です。天と近くにいてお母さんはとても嬉しいです」

「そうだな」ふ、と笑う。「だけど無理はするなよ」

「はい、天。有難うございます。干し芋もとても美味しかったです」

「そうだろ？」にやりと笑う。

「下町から取り寄せさせているんだ。もっと食うか？」

「お母さんは十分頂いたので大丈夫です」

にこりと笑って言うとおぼすんと頭が膝に乗った。

「あー」と寝そべる。

「親父じゃねえが俺の舌もここより母さんのがいい」

「天が言くと本当に聞こえて嬉しいです」

額にかかる黒の髪をさらさらと撫で梳いた。自分の手から離れて

どんどん大人のようになっていてしまったようで誇らしく思  
いながらも少し寂しく思っていたが、こうしていると何も変わらな  
いやはり子供のようだった。

「母さん、歌を歌ってくれ」黒い瞳を開けて見上げる顔がそう言っ  
た。

「子守唄ですか？」

「そう言うな。何でもいい、母さんの歌う声は安らぐ」

「では……」

歌を歌い始めた。まだ赤ん坊で寝付かせていた時もすぐにすやす  
やと眠った。今も自分の膝で瞳を瞑って和らいだ顔をしている。凜  
々しく大人びた表情の抜けて、まだあどけなさの残って見えた。

眠ってしまったかな、と思ってゆっくりと膝をずらした。すると  
腕が掴まれ瞳が開いた。

「もう行くのか？」

「あ、そうですね…旦那様もお戻りになられているかもしれませ  
んし、そろそろりは戻ります。お礼を言ってお天のお顔を見るだけと  
思ったのですが、長く邪魔をしてしまいました」

「そうだな、もう帰った方がいいか。親父は自己が中心だから自分  
がいる間に母さんがいなくて俺のところにいると知れば不機嫌にな  
るだろう」

扉のところまで送られて、ちょっと振り返る。

「また少しだけお顔を見に来ててもよいでしょうか」

「ああ。昼の下がりに来い。そのときは空いている」

親父は仕事だしな、とにやりと笑う。

「では、おやすみなさい。天」

「ああ、お休み。母さん」

黒髪の息子の肩に手を置いて頬に口付けをした。そうしてから部  
屋を出る。来る前が嘘のようで、心は浮き立っていた。ここにきて良  
かったと思った。

ドアの閉まった後の少しの間、息子は頬に手をやり黙っていたが、

くると踵を返して机に向かった。

部屋に戻るともう男は戻っていてソファでくつろいでいた。

「これはお前のか？」

テーブルの上の干し芋に視線をやって言う。

「はい、干し芋です。旦那様も召し上がりますか」

「召し上がる？ 食い物なのか、これは」

「はい。お芋を干したものです」

「芋を干す？それでこうへたれて色の悪いものになるのか。何か粉も出ているぞ」

「るりは美味しそうに見えるのですけれど」

「お前は体が弱そうだから腹を壊さねえか心配だな。大丈夫か？」

「大丈夫です、元氣になりました」

「そうか。確かに顔色が良くなっている」

男は得心して頷いた。

「しかし食事の前にこんなものを食べるから食欲がなくなるんじゃないか」

「後でお腹が空いてしまつて、そうしたら天が届けてくれたのです」

「あいつが来たのか？」男は柳眉の眉を動かした。

「いえ、御執事様が代わつて届けて下さったのです」

「そうか、執事は出入りができるのか」と男は呟く。

「ところでお前、使用人に敬語を使うな」

「いけないでしょうか」

「いけなくはねえんだが、お前や使用人の意識を変えるのに言葉使いは役に立つ」

「分かりました。執事…さまが…」そう言つて口よどむ。「やはり難しいようです」

「そうだな」男は微妙に憂う顔をする。「俺も名で呼んでくれと言っているのに、いつになっても同じままだ」

「俺の横暴に嫌なら嫌と言って、たしなめたい時はそうすればいい。それなのにお前はせいぜい困った顔をするだけで我慢して、俺に対して嫌な気持ちを溜めていくんだ」

男は女を自分の横に座らせ向かせる。

「俺は我慢しねえ。お前に自然に名を呼んで貰いたい。竜之介や天に嫉妬をさせるな」

「千次様……るりは千次様を嫌と思っていません」

「俺は嫌だ。俺を嫌な男にさせるな。勝手ではあったが、こう欲の強い男では無かった。以前は世の全てに淡泊で、流れに逆らうことも面倒だった」

「それが今では、何をしてでもお前を手に入りたい。心の全てを俺で占めさせてえ」

銀の縁に収められた淡い水色の瞳を宝石に魅入るように見つめ、少しの溜息をつく。

「全く心が落ち着かなくなってしまった。使用人どころか友や息子でさえ、男は男に見える」

ちよつと微笑をして銀系の髪を掬い、指の隙間からさらさらと零れ落ちるのを川の流れの様に眺める。

「お前は相手が俺でなくとも愛されればそれで幸せを感じるんだ。俺が死ねばお前はきつと流されるままに他の男を受け入れるだろう」「そんなことはありません、旦那様。るりはずっと旦那様のものです」

きゅ、と男の衣服を掴んで言うが、その様子に微笑を向けて男は続ける。

「どうしてお前を責められるだろう。お前は拒む力を切り取られてしまったんだ。そうしてそれで俺はお前を手に入れた」

「旦那様はるりの言うことを信じて下さない……」

女はしょぼんと頭を垂れる。男はそれを撫でた。

「お前は俺を俺として見ないようにしているんじゃないのか。主人や旦那と呼んで、仕える者が代替しても差し支えないようにして。」

恐れ多いなどと言うのはみせかけで、本当の意図はきっとそういう風に骨の髄まで染み込まれたんだ」

「旦那様の言っていることがるりは良く分かりません」

「つまりは、」男は笑った。「俺を名で呼べと言うことだ」

「はい、千次様」

女は男が笑ったのでなんだか笑った。それを見てまた男も笑った。

## 十二・許婚

三時の頃に行くと、茶菓子が用意してある。今日は牡丹餅を食べていた。

「天は甘いものが好きですか」

それを自分も貰いながら聞く。いつの間にやら部屋にはソファとテーブルが置いてあった。

「何でもいいが、腹が空く」

「とても頑張ってお勉強しているのですね」

「そうだな、何でも習い事をしているのかと思う暇もない。俺は随分と遅れているらしい」

お茶をずず、と啜ると「親父より」と言ってくすりと笑った。

「それはお母さんが悪いのです」とちよつと俯いた。

「天とずつと離れたくなくて、家に行くのを遅らせてしまったのです」

「いや、それ以前にだ。まあどうもあの人は歴代でも特別らしいから気にしていない」

「例えばどんなことを習っていますか」

「挙げたら切がないが、諸学問に実学、教養だな。異国の言葉を幾つかと国際法というのもある。後は礼儀作法に和歌や楽器や生け花、茶もあれば能の鑑賞もある。実は結構楽しんでる。特に武術を」

笑って腕をまくると紫の痣が体中にあつて女は息を飲む。

「とても痛そうです。天、きちんと手当てをしなければなりません」  
女が寄って来るのを押しとどめる。

「これくらいで手当てしていたらかえって動きにくくなるだろう」

「やらなければならぬのですか」お母さんもとても痛くなります」

「あんたは俺に親父のようになって欲しいんだろ？」

「天はもう優しくて立派です。お母さんはとても誇らしく思います」

「俺はやりたいんだ。力を持たなければ何もできないからな」

「天は何かをやりたいのですか」

「さあ。だけどやりたいと思ったときに弱い自分を見るのは嫌だろ  
う?。」

「そうのですか。天はとても強いのですね。お母さんも見習わな  
ければなりません」

「母さんなんかは、守られていればいいんだよ。そういう為に俺達  
は力を持ちたいと思うんだから」

「お母さんも何か役立てたらいいのですけれど」

「じゃあ夜食を作ってくれよ」

「分かりました。お母さんはお夜食を作ります」

女は嬉しそうに笑った。

「台所を貸して欲しい?」

「はい、旦那さ…千次様のお食事を作られている北のお台所を少し  
使わせて頂きたいのです」

「なんだ、俺の飯を作ってくれるのか?」

男は微笑をして面白そうに髪に手を巻く。女は少し考えてから言  
った。

「るりはすることがなくなってしまったので、何かしたいと思って」  
しかしぐに、と両頬を引っ張られる。逸らした目が思わず上を向  
く。

「ほめんなはい」そう言うのと離された。

「天のお夜食を作りたいのです」

「全く」頬をさする女を笑いながら見る。「吐けない嘘を吐くな」  
別に、いいぜ。妬くと言ってもそこまで度量の狭い男じゃねえ。

お前が俺のいないのを見計らって天の部屋に遊びに行っているのも  
知っている」

「そ、」と女は言って頬を赤らめしどろもどろに弁解する。「見計  
らったのではなく、旦那様がいなくなるとるりは手持ち無沙汰とな



つてしまうので、少し、」

「はいはい」男は頬を撫でる。

「ついでに俺の分も作れよ。それと、天には使用人に届けさせる。夜にふらふらするな。寒くなってきたしな」

「はい。ありがとうございます」女は嬉しそうに笑った。

「それと今、名前で呼ばなかったな？」

「あ、」

にやりと男は笑う。

「さあ、早く作って来い。夜食を頂いたら賸けてやろう」

ぽんと押されたのが尻で、女は頬を染めながら二人分の握り飯を作りに向かった。

「別にいいんじゃないか、決めなくて」

「ならん。お前で緩んでしまった杵を締めなおす為にも、天にはきちんとした者を嫁がせる」

「蒸し返すなよ、俺の選んだ女がきちんとしていないと言う気か」

「お前にはいい加減にもう失望した。何も言わん。こうなれば一刻も早く天を叩き上げて当主を継がせるしかあるまい」

「俺は別に当主じゃねえけどな」

「私は認めん。この家の当主はお前だ」

「どっちなんだよ、俺を認めているのか認めていないのか」くつくと笑う。

「爺さんだつて認めたじゃねえか。あいつがあんたと血を分けていると」

「今はその話ではない。天の許婚を決める話だ。お前で事を進めているかと口出しせずにはいたが、全く決めていないとはどういうことだ。もう位の高い者から決まってしまうて、遅すぎたらどうする」

「奪えばいいだろう？」くすりと面白げに笑う。

「そんな横暴ばかりを繰り返せばいつかは不満が雪崩となって押し

寄せる。高い位置に立つというのはその下に踏むものがあるからだ。踏み外せば一拳に転落してしまうものだ」

「なんか昔に習った覚えがあるなあ。良くそんな年で覚えている」

「お前は習いなおせ」

「そんな暇はねえんだよ」

「嘘を吐くな。お前の仕事の速さだけは認めている」

「全く、それも一日中瑠璃と遊んでいるつもりだったのに感謝しろよ。まあ俺の不在で家が傾いてあいつに勝手な責任を感じさせたくないからな」

「またお前は… どうしてそうも色欲が強いのだ」

「できる男というのは往々にしてそういうものだ。親父も女を作ったらどうだ？俺も瑠璃がいなかったらそうも偏屈で心にゆとりの無い男になつていたかもしれないと思うと憐れだ。良く女なしで生きてこれたな」

「ふざけるのは大概にしろ。お前は目上の敬意というものが無さ過ぎる。御祖父様もお年召して伏せがちになって、今は私がこの家の意向を決める役なのだ」

「当主とは名ばかりで実務を仕切らせる操り人形。故に霧崎家は早い代替わり。こんな奴の言いなりになるなんて、天が可哀想だなあ」  
くすくすと男は笑う。たしなめるように男の父は言った。

「若くからに経験を積ませ、経験を積んだものが助言を与えるのが古来よりのこの家のやり方だ」

「ちなみに伏せがちとはどのじじいのことだ？今度瑠璃の髪の本にでも触ったら俺が息の根を止めてやろう。呆けた振りしてぶらつきやがって、あの放蕩じじい」

「そんな筈は無いだろう。御祖父様を侮辱するな」

「まあこの調子じゃ目を盗むのは楽だろうな、そういう意味に限りいい親父だった」

男はしみじみと言い、父はより一層眉間に皺を寄せる。

「話は分かった。屋敷に年頃の娘を集めて気に入った女を天に選ば

せよう。反応が楽しみだ。あいつは俺に似ていると人は言うが、遊びもなしで与えられたものを文句も言わずにこなす生真面目振りは親父側の人種に思える」

「お前に似たのが容姿だけなら本当に心が休まることだ」

「全く同意だな」

ふう、と初めて同調して男は立った。

「天のお嫁さんですか？」

「ああ、そうだ。お前も出席しろよ」

女は顔を輝かせた。

「るりもよいのですか、大事な席に」

「ああ、あの親父も出席させて、他の女と較べればお前の美しさを認めざるを得ないだろう」

「天の為ではないのですか」

「どうせ茶番だ、利用したっていいだろう。尤も、天に好みの女がいればそれで構わねえしな」

「るりは出席しなくてはならないでしょうか」

途端に曇った顔に男はどうした、と訊く。

「お若くてお綺麗で、御教養のたくさんある方達と較べたら千次様はるりにお飽きになることと思います」

「そうか、それは楽しみだなあ。お前を越える女がいるのなら見てみたい」

可笑しそうに言った男の言葉を真に受けて、女は浮かない顔をした。

### 十三・見合

なんだこれは、と溜息が出た。

元服の式を終えての祝いの会を開くと言った親父に不信を抱きはした。自分の元服に興味など無い筈だった。だがまあ母親に請われたのかもしれない、それなら無碍にするのも可哀想だろうと深くは考えなかったのだが。

「天様はお花を生けるのに素晴らしい才をお持ちなのだそうですね。わたくしの家は代々お花の家元をやっています、是非我が家において欲しいですわ」

「わたくしも多少の心得がありまして、先月の会では賞を頂きました。天様とお花についてお語りしたいですわ」

「嫌だわ、賞などと俗世なことを。お花は人の心と自然との対話ですのに。ねえ、天様？」

「わたくしはまだ未熟で…天様に何かご指南していけないでしょうか」

恐らく訊かれはしているが、何も答えなくとも話は争いでもするようにひっきりなしに飛び交うので無言でも構わないようなのが救いだった。

そこに居並んでいたのは全て女だった。自分より大分下のものも上のものもいるが、しかし大体は近い年頃のようだ。二十人近くいるが、それが全部自分を取り囲んで高い声で恐らく内容の無い言葉を喋っている。この交じり合う不協和音に耐えられなかった。別個で見れば着物に簪、お香と各々確かに美しく思える着飾りをしているのだが、その色彩や匂い、声の音調が交じり合うと甚だしく調和に許せないものだった。花花と言っているが、花だとしたらこう主

張し合つては美しいものも美しくはならない。

苛々は募つても顔に出さないよう必死で、それ故しかめ面になっているかもしれないが最初見た瞬間からげんなりしていたので、幸か不幸か機嫌の悪さには気づかれぬ。

心の中だけで溜息をつき、ちらと一段上がつて半透明な薄布のかかつている奥を見た。この状況にいる自分を見てくつくと笑う口元の男は視界から意識を消し、その隣ではらと自分を見ていた女と目が合った。それは澄んだ空色の瞳で、少しぎこちなくはあつたがにこりと自分に笑いかけた。

綺麗だ　と思わざるを得なかつた。

普段意識はしていなかつたが、自分の母親がここまで美しいとは知らなかつた。

その上悔しいことに、黒に近い着物の男と白が基調の着物を着た男女は顔立ちはとも整い、その色彩も背丈も雰囲気も何から何まで釣り合い調和しているように見えた。まるで夜に咲く一輪の白い花を思わせる。可憐な花は月光を浴びて白く輝いている。

そんなことを想い安らぎを取り戻しかけていたところに、男が断言するが、わざと見せ付けるように　肩を引き寄せ刹那に女に口付けた。離されてから女はかあ、と頬を染め、男は自分を見て不敵があるいは単純に面白気にか、くすり、と笑う。その瞬間にぴきりと顔が引き攣つたのが自分でも分かつた。

「天様？」

途端に心配気を装つた不満の声が漏れる。視線の先に気が付かれてそちらに視線をやられる。

「初めてお見かけしましたが美しい方ですわね、天様のお母様。とても珍しい髪と瞳をお持ちですわ。でもあの方　」

「なんだ？」　適当な相槌を除いて初めて口を開き、意識がはつきりと女に向かう。

「あ……いえ、あの　異国の血を引いていらっしゃるのかしらと思つて」

女は顔を赤くして、口を濁らせてから答える。

「そうだろうが育ちはこちらだろうな。母上は異国の言葉を話さない」

唯一はつきりしているのはその会話だけだった。後は、それから異国のことについて話が切り替わった気がするがよく覚えていない。

「今日はどうでしたか、天？」

「やっ」と長い長い、一日より長く思えた会が終わって母親が訊く。  
「無駄な時間だった」

仏頂面に答える。普段時間を切り詰めて勉強をさせているのに、こんなことに裂く余分な時間はあったのか。

「お前にとつては貴重な時間だったんだぜ？女というものを知る」  
親父は相変わらずくすくす可笑しげに笑っている。

「どの女が一番美しかった？」

「母さん」ふん、と答えにならない答えを答えてやる。しかし男は満足げに、

「そうだろうな」と答えた。それから今度は女に「分かっただろう？お前より美しい女などいないんだ」と言う。

「つまり俺は出汁だったってことか」はあ、と溜息を吐く。

「違います、天。お父様は天のお嫁さんによい人を探しているので」

「いや、出汁でも探している訳でもねえよ。単なる余興さ」

男は母親の肩を寄せる。

「一緒にになりたい女は自分で手に入れろ」

尤も、と男は笑う。

「優秀でいたいなら、決められた女と結婚するのがいいだろう」  
そうしてくるりと踵を返し、女も従おうとしたがしかしその手首を掴む。

「母さん、ちょっといいか」

「え」女は振り返り、ちよつと流し目で顔を後ろに傾けた男を伺う。

「『母さん』を困らせるなよ」

それだけ言つてすたすたとそのまま先を行つた。

## 十四・前掛

「なんでしよう、天」

子の部屋にいた。息子が立っているので自分も立つたままだ。何故かどこ知れぬ不安を感じていた。

「何緊張してるんだ？」笑って、座れよ、と促されたのでソファにおずおずとしゃがむ。

「母さんてさ、どうやって親父と会ったんだ？」

「え、えと」何故か女は口よどみ、水色の瞳を泳がせた。

「ここで働くことになって、それでお父様に出会いました」

「ふーん？」その様子に不信を抱いたのか、近づいてくると両頬を挟み瞳を覗き込んでくる。

「本当か？」

「ほ、本当です」

黒い瞳をちら、と見て赤くなり縮こまって答えると離されてぼつとした。

「ここで働いていたということは、どこかの貴族の娘だったのか？」

「違います…御祖父様 天のひい御祖父様の氣に入られて、旦那様のお傍に仕えることになって、」

何故かもう泣きそうになったのを見て、思わずその銀の頭を撫でた。この屋敷で貴族でないということは、色々辛いこともあったのだろう。親父は人の目も気にせずちよっかいを出して、それが妬まれたりしたのかもしれない。身分も無くてそれでも親父は無理に妻にして、きつとそれで家を別に持って暮らしたりしたのだろう。

「そんな顔するなよ。貴族なんかじゃなくても母さんは俺の母さんだ」

そう言つと顔を上げて大きな瞳でじつと見つめる。

「親父の血を引いているのは甚だ気に食わないが、あんたの子なら誇らしく思う」



「天…」

涙を溜めて見上げてくる母親から離れ、息子は引き出しから何か出すと戻ってきてそれをぽんと渡した。

「解いてみる」

包みを解くと、緑色の西洋エプロンがあった。

「いつもの夜食のお礼」

「これを…お母さんに？」

女はそれをまぢまぢとみて、笑顔になった弾みにぼろりとついに涙が零れ落ちた。それは雨上がりには花から雫の落ちるようで、相当に美しいと思った。

「ありがとうございます、天」

「付けてみるよ」

女はそれを首に通し、そして後ろ手で紐を結ぶ。型は不思議な程ぴったりだった。

「布を指定して、仕立てさせたんだ」こういうことができるのはいい身分だな、と息子は朗らかに笑う。

「天、天、お母さんはとても嬉しいですよ」

母親はくるとダンスするように回りひらひらするのを無邪気に喜ぶ。子供みたいな喜び方だな、と息子は苦笑した。

「お母さんは似合わないでしょうか」

苦笑にはたと止まり心配気に問いかける。

「似合ってる」

言つと花咲くように笑ったので、思わず目を逸らした。

「用はもう済んだから、もう帰れ。引き止めて悪かった」

「いつでも引き止めてください」とあまり訳の分からないことを言つて母親は嬉しそうに緑の布切れを抱えにこにこと出て行った。

最近思ふのだが、母親はあまり長くここにいさせたくない。

俺も妙に色気づいたな、と息子は微妙に苦笑した。

そつだ、女に見えることがある。一緒に暮らしてきた時には感じなかった。離れて暮らす間にどういふ変化があったのか。女から離

れて免疫というものがなくなつたのかもしれない。

俺もああいう女と似合うのだろうか、と父親と母親の並ぶ姿を思い出して未だ見ぬ相手をぼんやりと思い描いた。

「なんだ、それは」

大事そうに胸に緑の布を抱えて戻ってきた女に声かけた。

「天に貰つたのです。エプロンです」

嬉しそうにそれを広げ見せてみる。

「へえ…付けてみる」

「はい、旦那さ…千次様」

それを再びつけると、また羽が生えたように体が軽くなった。

「ほお」濃い緑色のエプロンをつけた女を見て男は目を細める。やはりこういう西洋物は良く似合うな、と思った。

「中々いい見立てだ。あいつの美的感覚の良しをみると、やはり俺の子のようだ」

「るりは似合いますが、旦那様 ではなくて、千次様」

はあ、と苦笑する。「分かった、無理に呼ばなくていい。ただ呼びたい時には呼んでくれ」

できないことを諦められて少ししょぼんとした。

「似合っている」男は笑う。「それに 何故だか酷くそそられる」  
「え」

「早くお前を揺すぶりたい」

「千次様…」女は滅多にないことに自分から男の腰にきゅ、と抱きついた。

「るりも千次様にとても御奉仕したいです」

「どうした？お前がそうも積極的とは珍しいな」

「るりにも千次様のお子を宿せるでしょうか」

「どうだろうな」

いつか言おうと忘れていたが、忘れたかと思っていたが、やはりまだ言えそうにない。

「たくさん頑張ります…千次様のお種をるりにたくさん下さい」

膝をぺたりと床につけて腰に頬をよせるのを、まあいいかと頭を撫でて思った。こいつの受ける事実の酷さを鑑みれば、言う必要もないことだ。

## 十五・腕試

腕試しをしてみようかと思って、験しに試みてみたら、危ういところでなんとか成功した。

やっとこの塀を越えることができた。

父親はもつと早くから屋敷の外をふらついていたそうだが、原則出歩くのは禁止されていた。無駄なほど嚴重に警備され、公式の許可のないと入るどころか出れない。特に跡継ぎは当主になるまで滅多に顔を表に出させないようになっていて全くという程外界から閉ざされていた。

とは言つても屋敷の敷地は広く、町の幾つ分もあつて庭どころか山もあり基本は自由に屋敷内を歩けたので特に閉塞はされていなかった。

少し昔、ふらりと一人若者が現れてふてぶてしく門番に入れると言ってきたそうだ。当然締め出そうとしたら逆に屈強な男達が瞬間に丸腰のその若者に捻り上げられてしまつて、次々となぎ倒して大騒ぎになった。その若者というのがなんと本家若旦那だった、という話を師範に聞かされた。

『全く、大丈夫なのか。ここの警備は』と呆れられて叱るどころかものも言えなかつたと言う。普通門の警備の者などは当主家族の顔すら知れないものだが、その若者についてはすつかり顔馴染みになった。ふらりと消えては堂堂と門外から帰ってきたらしい。勿論若者というのはあの親父のことだ。

時間と場所を見計らい、高塀を越えてこつそりと出てこれはした。しかし自分の体格の何倍もある門の警備を力づくで正面突破できるかどうかについては考えていない。まあなんとかなるだろう。

入るなと言うなら帰らなくてもいいしな、

ちらとそんなことを思ってから、やはりそんなことはできないだろうと思った。どうやら母親が人質の気分だ。失望させたくはない。

それにしても面倒だ。部屋を抜け出してからこの塀外に来るのに一刻もかかっている。折角だから久々に外の空気に触れなければ損だ、と街の方に向かった。

干し柿干し芋、漬物、飴などの菓子、雑貨の立ち並ぶのを久々に見た。

母さんと買い物に来たこともあった。と遠く思える昔を思う。その中で、簪の一つが目に残った。散々屋敷の物に目が慣れた今は子供の玩具のような質だったが、つくりは丁寧に梅の花を模した白い飾りがついていて、よく見ると薄く桃色に色づいているようにも見える。きっと心を込めて作られたものだろう、美しいと思った。

「坊ちゃん、気になりますかい」

店の男が顔を向けて言った。坊ちゃんと言われたことに何故か多少の抵抗を感じた。目立たない身なりにしてきたと思ったが、流石に商人は目利きのだろうか。年もあるだろうが、前の自分だったとしても手が届かない値だろうと相手にされなかったに違いない。「良く作られている」

母さんに似合うかな、と思ったところで手に入れたくなった。また過ぎる程喜んで無邪気に笑うのだろうか。こういった簪などあまり身につけているのを見たことがなく、あまり自分のものを持っているように見えないが、父親から何かものを贈られたりはしないのだろうか。やけにはしゃぐ様は、人から物を贈られたことが滅多にない喜び方にも思える。

「貰う」

店主が嬉しそうに手をこすり合わせて値をいったところで、おや、

物を買うのに代わりに金銭が要ることを思い出した。言えは何でも手に入るので、久しく買物というものを忘れていた。

「坊ちゃん、お付きの者とおはぐれなすったんですかい」

止まった様子に、店主は言うので、なんだか可笑しくふ、と笑った。

「またこれを見かけたら、お前の好きな言い値で買おう」

そう言うといへい、と店主は急に畏まった。

全く、自分も随分と偉そうな物言いが板に付いたものだ。

相変わらず自分を奇妙に思つて薄っすらと笑い、その店を立ち去った。

さて、と門に近づき氣の自然と締まる。前に立つとやはり二倍はある大男を見上げた。

口を開きかけたが、するとその大男達は少し驚いた顔をしてから、しかしそれから仲間内で得心したように大きく頷きあつて間を空けた。何か嬉しそくに口元は笑っている。

「お帰りなさい、若旦那」

そうは言つて置いて平伏もしない。屋敷の中の者達にはない、何か大らかさらしきものを感じた。

「何故、俺だと」

からからと男達は笑う。

「昔の若様に瓜二つのお姿だ」

ち、と舌打った。まさかこんな形でどうにかなるとは不本意と言わざるを得ない。

「その表情も、本当にお懐かしい。我々も年をとつたものだ」

「一つ違つのは、昔の若様は決まつて夜にお見かけしたことが」

「昼のお勉強をおさばりになつてはなりませんよ、若様」

楽しそくに、懐かしがるように自分を見ている。そんな注意まで受けた。あの仰々しさを思うと、こちらの方が親しみを覚え、無礼

だとは微塵も不快に思わなかった。

「お前達も貴族なのか」

「いいえ、我々は武士です」

「身分で言えば平民ですか。よく定まってはいませんが、傭兵専門の職です」

「傭兵が恥ずかしいことに、前代の若様には散々にしてやられました」

「俺もお前達に挑んでみようか。剣を試したい」

「勘弁してください、若様にしてやられても恥、押さえつけても罪となってしまうす」

「何だ、気の抜けてつまらないな」

「お口癖まで同じだ」

「からから笑うのにむっとする。」

「俺は口癖ではない」

「それは良かった。昔の若様のように我々で発散されては困る」

「それなら早く通せ」

ふん、と言うと素直に門は開けられて、そこを仏頂面に通って行った。

「楽しかったか、天」

くすくすと笑う親父がいる。母親は自分の傍に駆け寄っていた。

「ご無事で良かったです、天。天がいなかったのでお母さんはとても心配になってしまっ」

「心配も何も、前は街くらい一人で行ってきただろう」

「けれど天はもうお世継ぎなので、悪い人に狙われるかもしれないん」

「全く心配だ」親父が言うのと馬鹿にしているように聞こえる。

「腕の立つ者を一人つけさせよう」

「余計な世話だ」噛み付くように睨み付ける。

「お前の為ではないからお前の言い分は聞かねえ。瑠璃に余計な心

配をかけさせねえ為だ」

「そんな者、振り払ってやる」

「そうするといい」相変わらずくすくす笑って「行くぞ、瑠璃」と先を行く。

「旦那様は本当は天を想っているのです。御宗主様に伝わって警備の重くならないようにすぐにご配慮をされたのです」

少し声を小さくこそと言ってから、とた、と急いで後を従って行った。

本当も何も、母さんの注意が自分以外に向くのが嫌でそうしたに違いないのが本当だろう。だがなんにしる付き人を付けると言う意味は黙認したと言っていいだろう。尤も自分が散々放蕩だったというのに禁じられる言われはないが。

やっと黒背に追いついてしずしず行くのと歩幅に付いて行くのを懸命にやる母親を見るといつもいつも何か憐憫の情の湧くのだった。



## 番外・霧崎家の正月

「新春の御喜びを申し上げます」

正月元旦。

霧崎家の正月は挨拶に始まり挨拶で終わる。元旦、本家家族から始まって分家親類の来訪。二日以降、他貴族。ひっきりなしに来る挨拶を只管受けては返し受けては返して三が日が終わる。終えても出廷して皇族への挨拶。

全く、母さんとみかんを剥いてはごろ寝した寝正月が懐かしい。親父もいなかった。なんて幸せな正月だったんだろう。

そんなわけで。形式通りの口上を除いてまだ年明け一度も母さんと口を聞いていない。三が日落ち着けば真っ先に自分のところに来るかと思っただが、来ない。慣れない来客で疲れているのかもしれない。

まあ新年の挨拶をしてやりに行くことにした。蜜柑もある。きつと大げさなまでに喜ぶことだろう。

しかし戸を叩くが出ない。

「母さん？」

暫く待つて、いないのか、と思って帰ろうとしたところに、きいと僅かに扉が開いた。

「天……」

首から上だけを出して体は扉に隠れている。何かもじもじしている。

「どうしたんだよ？」

「あの…恥ずかしくて」

「はあ？」

「お母さんはお着物を着ていないので」

「はあ!？」

暫し呆然とする。つまり、

「……裸？」

「はい……」 白い頬を染めこくと頷く。それから神妙な顔になって話し始める。

「新年は、新しい気持ちを持つので今迄の御衣を身に纏ってはいけないのです。 るりはそれを知らなくて、新しいお着物の準備をしていなくて…… 挨拶の時は旦那様のお母様のものを特別にお借りしたのですが、今は着るものがないのです」

不届きだった自分を恥じるように申し訳なさ気にそう述べた。

「……あの変態」

ぼそりと呟く。

「天……ごめんなさい。けれど、お母さんは変態ではなくて、」

泣き出しそうになりながらも必死に弁解しようとしている。

「母さんじゃねえ。だが母さんも母さんで、何簡単に騙されてるんだよ。正月に新しい着物がなけりゃ裸で過ごす? そんな訳ねえだろあの変態色親父!」

「天……!」 母親がはつとした表情をする。まさかと思う時には遅かった。

「誰が変態だ？」

後頭部ががしりと驚づかみされていた。めりめりと指が頭蓋骨に食い込む音が聞こえるようだ。

「……離せっ」

「天、今なんと言った?」 後ろから低い声。

「あんたが変態だって言ったんだよ!」  
ぎし。

「うああああ!」

足先が床を離れる。それは頭を鷲づかみにしたままで。そんなの大男の所業に収めて欲しいが、一体どこにそんな力があるのか、この細身の男の片手のみに抛り頭を掴み上げられ宙に浮いている。まるで赤ん坊か幼児の頭でも掴むように。

思考がなくなるほど頭が痛い。歯を食いしばり必死に力を込めて顎を引いていないと頭が首から外れそうだった。脳みそが絞り取られるような剛力。拷問以外の何ものでもない。

「だ、旦那様！天の首が取れてしまいます！」

母さんが身を乗り出し、悲鳴に近い声を上げて親父の腕に手をのばす。その瞬間に突然頭から手が外れ、どさりと身が床に落ちた。真上から落ちた上にほとんど朦朧としていて受身もうまく取れずに腰を打つ。

「瑠璃：俺以外の男に肌を見せてはいけないだろう？」

「あ。ごめんなさい、旦那様：天がとても痛そうだったので心配になってしまつて、」

文字通り目が霞んでそれどころではないが、慌ててまた扉の中に引っ込んだようだった。

「天、大丈夫か？」にこやかに親父が聞いてきた。睨み返す。頭を自分で揉み解しながら身を起こした。

「天が涙目になっていきます」おろおろと、しかしまた扉から出れずに心配気に言う。

「なつてねえよ！」

「当たるんじゃねえよ」腹の立つほど愉しげな微笑で言う。

「そうだ、天。御年玉をやろう」

「いらねえ」即座に返す。どうせろくでもないものに決まっている。普通に金の訳がない。

「そうか？残念だな」あつさりと引いた。

「お母さんからも、いりませんか……」返事は哀しそうだった。

「母さんが？」ちよつと気になる。

「貰つておけ」そう言つて視界が真っ暗になった。どうやら親父の

手が目に被さっている。

「離せ。俺に触るな！」しかし振り払えない。

ちゅ

頬に柔らかなものが当たった。手が離れる。呆然とする。今の、柔らかいのは

「唇……？」

それだけじゃない。それだけじゃない。何か別の、柔らかいのが一瞬触れた。あの位置は　それに、母さんは今何も着ていなくてその姿で今　ということは

ばしん

頬が叩かれた。言うまでもない。そいつを睨みつける。

「俺からだ」くすくす笑う。「新年の気付けに」

「いらねえって言っただろう」

「新年早々何邪なことを考えてるんだよ？この、色ガキ」

「なっあんたっが」

わなわな拳が震える。

「天、血が出ています」

「出てねえよ！」

それでもばつと顔半分下を覆う。鼻をこすってたまるものか。母親は心配気、親父はくつくと腹を抱えそうなまでに笑っている。

「あんたが…疚しいのはあんたの方だろ！新年早々から母さんだけ服を脱がして」

「俺も後で脱ぐもんな？」

「はい。るりが旦那様のお衣を解きます」

「やってる！」言い捨て蜜柑も置き捨て背を向ける。

「天！新年、明けましておめでとうございます。今年も天のよいお

年でありますように」

「…おめでとう。母さん、も」

そう言ってからさっさと足早に立ち去る。頬がじんじん熱いのは、ぶたれた所為か口付けられたせいか。

俺も、今年は

「旦那様も天にお年玉をあげたかったですか？」

「可哀想だろう？可愛い息子に拒まれて。慰めてくれ」

「はい、旦那様…るりからも、旦那様にお年玉です」

「じゃあ俺からも」

「今年も宜しくな、瑠璃」

「宜しく願います、千次様」

蜜柑がころんと剥かれて置いてある。



## 十六・生簀

「それで、お前か」

苦虫を噛み潰した顔をした。

これがあの親父が腕を認めた者か。

自分とそれほどは年も離れていないように思える。筋骨隆々たる、  
と言うわけでもない。どうせ適当につけたのだろつ。

「下がれ」溜息を吐きそう言つと、部屋の外に出る。しかし部屋の  
外のまま動かない。

「俺の近くに寄るな」

軽く睨むと、ようやっとその若者は答える。

「我慢してください、若旦那」

もう一度男を見直す。育ちが悪そうという訳では無いがこの屋敷  
には無い粗野な雰囲気を感じた。

「若旦那の意向に沿うようにはなるべくはしますが、あくまで私は  
旦那に雇われている身なので」

成程。それで屋敷以外の者を使う訳か。

「天…どうしたのですか。お腹が痛いのですか」

顰め面におろおろして母親が言う。

お茶の時に迄用心棒とやらがいる。いや、見張り役か。本当  
は母親の来るこの時を邪魔させようとしているんじゃないだろうか。

「お歌はよいですか」

睨み付けた。人を気にしない辺り、母親も親父とは別の意味で何  
か自由さがある。

「もう帰れ」

「あ、はい…では。お邪魔をしました」

しょぼんとした様子で立つ。機嫌を悪くしたのは自分が何かした

のだと思っっているのだろう。しかしそのまま何も言わずいそいそと出て行くのを目だけで見送った。

「あーあ」

手を後ろに組み、背もたれに体重をかける。

膝枕。

ぼつりと思ってから、いつの間にかそれが唯一この家で安らぐ時だったことに気がつき驚いた。前はむしろ自分が構ってやるような気持ちだったのに、何か立場が逆転した様で気に食わない。

どうもあの父親の手の平の上にいる妙な感覚がする。一角だけ人のいなくてあの屋敷から抜けられたのも、母親が自分のいないことに気がついたのも、すんなりと屋敷に戻れたのも、それで事を利用して体よく見張りをつけられたのも、一体どこから仕組まれていたのかと考えるのは考えすぎか。

いいや、有り得なくはない。人を動かすのは自らの意思と思わせるのが要だとそんな事を教えられたでは無いか。

釣り。魚を捕らせるには釣り糸を垂らせ。自ら動いて手足を濡らすこと無く、餌に食いつく一瞬の機だけを逃すなど。

自分は魚か。それも生簀に放り込まれた。

もう面倒だ。

そう思い立ち早足に廊下に出る。後ろは歩幅をどう変えても歩調を合わせて来るが、構うものか。

漸くのことこと歩幅を狭くに行く銀の背姿を前に見た。早足に近づいて、気配に気がついたのか振り返るとちよつと止まったところを後ろから捕らえた。

「きゃ、」



銀系の後れ毛のかかる白いうなじが震え、体の縮まっておずおずと振り返る。

「天、」ほっとしたように顔を緩ませた。

「お母さん、少しびっくりしてしまいました。どうしたのですか、天」

母親が微笑み正面を向こうと身を捻じらせて、それで自分の回した腕が後ろから抱くようになっていたことに気づく。だが驚かせたことに小気味よく思っ、て、まあいいやとぎゅ、と振り向けないようにもつと腕をしめる。

「ど、どうしたのですか。天」

「母さん…頼みがある」

いつもと違う仕草に少し慌てたその様子に面白くなって悪乗りしわざと耳元に囁くように言くとびくりと震えて余計に面白くなった。後方にいるだろう見張りにむしろわざとみせつけるような気分だった。自棄になってしまえば後は楽しい。

「はい、天。お母さんにできることなら、何でも頼んでください」母親は平常になって頼られたことに嬉しそうに微笑み言った。

「あいつが俺に纏わりつくのを止めさせてくれ」

「え、けれど…天をお守りするためなのです」

「四六時中付き纏ってくるんだ。俺は一人が好きだと知っているだろう？このままでは気が狂いそうになる」

「母さん…母さんにしか頼めない」

耳元に甘えた口調で言くと、思ったとおり効果は大きかった。そのままこくと頷く。

「分かりました。お母さんに任せてください」

くす、と口元は弧を描いて抱いていた体を離す。

「有難う」

礼を言つとかなり嬉しそうに笑った。

「旦那様：るりはお頼みがあります」

「なんだ、言ってみろ」男は面白そうに、膝に乗せた女を見た。

「天のお付き」「しかし口は手に塞がれた。

「なんだ、天の頼みなら聞かねえよ」男は途端につまらなさ気な顔をする。

口を塞がれているのにもごもご何か言いたげにした。

「そりや気の落ち着かずに鬱憤とするに決まっている」

しかし、と男は口元を上げる。

「俺は振り払いたいならそうすればいいと言った筈だ。全ては己次第　これくらい状況でどうともできないならそこまでだ」

大人しくなつたので口から手を外す。

「旦那様はどうしたのですか」

「お前は時々勘がいい」男は笑うが特に答えない。

「女を使うというのも手だが、取り合えずは失敗というところだな」

「千次様：るりは困ってしまいます、天に頼りにしてもらったので」

「そうか？お前が困るのはいけないな」男は口元の笑ったまま女を撫でる。

「いいだろう。外してやる」

あつさりとそう言つた男の口元はしかし先ほどより愉し気で、ちよつと不安気に顔を見上げる。

「さあ瑠璃、これで心置きなく遊べるな？」

吸い込まれるような黒の瞳に捉えられて、また全て感覚も奪われてしまつていった。

\*

むしろ戯れ半分だったのだが、まさかこうもあつさりと付き人が消えるとは思わなかった。それも忽然と、元々幻であつたように霞の如くに消えた。屋敷の他の者に聞いても身元は知れなかった。

余りに不信過ぎて素直に喜ぶのは阿呆だということだけは分かる。

部屋で筆を止めては耳をそば立てて見たり、夜に用を足すのに長い廊下で足を止めて振り返ってみたりと、神経を砥いだ。

いるのかいないのか判らない。どこから監視されているのか分かつ神経が消耗する。

いつそ見えていた方が十倍もましだった。

そう思ってから、あまた嵌められた、と思った。安易に人を利用しようとした自業自得という気もした。母親には何の責めもないが、それを抱きかかえて自分を笑う父親が見えるようだった。結局あれは親父のものだ。

「なんだか天はどんどんと大人になっていくようです」

「結構なことじゃねえか」男はくす、と笑う。「言葉の割りに残念そうだな」

「るりに甘えなくなりました。なんだか少し素っ気無いようです」

「親離れというものだ」

「けれど、お顔も険しくなりました。笑ってくださいせん」

「お前は構いすぎるんだよ。甘えて欲しいなら甘えてくるまで待てばいい」

「そういうものですか」

「家から離れて暫く振りに屋敷で会ってからは甘えてきただろう？だからまた暫く会いに行かなければいい」

「分かりました。るりは少し我慢してみます」

くす、と男は笑った。

## 十七・花簪

屋敷を抜け出し人の喧騒に紛れた時が一番落ち着く。人の中が落ち着くとは以前と逆で可笑しなものだ。木を隠すなら森というものだろうか。

何も宛てなく何も考えもなくぶらつく。このまま人に紛れて帰らなかったらどうだろう。世の頂点に立つ筈だった男が、あのとび職、その店の番頭、先の豆腐屋の主人、延々と声を上げる蒔売り、野菜を売りに街に出ては畑に帰っていく農民、はたまた浮浪をして船着場でのたれ死んでいたら。

ああ、それは愉快だ。

あの父親はこんなことを考えもしなかっただろうか。そんな姿は想像もつかない。あの男は元々人の上に立つ器を持って生まれたのだ。社会の歯車となつて歯車であることも知らずに死んでいく、きっとそんな生き方では収まらないだろう。袋に入れた針のように、どこに在ろうと抜きん出るに違いない。しかし自分はどうか。そこそこの器用さで、どんな者にでもなれるのではないだろうか。袋の中のじゃが芋のように、ぬくぬくと。

卑下している訳ではない。才を羨むでもない。天分というものがある。むしろああも鋭い針は袋の中には生きられない。歯車の方が随分と楽そうではないか。

室内で育てられた牡丹や芍薬の絢爛な花では無く、野に咲いた素朴な白摘草を摘んでただそれだけを造作なく土の花瓶に差そう。適当に女を娶り、秋は薄に月を眺めて、捏ねた団子を持った女が

『天』

ただその一語で、夢想は霞となる。あの母親を悲しませて心落ち着き暮らすことなどどうせできはしない。もしかすると微笑んで送

り出してくれるかもしれないが、きっと何か蔭りのあるだろう。物の心の付く頃から口癖は『旦那様のように』だった。当主となったその時にこそ、誇らしげに心からの笑顔を向けてくれるに違いない。

それにもしも自分が逃げ出せば、きつとあの人が責められる。貴族でない卑しい者に育てられたからだ。あの父親のいる限り表立ってそんなことは言わせないだろうが、きつと自分でも責めるだろう。

やはり自分は当主となる。

腹を痛めて生み、どんな時も笑って育ててくれたあの可憐な母に笑っていて欲しい。

空を見上げればいつの間にか茜色を瑠璃色が覆い始めて、そろそろ戻ろうと足を返す。元から禁じられているものを勝手に出てきているので門限も何もないが、どうせ日が暮れば人も減り店も終いつまらない。肌寒くもある。

親父は夜に出たと言うが、一体夜の何がうれしいのだろう。

まあ、あんなに際立つては人に紛れることもできずにかえって浮くだろう、と思い一人笑った。

「坊ちゃん、坊ちゃん」

横を向くと、いつときかの店の者だった。

「ああ、やつと来なすった。今日いらっしやらなかったら他に売ってしまおうかと思ってたんですぜ」

忘れていた、あの簪。

母親の来なくなったことにはどこかほっとしていた。目の前にいるのに思うようにできないことに鬱憤として、その度に理由も分からずおろおろして傷ついた顔をして帰っていくのに余計に鬱憤の溜まる始末だった。それでもう来るなど言えば深く傷つくだろうし、自分もはつきりとそうして欲しいわけではなかったから、自然と足

が途絶えたのは自然に収まった結果だった。

今更簪をやったりするのは不自然というものだ。未だに勝手に抜け出していることが知れて、もう出ないで欲しいと頼まれればこの息抜きすら失ってしまう。

「ほら、ここに。人が欲しいと言っても断っていたんですぜ」

なら見世に出さなければいいのではないかという気はしたが、買うといった手前今更取り消す訳にもいかない。

「少し待っている。戻ってくる」

この上着でも売ればどう低く見積もってもあれを買うくらいお金にはなるだろう、と店を後にする。

行く先は決まっていた。すっかりともうこの街のどこの場所にとの店があるかは把握している。

呉服屋がある。普通、黙っていても呉服店の者が屋敷に注文を取りに来るものだが、ここは既に仕立てたものが売られていて値段も決まっている。反物でなく布端でも買い取っているようで、ここで衣服を買い取っているのを見たことがある。

上掛けを差し出して言うと、手に取った店の者は目を開いてしきりに「ほおほお」と言う。人を待たせているので「幾らになる」と促した。

「正直なところこう感心は見せないのが商売ですが、これ程いい布は眼福です。しかし買い手の需要というのがありますのでこちらで相当には買い取ることができません。悪いことは言いませんからこちらはお売りにならない方がよろしいでしょう」

「しかし今入用だ。この店の相場でいいから買ってくれ」

「はあはあ、何かお困りのようですね。それではお預かりしますから、また買取にでも来られると良いでしょう」

まあ商売ですので何時までも置いておく保証はできませんが、と笑って一度引っ込んでまた出て来た。黄金色の板が幾つか乗っている。

「これでご勘弁ください」

それほど感心するあの衣服の値が元々どれほどかは分からないが、昔は屋敷暮らしでないのであの簪の相場は分かる。

「これほどは余計だ」

そう言つて板を一つ取る。金に困っているのではないかと訳のわからない顔をした店の者を置いて出る。

ひゅるりとやはり肌寒かった。

## 十八・小雪

「お待ちください！」

店を出てあまり経たないところでその店の者が追いかけてきた。もう一人、店主らしき恰幅の良い者を連れている。その形相に面倒な予感はいしたが、的中した。足元数間離れて路上で大の男二人揃って土下座をする。

「申し訳ありません……」

どうにかの調子で口を開いた店主らしき男の顔は青ざめていた。

「家の者がとんだご無礼を……どうかお許しくださいませ」

「大変な失礼を致しました……！ 少し奇妙には思いましたが、まさかまさかこれほど高貴なお方がこのような店にお一人でいらつしやるとは思ひもよらず……！」

言い訳をするな、お前は黙っていると恰幅の良い方が土についた顔を少し横にして唾を飛ばす。

「何を言ってるか知らないが、急ぎだ。もう行くからな」

すっかり日の暮れていて良かった。何事かと止まっているのは人通りも薄くなつた少しの人で、この暗さでは顔に判別もつかないだろう。

「どうかお待ちを！こちらを所持しては罪に問われてしまいます！」

「何を馬鹿な。布切れだろう」

「お家のご家紋が透かしてございます……！」

「何？」

そちらに歩き、風呂敷を取って置かれたそれを広げる。月に翳すと確かにひし形に百合の花が透かしてあった。全く、阿呆は自分だ。「缺はあるか」

「はあ、と頭も回らない様子で差し出すのを取りじよぎじよぎと



その部分を切り取った。

「悪いがこれで勘弁しろ」

それを置いて立ち去る。ははあ、ととにかく頭を擦り付けるのを後にした。

「すまない、遅くなっちゃった」

そうして金の板を差し出すと店の者は大喜びに顔を破顔させた。

「有難うござえます、坊ちゃま。さあさあ、こちらです」

そうして差し出すのを受け取ろうとすると「ああ、」と何か情けない声がした。

見ると薄桃色の着物の娘がいる。

「ほつら、本当だろう。早く帰んな」

「そんな。だってほら、前の言い値は持ってきたのに」

「嬢ちゃん、悪いが世の中金だ。これより高く買えるなら話は別だな」

そう言つて金の板を振る。同じ商人でも随分と心根が違うものだなあ、と先ほどの店の者を思ったが、他人事だった。なんだか今日は色々と面倒事の立ちそうだと早々に立ち去ろうとするが、しかし、と袖が引つ張られていた。

「それを譲ってください」なにやら必死な様子だった。

「前に店で見かけたときからずっとそれを欲しくて、やっとお金をつくつて持ってきたんです」

「駄目だ駄目だ、それはもう売ったんだ」

店主は今度は自分を見、「返品は受け付けませんぜ」と言う。

拳句に「今日は店じまいだ。ガキどもは帰んな」と言ってきた。

「ああ一寸待つてよ」

そう言い店を閉めようとする男に手を伸ばすと、ぐいとそれは逆に掴まれる。

「ほお、これは嬢ちゃんよく見りや別嬪な顔立ちしてるじゃねえか」  
明かりに照らされて露店にいる女を映したようだ。こちらからは

卑しい顔をした男しか見えない。

「なによ離しなさいよ！」

言葉が早いか手が早いか娘は男の脛をがつんと蹴っていた。着物の捲れて女の脚が露になる。刹那のことだが武術の手ほどきを受けている目にははつきりと男と娘の動きが見えた。男は顔を顰め、これも何も考えていなさそうに女に手を挙げるのが見える。

しかし次の刹那男の体は飛んでいた。

「きゃあ」女は驚き、突然飛んで今は伸びている男をあつくと見た。自分も「あ、」と言って白目の男を見下ろす。

「参ったな」　つい弾みで投げてしまった。

まあいいか、と今度こそ立ち去ろうとして、ちよつと気が付く。

「ほらよ、」女に向かって包みを投げると、女ははつとしてそれを受け取る。

それで足は漸く家に向かう。街はとつぷりと夜に浸っていた。

「あの、ありがとう！」

女の声がして、ちらと流し眼に振り返る。

「私、小雪って言うの！　あなたは？」

無視をしてそのまま足を進めた。

どうも騒がしい一日だったな、と思いながら。

## 十九・舞踊

「踊り 俺が？」

珍しく家で西洋服を着ている親父に胡散臭い目を向ける。黒地で体に張り付いて、余計に細身に見えた。

舞踊はその家元の者を屋敷に招いて見たことがあるが未だ自分では習っていない。できればやりたくない とうるか幾ら教養と言ってもやる必要はあるのか。

「扇を持つて舞うあの舞踊じゃねえ。西洋のダンスというものだ」「何でそんなもの」

「西洋では社交に使われる。茶のようなものだと思えばいい。幾ら異国に閉鎖していても、管理上多少の付き合いというものがあるからな。当然霧崎家の当主たるもの、という訳だ」

「 親父もできるってことか」

「当然だ」にやりと笑う。「瑠璃もたしなみがある」

「あの母さんが？」

「あいつは流石に様になるぞ。それも西洋の女の中にいてもやはりあいつの美しさは一際輝く」

「親父の偏見が大分入っていると思うけどな」

「偏見？ 愛だろう」男は笑う。

「百聞は一見に如かず、だ。見せてやるから一度で覚えるよ」

「瑠璃、入って来い」と手を叩いた。

白のドレスの女が入ってくる。思わず目を細めた。

いつも結び上げてある銀色の髪はほどけて腰まで長い。白磁の肌に仄かに桜色に色づく頬、さくらんぼうのように水水しい唇、雨上がりの水溜りが空を映したような澄んだ瞳、それに白い絹の布一枚は体の線に沿っていて 華奢だとは思っていたが、それだけではなく柔らかそうな女の線もくつきりと目の当たりにしてしまってい

た。

何も言えず呆然としていた。

これが自分の母親か。こんなにも美しい女から俺は生まれた  
というのか。

「偏見か？」

男が愉快そうに笑って漸く意識がはつきりとする。

「なにか……いつもと違う」

「瑠璃はいつもはそう化粧をしないからな。それで十分に美しいが、  
これを見ると俺でさえ苛めるのに気が引ける。天女のようにだろう？」

「旦那様……恥ずかしいです」女は際まで開いた胸元を隠すように  
手を交差させて覆う。

「喋れば瑠璃だけだな」男は笑って言った。

「さあ、」と男は女の元に行き手を差し出した。女はちゃんと手を  
その上に乗せる。

音楽が流れた。

西洋の曲は目まぐるしく大仰だが、それに合うように成程速く大  
きくくるくと踊る。男は女を見下ろして女は男を見上げていて、  
それなのにくつついたまま足を踏んだり乱れたりせずに一つになっ  
てくるくと回っている。時々離れて女が男の腕をくぐったり、男  
が女を抱き上げたり。しかしそれはカラクリの玩具のように一つで、  
それは息の吸う吐くでさえ一緒のようだった。少なくとも、完全に  
互いしか見ていない。そこは板敷きの広間ではなく、二人しかいな  
い音の世界だった。

曲が終わる。

「瑠璃」

「千次様……」

見詰め合い、止まって初めて息の乱れた女の少し開いた唇に男の  
唇が重なった。

大分長く重なって、それから口が離れた。しかし体は離れないままに、女の背に回っている男の手が後ろの白絹を纏わせている留め金をかちりと外した。

「おい、」

流石に声を上げて引き戻す。

男が視線をこちらにずらして、ち、と舌打ちをした。女は一拳に頬が赤くなつて、片手は前で布を押さえ、片手は後ろに伸ばして外れた留め金を戻そうと躍起になっている。

「つくづく邪魔な奴だ」

「いや、あんたが俺に見てると言つたんじゃねえか」

本当、横暴もいいところの物言いだ。母親とは正反対に、父親らしくしようという気は全くないらしい。今に始まつたことではないが。

「まあ、こんなものだ。覚えてな？」

視線はこちらのまま、今だに女の苦戦している留め金を造作無く片手でかちと嵌めなおして言う。

「覚えるか、初見で。あんたと一緒にするな」

「次の舞踏会ではお前も出るから、恥の無いようにしておけよ」気にせずと言う。

「次、ていつだよ？」

「そうだな、招待や衣を仕立てる準備もある。余裕を見て　ひと月後の今日にしよう」

「あんたが決めんのかよ。俺は出ねえ」

「お前の嫁探しの一環だ。選りすぐりの貴族の子女も気に召さないようだったから、今度は西洋の令嬢というのも見せてやる」

「どうせまた母さんを見せびらかしたいだけだろ」

「それは仕方の無いことだ」と無駄に物憂げな顔をする。

「瑠璃の前では全てが取るに足らないことになつちまう　大事な世継ぎ事でさえも」

「そうだな、考えてみれば家の嫁探しに俺がいなくとも取るに足ら

ないことだ」

「おいおい、女に声もかけられないお前の為に折角出会いを設けてやろうとしてるんだぜ。まあ出なくてもいいが、少しは努めている風を見せないと痺れを切らしたお前のじいさんが勝手に伴侶を決められちまうぜ?」

「お母さんも天が踊れるようお手伝いをします、お相手がいないととても難しいですから」

「それは駄目だ」親父が即刻却下する。「相手が必要なら自分で用意しろ。使用人は腐るほどいる」

「けれど踊れないのではないでしょうか」

「教えてやればいいだろ」

「誰の練習だよ」

「どうも分かつていねえな、これは二人で一つ作り上げるものだ。それも主役は女だ。男は女の美しさを引き出す為にある。この点、西洋人とは気が合いそうだ」

なあ瑠璃?と言う。

「はい、旦那様。舞踏会に招かれた旦那様はそれを思い出しになりながら瑠璃と練習をしました。身を預けるとるりは自然に体が動きます。そうして御披露目したのです。西洋の方々はとても感心なさいました」

綴じた書物がぱさりと放られるのを受け取る。

「踊り方を記して置いたものだ。元は瑠璃の為に作ったものだから、挿絵も付いて酷く丁寧だぜ」

用は済んだという用に「行くぞ、瑠璃」と言つて踵を返す。

やはりこれは少し窮屈だな。お前はどうか?

動きやすいのですけれど、なにか恥ずかしい気持ちになります。着るのは早くに済みます。

帯が無いのはいいな、脱がせるのに時間がかからねえ。

お手を入れられても着崩れずに済みます。

そうだな、西洋の服は概してそれらが容易いようにできているだろう。合理的な国だ。

聞いて呆れるそんな会話がだんだん小さくなって、遂に聞こえなくなつた。ああも唯我独尊な親父に従順な母親が左右されると憐れにすら思っていたが、案外にあの母親だからこそ親父と付き合えるのかもしれない。

真逆のようで、どこか一点似た所で交わっているようだった。

## 二十・影郎

「おい、出て来い」

そう言つと、とん、と男が一人天井から降りてきた。

「御用ですか、若」

結局、割と慣れてしまった。思い出したように神経が痺れる時はあるが、普段は気配を消していて忘れる、というかつまりは慣れたの一言だ。案外に使えるし、仰々しくない態度は話し相手にもなる。

「どう思つ」

「天女というより御伽草子のかぐや姫ではないかと」

「そこじゃねえよ」

「どう思つで分かるほど若と意思疎通をした覚えはありません」

丁寧語を使えば丁寧だと思つてゐるのだろうか。どうも主従とまでは言いがたい。

「一度で覚えるものか？」

「若、それは赤ん坊が生まれた途端に立つようなものです」

「成程、親父なら有り得る。その上人差し指で天を指しそうだ」

「まあ頑張つて下さい。他の習い事もあるでしょうが、若は人より覚えがいい。特に芸に対しては」

「他人事も他人事だな」

「それはそうでしょう。まさか私に相手をしろと言つのではないでしょうね。それは勘弁してください。女子おなことなら一考しますが」

「言つてねえよ」仏頂面に言つ。

「そう嫌な話でもないでしょう。屋敷の女子を選び好みしてあのように体をくつつけ合うとはいささか羨ましい。あの薄着の衣装も毎度着て練習するのですか」

「どいつもこいつもどうしてそう好色なんだ」眉間に皺が寄る。

「男子は自然のことです。普通若ほどの年頃ならば尚更女子の気に



なる筈ですが、どうも若はその気に疎い。旦那と見比べると容姿は似ているだけに一層不思議だ」

「あいつと一緒にするな」ふん、とそっぽ向く。

「そう言えば若、」

「なんだ」

「饅頭を要りますか」

「なんだ、珍しく気の利くな」

そう言うとき若い男は風呂敷包みを差し出す。受け取ると漬物石のように重くずしんと思わず腕が落ちる。

「お前、俺をからかうとはいい度胸だ……」ぎろ、と凄む。  
漬物石と思えばなんてことはない、投げつけ返した。

ばらばらと、弾みに黄金の饅頭が毀れて床に音を立てた。いや饅頭ではなく金銀小判だった。

「すみません、つい。『饅頭と言われたら饅頭として受け取れ』という意味だ？」と若が呟いていたのを思い出して、解釈の助けになればと」

「取ってつけた言い訳をするな。お前に試される言われはねえ」  
さつと避けていた男を軽く睨む。

「それで、なんだこれは」

「『忘れていたが、小遣いだ』と旦那が」

「あいつが？」

また何か企んでいるのだろうか。市街に出れば時たまにあればと思ふことがあったが、あえては必要という訳でもない。その秤にかけて受け取るべきか否か逡巡する。

「若、若、金を持て余しているなら少し遊びに行きませんか」  
なにやら楽しそうに男が誘ってきた。現金な奴だ。

「お前……俺の見張り役じゃねえのか」

堂堂と正面から門を出て外に行く。自分だけだと禁じられている

のに、こいつがいると通れると言つのはどういふことか。

「誰が見張りと言つたんですか」

門番の承認の通つた、百合の花押の押してある一筆をしまいながら若者が言う。

「若はどうも旦那を悪者にしたがる。疑心暗鬼というものですよ」

「お前はあの親父を知らないんだ」

「若の知らない旦那もまたあるでしょう」

そう言つてから浮雲が茜の空を流れるのを見る。

「まあ男子は往々にして母親を慕い、その分父親を憎むものです。

しかしそれが父母の役目でもありますから父親は損な役回りだ」

問答は面倒で、鼻でふんと鳴らすだけだ。横目で見ると男はふふと笑っている。笑うのは初めて見た。

「お前：名は？」

「影郎と呼んで下さい、若」

遷ろ<sup>うつ</sup>う雲から目を外して男は言った。

## 二十一・遊郭

色は茜から紺青に、しかし薄暗さは光りを目立たせる。派手な色彩、呼び込みの男に女、酔った男に目も暮れず高下駄の女が通ると、何か匂い立つ夜の街。

どこか祭りのように浮き立ったそんな絵空の街を映すつんと冷めた黒の瞳があった。

「道理で夕刻から出ると思ったら、歡樂街か」

「おや、歡樂街をご存知で？若」

「当然だ。よくお前もこんなところに俺を連れてこれるな。じいさんが聞いたら良ければ首であるいは刎ねられるぜ」

「旦那は良くやったと笑いそうだ」

からからと男は笑う。

「引き返しますか？」

「いい。付き合つてやる」

「そう来なくては。流石若旦那、よく分かつてらっしゃる」

男はすっかり祭りに来た若衆のように嬉々として夜の街を先導した。その二三歩後ろを溜息交じりの若旦那が付いて行く。しかしどことなく、どことなく表情は和らいで、ふ、と笑う。そうして自分より広い背中を行き交う人に紛れて見失わないようにとするのだった。

袖を引かれそうになるのをそこはそれとなく先導の従者が退けて、どんどん歩くに煌びやかな通りの終わり、何か料亭のような落ち着いた明かりの並ぶ通りに出た。建物同士も互いに主張するように犇き合つてはなくて、人の通りも格段に減る。歩く者の身なりも良く、酔いに乱れず、女や付き人を連れていたりもした。

「若、若、ここでもいいでしょう」

嬉々として指すのは一際落ち着いた木造りの門。

「奥はこうなつていたのか。本当にここもそういう場所なのか」

「こつという若の想像は知れませんが」男はにやりと笑う。「ちよつと雰囲気は違つかもしれませんね」

「女と戯れるのだらう」

「それが機嫌を取るのはこちらなんですよ」

「はあ？」と形の良い眉を少しあげる。「金を払つてまで女の機嫌を取るとはどういう訳だ」

「格式高いところじゃ女は袖を振るんですよ。それで好みの女に構つてもらいたければ氣に入ってもらえなければならぬという訳です。格別別嬪の女なんかは臍原の客が一人二人と決まつていて大抵相手をしてくれない」

「遊郭とは女を買ふところだらう。それでその女の身は持つのか」

「それで持つほどの高嶺の花なのです。登楼代だけでなく、鏡簪櫛どころか着物に帯、調度品などまで芸妓に贈つては機嫌を取り、遂に首を縦に振つてもらつてそこで初めて床に入れるという案配です。中には男を知らない太夫まである」

「一体どれだけ面倒なんだ。よくもそんな暇な男がいるな」

うんざりとした様子に慌てて口添える。

「大げさに言いました。そんなのは見世にも一二の特別な女の場合で、そこは所詮商売、大抵は愛想良くしてくれますよ。奥間には布団の敷かれていて、よつぽどでなければ自然とそういった流れになります。ただ見下したりせず粹に振舞つてくださいなということです」

「それで今日は屋敷に戻らないつもりか」

「若、若、ご安心を。日の変わるまでには若を屋敷に戻します。それを見越して早くに出てきたんだ」

「そうしてくれ」どの道思つたより面倒になつてきたのを憂いながら答える。

「若が夜食を食べ損ねないようにね」

睨み付けたのも通じず、ではいいよ、と意気込んで従者は入つ

ていった。やれやれ、と嘆息してから自分もそこに進む。

しかし。

「なんだい、そりやないだろ」

「すみませんなあ。ウチは一見さんはお断りしとりますんや」

遅れて鴨居をくぐれば何か揉めているようだった。

「どうした」

「あ、若。紹介が無ければ入れないと言っんですよ。全く商売にあるまじき高飛車だ。何か言ってやってください」

「お前、来たことは無かったのか」呆れたものだ。

「来ている訳がないでしょう。こんな格式高い遊郭は一般庶民には縁の無い。しかし若がどこでもいいというから一度くぐって見たかったんです」

「どうでもいいの聞き間違いじゃねえのか」そう言って長居は無用と「ほら出るぞ」と促す。

渋々と引き下がった男を後に従えて出かけたところ、見世の女はひとと隣に耳打ちされて顔を変えた。たた、と二人連れの後を追いかける。

「お客はん、待っておくれやす」と呼び止められた。

「どうも失礼をしました。どうぞこちらに」

突然の態度の変化に「なんだ？」と従者を見るが「さあ」と首を傾ける。

「まあいいというならいいんでしょう。棚から牡丹餅というものです」

「お前はいい加減本当に護衛か？ 警戒心というものがまるでねえな」

「考えて分からない時は身を任せるのが結局吉なもんです。肝要なのは分かったときにどうするかですから」

そう片目を瞑ってから女に向かう。

「こちらは貴人のお忍びだ。格別上等の部屋に案内してくれ」

## 二十二・雪娘

こういう場の常というのは知らないが、初めから従者と別れ別れに一人座敷に通されるようで、案内の女に連れられ廊下に行く。料亭のようだと思つたのは外観だけで、襖襖の薄暗さ、廊下に置かれる行灯の揺らめき、何か誘うような香の匂い、角を曲がり曲がり廊下の分かれて奥に奥に迷路の様、あたかもそれは男を惑わせ誘い込みついに食らう何かの巢窟にいるようだった。

予想と裏腹に物音の一つもしない。女が酒継ぎ男にしなだれかかつて媚を売る、なにか一種の宴会場の気分でいたが。しかし今更どうして男の引けようか。

饅頭は饅頭のように。

何故だかそれが隅から掘り起こされて、眉も動かさない冷薄な氷の内側で今念仏のように自分を定めていた。

女は何も言わない。無論何も聞かない。影郎、影郎、影郎め。そうしてただ黙々と歩いて遂に女はつ、と止まって膝をついた。上から女の顔を見ると、長く黒い睫と水に浸して膨れたような唇、口元には黒子の一つある。

案内ではなくこの女か。

と考えたとき、す、と襖が引かれた。そのまま動かないので中に足を踏み入れる。

「では……ごゆるりと」

その障子は閉められた。

廊下よりも仄暗い部屋の奥、屏風の向こうからぼんやり明かりが漏れている。炎の明かりに誘われる夜蟲のようにそこに向かうしかないようだった。

湿ったように感じられる板間に行く。畳みを踏む。きし、と静かな場に音の鳴り、音の鳴らない歩き方をしたくを思うが足を忍ばせ

るというのも可笑しいだろう。

やっと屏風のところまで来た。女は知っているのだろうか、足音のなる前から男の来ることや、どんな男であるのだとか。どんな心持で足音を聞くのだろう。すると此処が籠の中のようにも思えて知らない場でもないように思えてきた。

その屏風の中側に行く。女がいた。女は前に手を付き品のある様子で深々と、しかしそれは家臣のように畏まるではなく何か柔らかくに頭を下げた。そうして緩やかな動作で顔を上げる。赤い口紅の引かれていた。今度は黒子は目元にある。女は艶やかに口角を上げる。

「小雪でございます」

「？」

奇妙な違和感を感じてはたと女を見下ろしていた。

「お会いしとうございました」

「……お前か」

髪にある梅の簪を見て、以前露店で騒いだ時の姿とようやく重なり違和感の収まった。確かにあの時薄暗く顔ははつきりとは見えなかったが。

女の化粧と言うのは成程化粧化粧いで正しいようだ。

とすと腰を降ろした。

「いつかの節はお恥ずかしいところをお見せしました。あれより小雪は御仁に御礼できないかと外を出るたびに何時ときもお姿を求めてしまつてされど来る日も在らず、あれ以来溜息の多くなつてしまいました。今宵の逢瀬はたれの導きでしょうか。有難き事にございます」

知るか、と黙っている。しなを作つた媚口調、商売口上をそのまま信じる阿呆ではない。

「御名前はなんと呼んで宜しいでしょうか」



「好きに呼べ」

「では、天様」

ぴく、と眉の動いてほんのりと変わらず作り笑う口元を見る。

「ご帳簿の御名前でごしければ」

ち、と思う。 あいつ、本名を書きやがったのか。別段隠れようという気もないが、何がお忍びだ。

「天様、今宵は献じて御礼差し上げたくございます」

女の動く。すすとにじり寄ってきた。そうして肩に触れる。女の匂いがした。

「触るんじゃねえ」

思わず女の肩を押し返した。

「悪いが今日は連れの付き合いだ。ここで待たせてもらうが余計な事はしなくていい」

「まあ」くす、と女は口元に袖を置いた。

「天様は女子の扱いに不慣れですか」

「男の脛を蹴る女を女とは見ねえ」

む、と言えば女は白い頬をほんのり染めた。

「あれは…お忘れくださいませ」

「その猫被りを止める。気色が悪い」

「……」女は黙った。こちらもふん、と黙っている。

「喉が渴いた。何か取って来い」

女は黙ったまま立った。徳利に陶器の器を持ってくる。それに酌して差し出したのを無言で受け取りくいと口付ける。

水だった。

女を見る。

「お酒にも不慣れかと思い」

悪びれなくむしろ挑発的な女の視線に口元の片側が引き攣りかける。

俺に喧嘩を売る気か、この女。

「旨い水だな」口元が僅かに上がってもう一度味わうように口付け

る。「お前が酌をしてくれたからか」

「私の郷里、奥州山陵の雪解け水にございます」

「成程、お前は陸奥出身か。道理で肌が雪のようだ」

そうして女の頬に触れると女の頬には赤味が刺す。

「何を突然口説き始めるのですか」

「少し面白くなってきた」くす、と笑い、頬を持ったまま口元を女に近づけ言う。

「その猫の皮を剥がしたい」

そうして女の前で結ばれる帯を引く。

ぱん。

小気味良く響いたが、それは女の張り手を男が捉えた音だった。

「ほら、意気の良い女だ」手首を捉えたままにやりと笑う。

「……！」女はき、と睨む。

「小雪と言ったか。覚えておこう」

娘になった女の顔を見て面白げに男は笑った。

月が布団に格子の影を作っている。

腕の中、女の体を抱いて男はくすと笑った。

「旦那様？」

「なあ瑠璃、天の奴、最近は遊郭に通い始めたそうぞ。血は争えねえなあ」

「旦那様と同じならばるりは悪いことと思いませんが…天はもう大人なのですね」

「そうだな、男は女を知って男になる」

くすりと笑って男が女の内腿をさわさわと撫でる。女はびくりと体を震わせた。

「お前は本当、いつになっても可愛いな」

「瑠璃、月に姿を映せ」そう言う女はもぞと布団から抜けて、そ

ここに立った。

一糸も纏わない体を恥ずかしそうに手で隠して、内腿をすり合わせてもじ、と男の前に姿をさらす。月の光が肌を白銀に輝かせていた。銀糸の髪もそれ自体が仄かに発光しているようだった。

「ああ、」男は感嘆の溜息を漏らす。

「女の肌は雪色に限る」

## 二十三・旅行

「天様：天様」

ぼんやりと瞳を開けると、娘の顔が上から覗いている。

「なんだ、もう時間か」

目端を擦って女の膝から頭を上げた。それから立つてくあ、と伸びをする。

「よく寝た」

「よく寝ていました」

何か憤慨したように言う。

「天様ぐらいです、遊郭で女を買って膝枕で全部時間を使ってしまうなんて」

「ああ、また頼む。女の膝は何故だか体の錘が取れる」

男は上掛を羽織って、女は身支度を手伝おうとするが足が痺れていて立ち上がれない。

「お前は辛抱がねえな」男は笑った。

「普通、こうなります」むくれたようにぷいと言う。

「へえ、そうなのか」

あの人はやはり慣れていたのかな。親父もあの膝に落ち着いたんだろうか。

「何をお考えですか」

「女らしい女のことだ」

「どうせ雪は女らしくありません」

「分かっていたのか」からかうように男は笑っている。

「天様とは出会いの場が悪かったんです。あの時でなければ雪を女と思って見たはずです」

「まあどちらにせよ俺はそれほど女に？き立てられないようだ」

「天様はきつと大きなお屋敷で洗練された美しい方々に囲まれて育ったからでしょう。きつと雪のような田舎生まれの娘は芋のように思っているんです」

「芋か、成程」男は得心する。

「ああ非道い。天様は本当に女子の扱いがなっていない」

「色を付けられ形を付けられたよく分からない細工料理より、芋の煮転がしたものが俺は好きだ」

「……それは褒めているのかけなしているのか、よく分かりません」娘はふいと斜めを向いたまま、しかし白肌は頬の赤みが良く出てしまう。男はふ、と笑った。

「雪、二日外に買うことはできないのか」

「できません。これでも私は結構の人気なんです、天様以外から見れば器量良しらしいので」

「そうか、それじゃ仕方ねえな。まあ一人で羽を伸ばすのも悪くない」

忘れてくれ、と身なりを整えた男は襖を開ける、それに女は立ち膝になった。

「遊女として買うのはできませんが、娘としてなら外に出られます」

「回りくどいな。そういう建前みたいなのは外では考えたくねえ」

男は面倒そうに肩を下げてから娘を見遣る。

「来るのか来ないのか」

「行きます」

女は急いで返事をした。遊女として駆け引きも通じない。何か貴族らしからぬ素朴さを感じた。

男は良しと言って出て行った。

\*

「お前は付いて来るな」

「そう言われましても、若」

旅支度をした若旦那に困った顔をする。

「ほら、饅頭をやるからどこそとも遊びにいけ」

差し出された饅頭程の包みに閉口する。

「買収とは大分世の勉強も身に付いてきましたね、若。しかし見損なつてもらつては困ります。勤めだけでなく多少親身に身を案じているんです、多少」

「そうだな、俺も余りお前に苛々しなくなった。余り」

「何かつつかかる物言いの身に付いたのは私の所為でないといいのですが」

「自覚が合つて結構だ」

「第一、私がいなければ若は外に出られないでしょう。御家族誰かの一筆が無ければ」

ふ、と笑つて一枚紙を見せる。

「全く」従者は首を振る。「確かに奥様も歴とし御本家様ですが……正式と言うとどうでしょう」

「なんだ、俺の母に何か文句を付ける気か」

「いや、私ではなくて。女の例も聞きませんし。しかし旦那の

許しを取つたんですかね」

「だから余計な手を回されない内に出るんだろ。お前と問答している暇はない」

「やはりお一人では出しません」

「一人じゃねえ」

「誰です」

「お前に言う必要はない」

「ははあ、女ですか。全く、若も色気立ちました。遊女通いにもすっかり浸かつてなんだか責任を感じます、幾ばく」

「お前の感傷はどうでもいい、行ってくる」

「行つてらっしゃいませ」呆気なく手を振る従者に拍子抜けする。

「なんだ、いいのか」

「女と乳の繰りあいを覗くほどやぼではありませんよ」

「阿呆か」呆れ顔で、しかしさっさと出て行く。「単なる膝の都合だ」

「膝？」

はて、と首を傾げた時にはもう若旦那はいなくなっていた。

「何か嬉しそうだな？瑠璃」

るるんと足取り浮いて歩いていたのを捕まえて聞く。

「はい。天の方からわざわざざるりのところに会いに来てくれたのです」

「なんの下心あった」

「下心ではないのですけれど。天は肩が凝るので温泉に行くそうです。それでるりに字を書いて欲しいと言うので天の言うように書きました。何かるりは天の役に立ったようです」

「お前は本当、危なっかしいな。やはり俺が傍にいないと駄目だ」

「天は危なくありません。それに、天につき飴を頂きました」

握った手を開いて見せて、ころんと飴玉の幾つかが乗っている。

「お前はどれだけ可愛いんだ」やれやれと男は嘆息した。

「それにしても、温泉か」

男は顎に手をやり微かに笑う。

「俺達も行くか、瑠璃」

「はい、旦那様！急いで支度をします。天に追いつくといいいのですけれど」

「何でわざわざ邪魔を追うんだよ」

はしゃいでわたと急いだ女の頭を押さえた頭上で男はくすりと笑った。

「旅行は好きな女と二人と決まっている」

## 二十四・湯山

「え、鯉畔山に湯浴みに」

「そうだ」

男は呆れて女を見る。金糸の入った幾重の色重ね、白足袋に高下駄、膨らませた髪のかみに髪飾り、どう見ても山道を歩ける格好ではない。

「なんだ、その格好は。着替えなおして来い」

「そんな、折角時間をかけたのに」

「時間のかかるようなら置いていくぞ」

「もつ……！すぐに支度します！」女はかんかんと大股で戻っていく。

「何を氣を立てているんだ、あいつは」氣性の荒い女だ、と思って男は見送った。

「これならいいでしょう！」

女は何か自棄な口調で男の前に立った。旅路の町娘の装いだっただ。

「よし。行くか」

山道を歩いて男と娘は行く。

「天様、どうでしたか」

「何がだ？」

「さっきの格好……雪も女に見えましたか」

「化粧が濃かったな、いつもに増して」

「ああ、そうですか！」

女はさつさと男の前に行く。

「待て」男は女の手を掴んだ。

「な、なんですか……？」さつとすぐに首の赤くなる。

「俺の視界に入るなら大股で歩くな。無駄な格好よりも立居を女にしろ」



「無駄とはなんですか、無駄とは……雪は今日の為に……」女は珍しくぐぐ、と目元の潤む。

「悪かった、泣くのは已めてくれ。ほら、これをやる」

慌てた様子の男に娘は機嫌を良くする。　こんな無神経な男も女の涙には弱いらしい。しかし男の差し出した手のものに、折角の機嫌にも水が差した。

「天様……私を馬鹿にしていますか」

普通薬を入れる印籠から転がり出た、手には琥珀色の飴玉が転がっている。

ぐずる子供をあやすのと同じ気分が知らん。

「俺は好きだけどな、この飴は」

女が取らないようなので男は何気無い様子でそれを自分の口に放り込む。

「幼い頃擦り剥くと何故か口に入れられたものだ。薬と信じているらしい」

くすと微笑するのを見る。時々穏やかな誰かの影が見えるのは、恐らく乳母だろうか。

「天様の幼い頃？」女は思わず笑って茶化す。「そんな頃もあったのですか」

「懐かしいな」目を瞑ると自然と口元の笑む。

本当に俺に付き纏っていた。不思議な程年を取らずいつまでも変わらない姿で　　と思っていたが、確かに記憶はもつと娘のようにあどけない。

「　　そういえば」目を開けて女を見る。

「なんですか」まじまじと見られてやはり白い頬の染まる。

「いや、なんでもねえ。気の所為だった」ふいと視線は逸らされた。「お前の幼い頃はどうか？」

「私は……あそこのままです。ずっと遊女」

「へえ」男は特に何の感傷も持たなかった。

「でも、本当に幸運だったんです、私は。田舎を出ても……花魁に

なれるのは一握りと聞きますから」

「他はどうするんだ」

「売られる先で決まります。茶屋や湯屋はもつと扱いが良くありません」

「茶に湯？」

「まあ天様には縁の無いことです」

「湯に行くのにそう言うか。なんなら今度茶も点ててやるぞ」

「それは楽しみです」女は笑った。

無邪気に見えて何か哀しいものが過ぎった気もしたが、故も無いので気のせいだろうと男は思った。

ちやぶんと熱い湯に浸かる。

いい湯だ。

露天の風呂から臨むのは茜差し込む広大な海だった。ざざんざざんと耳を澄ませば聞こえて心地よい。

ごしごし強くにこすった背がひりひりと熱湯に染みるのがまた趣のある。

『天、お母さんがお背中流しますよー』

そう言うのを幾度追ひ払ったことが、とふと笑った。

どうも俺は、母親に気のゆきがちな。

影郎に茶化されるが普通そうでないものか。しかしくるくるとあの母親は本当に可笑しい。親父は美しい美しいと惜しげなく言うが、あれは滑稽というほうが勝るだろう。全く見ていて飽きない。

ただ。

『旦那様…旦那様…ん……』

二人住んだ家に居る頃、一度見た母親のあの痴態。あれだけは忌まわしい。

普段、忘れている。しかしこの厭わしい記憶は時たまに眠れぬ夜に蘇る。いや蘇って眠れぬのか。ごろごろと寝返りを打ちながら打ち払う。この時ぐらいだ、心得覚書の役に立つのは。一見意味のよく分からないか、あるいは当然過ぎる文の解釈に頭を悩ませるに専念する。

ああいう女の表情を、親父にだけ見せるんだろうな。それを笑うあの父親の口元が見えるようだ。

母親の弄ばれるのを思うとむらむらと怒りが湧く。体の芯から熱が出る。

ざあん、と打ち寄せ石に大きく砕かれた波の音に、は、と意識を取り戻した。

全く。折角あの家を離れているというのに。

嫌いという感情は持っていない。ただ、面倒だ。当主とかそういつたことよりなにより煩わしいのは、親父と母親だった。あの二人の寄るのを見ているとうんざりする。親父が厭わしい。なんだって母さんはあんな奴を

どうもいけないな。頭がのぼせているせいだ。

ざばんと湯から上がった。

## 二十五・膝枕

湯上がりの男はうつ伏せになって、女が背を揉んでいた。

「やはり連れて来て良かった」男は気持ちよさげに言う。

「どうも。こんなお役に立てれば」

理由が便利程度でやはり何か気に食わないが、それでも確かに男の顔の和らいているのを見て心の温かく緩むのを感じる。

こういう気持ちは初めて。いつも男との駆け引きのあるが、この男には通用しない分いっそそんなものは必要なく、口調も客相手なのに自然になってしまう。

でも、今は客じゃない。そうほっこり思うのが可笑しかった。これが客ならその分取り分に入るのに。

「お前なら傍に置いていい」

「え、」ふと手の止まる。どういう意味か。

「俺の傍仕えで屋敷に来るか」

ああ。と思った。しかし何を気の落しているんだろう。何を期待したんだろう。所詮は遊女のくせに。例え身分の高い男を虜にできる太夫でも、せいぜいが身代を買われ妾として囲われるのを幸せと呼ぶにしか過ぎないのだ。

「どうした、手の力の弱まったぞ」

「行きません。言っただでしょう、私は人気なんです。ちやほやされて不自由なく暮らすのを捨ててどうして一日中あくせく働き顎で使われるところに行くんです」

「そうか、それもそうだ」

いつもあっさりと引いてしまう。もっと強くに引つ張られたら、そしたら分らないのに。

「小雪は化粧の無いほうが綺麗だな」

「え」あ、と顔を押さえる。そうだ、風呂上りに化粧台に向かっていない。素顔を見られたことにかあ、と一気に血が顔に上って隠

れたくなつた。しかも今の言葉はなに。

「嫌味ですか」

「信じられないほど屈折した女だな」

「だって天様がそんなことを言うのは初めてではないですか」

「そうだったか？しかしお前が白粉しるいを取ったのも初めてだろう」

「でも、だっていつも憎まれ口しか言わない。女でないとか」

「俺は本当しか言っていない。俺の周りにいる女に見えないのも綺麗だと言うのもそのままだ」

「天様はなにか…気の付かない内に女を泣かせそうです」

「そうか」

適当に答え、背を揉む手の終わつたのに男は身を起こさずに「雪、膝」と言つた。そして正座した女の膝に頭を置く。

「雪、雪、ゆきやこんこん……」

「なんですか」

「歌は歌えるか」

「まあ芸妓ですから一様には」

「そういう歌ではない。子に歌つて聞かせるような子守歌だ」

「天様…」女は瞳を丸くした。

「笑つか」

「いいえ。ただ、何か…」愛しくなつた、とは言つだけ虚しい。

「余り覚えていません」

「俺が教えてやるから覚えろ」

そうして男が歌つた。男の声でそれを聞くのは不思議で、でも温かくて、初めて聞くようなのにどこか懐かしかった。

「どうした」

ぼた、と男の頬に雫の落ちて女は慌ててそれを浴衣袖で拭つた。

「天様はとても愛されて育つたのですね……」

「そうだな、一人のみには」

男は下から見上げた女の顔に手を伸ばして涙を掬い取つた。それ

から女の口に飴を押し込む。

「旨いだろっ」

「はい……」女は涙を拭いて笑った。

「天と呼んでみる」

「え」

「様をつけずに」

「……天？」

「意外としつくりと来るな。今からはそう呼べ」

「でも、」

「郭の中では何も関係ないだろう。今も何も関係ねえ。俺とお前の関係は無い関係だから自由なんだ」

「自由」ふふ、と女は笑った。この人といると自然の笑いがでる。むしろ作り笑いが思い出せない。

「天……」整った顔に黒の瞳を見る。

ずつと前から、出会う前から 待っていた。

「雪」

男の手がまた伸びて、女の頬に触れる。その手の行くままに。

男と女の唇が合った。

柔らかいな。

固いな。

ゆつくりしてから男と女の唇が離れる。

「雪」

「天」

ぐい、と首が後ろから男の腕に引き寄せられて、女は体を崩した。逆に男は半身の起き上がって、それで女の唇を奪った。この口角も違う、ともっと深く唇を合わせられる。だけどもっと、もっと奪い取りたい。

女を抑えて貪って、男を止めるような女の中途半端な手もいつしか男の衣を握って離さなかった。

雪の深深降り初めて、唇から温もりを奪い合った。

「　　につき飴の味のした」

「そういうことを言わなくていいです」

「旨いな、あの飴は」

「……もう」女は顔を真赤にする。唇の離れたそこは一つ布団の上だった。

「ところでお前はどこに寝るんだ？俺の布団しか引かれていないが」  
「……もう！」

疎いのかそれでいて突然で、だがやはり疎いのは嫌になる。と思いつつそれが温ぬくかった。

「仕方ないな、俺の布団に入れてやる。だが寝相が悪ければ出すかな」

本当に、相変わらずだ。さっきのは初めてなのかどうなのか。疎いし鈍いし女の扱いに不慣れのようでいて、それでいて事も無げに突然口を吸って何も様子の変わらない。布団を一つ忘れるなど、有る筈のない宿の手落ちに憂げに嘆息するのにこちらが嘆息してしまう。

「それはこっちの台詞です、覆い被さってきでもしたらぶちますからね」

「やってみろ」

ふん、としかし微妙に笑ってごろんと向こうを向いた。

この人といると、遊女だということを忘れる。

ぶは、と女は湯面から顔を上げた。

「旦那様……るりはとても熱くて……やはり難しいようです」

「そうか？俺は極楽だけだな」

「もう少し……頑張ります」

「そうか」男はくす、と笑って女の頭を沈めた。ぶくぶくと泡の立つ。湯面に月が写り、銀の髪がばらけて浮いている。はらりとどこから枯れ葉の浮かぶ。

「極楽だな」男は酒を口に付けて言った。片手は湯の中の女の頭を慈しむように撫でている。

「逆上せたなあ、瑠璃」

月明かりにぱたぱたと、帯を緩めて布団に寝かせた女を団扇で扇いでいた。

「ごめんなさい、旦那様……お手を煩わせて……るりは放って置いてください、大丈夫ですので……」

「悪いな、調子に乗りすぎた」

コップの水を傾けるがうまく飲めず小さな口からしたり落ちる。

男はコップの水を自分で含んだ。そして女に口移す。んくんと女の喉が鳴った。

「俺でなかったら幸せだっただろうとも、俺でなければ幸せにできないだろうともどちらも思う」

女の口元水滴を指で拭って男は言った。

「るりはとても……幸せです、千次様に出会えて……」

「いつもいつも謝りたくなるが、抱くので気持ちを代えてしまう」

「とても……幸せです……」

女はうわ言のように呟いて口は微笑み、男は早く戻れと扇ぐのだった。儚げなのを扇いで飛んでいってしまったように女の細い手を握って押さえながら。





## 二十六・真砂

「天、次は…いつ来るの？」

背の後ろで自分の手同士絡めて言う。

「さあ。寝たくなったらまた来る」男はあつさりと答えた。

「じゃあ痺れないように練習して置くね」

「別に俺はどちらにせよ変わらねえからいいけどな」

「本当、勝手なんだから」ぷい、と言う。男は笑った。

「じゃあな」

「うん、じゃあ、また」

男の進んでから背に言う。

「あの、ありがとう！楽しかった」

「良かったな」

ぷ、と笑って男は去って行った。

また、来てくれるかな。

待つことしかできない身。約束も何の保証もないけれどそれでもせめて指きりをしてくれたら。

また、来なくなるのかな。

待てども来ない待ち人や、心どこかに君を待ちにけり。

「金が欲しいな」

「おやおや若。浜の真砂と人の欲は尽きないものですね、以前は無頓着だったと言うのに大人になるとは欲に塗れることが、哀しきかな」

「うるせえな。欲しいものがあるだけだ」

「まさか遊女の身請け代が欲しいなどとは言わないで下さいよ、その年で。まだ子供でも通る程なんですから」

「幾ばく要る」

「まさか……本当ですか」

「本当じゃねえよ」背にぎし、ともたれる。「言ってみただけだ」  
ぼんやりと空を眺めている。

「雪は降らねえかな……」

「奥州でそんな気楽な台詞は吐けませんね、喜ぶのはせいぜい子供くらいです」

「悪かったな、餓鬼で。      お前、奥州に行ったことがあるのか」

「行った事はないですね。若、平民より下に奥州者、て知ってますか」

「今は平民の下に身分は無えだろう」

「極貧の国ですから、道奥から生活の立ち行かなくなった者、親に身を売られた者がこの都に出てくるんですよ。前々からあったんですが、奴隷を解放したことで一つ上のところに皺寄せが来たんですね、一気に人身売買の進んで安い労働力が流れ込んできました」

「奴隷が奴隷でなくなっても身分が上がった訳じゃねえだろう。元奴隷はどうしているんだ」

「それが色々と手厚く保護されているんですよ。虐待を厳しく罰したり、最低賃金を定めるとか最低限の生活保証とか。どうも西洋にある律令を参考にしているみたいですね、今までに無い律文です。解放の先頭に立った者を頭に組織がつくられて監視機関になっています」

「そんな力を持っているのか、律を作れるほど。あの傲慢の権現のような親父が許すのか？貴族でなければ人間でないといい出しかねない奴だぜ」

「若、若。幾ら若の生まれる前とは言え、これは完全に身内ごとですよ。表立って中心になったのは公にはなっていませんがこの家の宗主の弟、旦那の叔父です。それに、そもそも解放の発端は……」

そこでんむ、と何やら口を噤む。

「まあまあそんな訳で、元奴隷への蔑視は残っても社会的保護で言えはしつかりがちりされているんです。それにその戦禍で奴隷は

半分以下にまで減りましたからね。奴隷はほぼ都心部が所有していたので、つまり奴隷的労働力の代替に都心部に流れているのが奥州者と言うわけです」

「お前は詳しいな。その解放戦乱や現状やら、奴隷については全く教えられねえんだがどこで知れるんだ？」

「何か都合の悪い歴史は闇に放り込まれるものです。私は若より若い頃から各地転々流浪しているので。知りたいのでしたら関係した者に直接聞けばいいんじゃないんですか」

「その叔父か？」

「近いところでお父上　旦那、とかね」

「それは止せ。極力あいつとは関わりたくねえ」

「じゃあ私が何か機を見て取り持ちましょう。若の面倒を見る傍ら」  
「おい、何を教育係りみたいな顔をしているんだ？　時事を少し詳しくかったからと言って図に乗るな。お前は単なる付き人だろ」

一向気にせず逆にやれやれと手をあげる。

「若だって結構傲慢だと思いますけどね」

## 二十七・練修

「天、天のお洋服が出来ました」

嬉しそうに西洋服を持つてきて母親が言う。

「合わせて見て下さい」

「……そういや」げ、と何か思い出して顔の引き攣る。

「天？……だんすは大丈夫ですか？」心配気に聞く。

忘れてた。完全に。

「今週の末だぜ？」父親迄が来ていた。

「何であんたまでいんだよ」

「瑠璃がいるからだ」

はあ、と溜息を吐いた。まあ、いいや。どの道くだらねえ。

「言い忘れたが」男はくすりと笑う。

「名目は瑠璃の誕生を祝う宴だ。すっぱかしたりして『母さん』を悲しませるなよ？」

「旦那様！それはいいのです。それは……勿論、天に祝っていたらいたらとても嬉しいのですけれど」母親が自分を遠慮がちにちら、と伺い見る。

この野郎。

心の底から愉しそうに意地の悪い笑みを浮かべていた。

「愉しみにしてるぜ？」

笑うと母の肩を促して歩き去って行った。

「雪、付き合え」

「え、」娘を頬をぽ、と染めた。「何、急に……」

「会が開かれるんだ、そこで俺は踊りを踊らなきゃならねえ。その練習に付き合っただけ」

「なんだ……そうよね」女は何かがつくりと肩を下げる。 全く。  
天なんだから。

「駄目か」

「べ、別にいいけど」

「そうか、じゃあ早速やろう」

男は女を立たせた。そうして女の腰を寄せてぴたりと付いた。

「ちちよつと、天、こんな、なに」女は顔を赤くして焦ったように身を振った。

「ふしだらなことを考えるな」

「誰がふしだらよ、天の所為でしょう」

「問答している暇はねえ」

女の手を取ると、思い出して足をすつと動かす。しかし。

「きや、」 女の足はもつれた。

何度もやるが、回転の一つもできない。

「ち、」と舌打つ。「本気でまずいな、割と舐めていた。女に合わせるのが難しい」

「何、これ…」女は息の乱れている。

「西洋の踊りだ。とにかくやるしかねえ」男は息つく女を立たせる。

「ちよつと休憩しましょう」

「お前、体力がねえな。どうせ寝てばかりいるんだろう」

「何よ！付き合っただけでいるのにその言い振りは」

「文句を言っな、買っている時間は俺の物だろう」

ぱん、と頬を打つ筈の手は男に捕らえられる。

「まだ元気があるな」

き、と睨み付けた。

「何よ、その言い方…そうだけど、そうよ、どうせ私はただの買われた遊女よ」

「何か面倒な感傷をするな」

「面倒って何よ、一人だとできるなら一人で踊っていればいいでしょ」

「それなら苦労はしない。これは男女で踊るものなんだよ、しかも誘われたら受けなきゃならねえ」

「……誘われたら？」

「俺の許婚を決める会だ」

男は投げやりに言った。女の手がぐたりと落ちる。

「……帰って」

「は？」

「帰ってよ」女はぐい、と男の背を押し出す。

「雪、」押し出されながら男は首を振り返るが渾身に押す女の頭しか見えない。

「お金なんかいらない…お金なんか、足りてるのよ！」

ぐいぐいと襖まで押しやった。

「天なんか大嫌い！もう二度と来ないで！」

女は大きく手を振り上げる。

ぱあん

乾いた音が空気を引き裂いた。

「俺も、泣く女は嫌いだ」

頬の赤くなつた男は淡白な口調でそう言つと、とん、と襖を開けてそのまま出て行つた。

「大嫌い……天の馬鹿……」

ぼろぼろと涙が染みこんだ畳の上に女の足は崩れ落ちる。頭に差しあつた梅の簪を投げつけると金箔を貼った襖の紙が破れて穴の空く。

「私の馬鹿……」

## 二十八・甘指

「笑うな」

仏頂面にくっつきりと赤い手の形、従者はくつくと必死に笑いを噛み殺す。

「どうしたんですか、若。振られましたか。無理矢理はいけませんよ。まあ失恋も大人への踏み台です」

従者のいない事にしたのか無視をして無表情にさらさらと書を書き始めるがぶつぶつと墨が飛び散っている。

「いやあ、それにしても若のような色男でも振られるとは、やはり男は顔じゃありませんねえ」

ぎろりと睨んで立つ。従者の横をす、と通り過ぎた。

「分かりますよ、一人にするくらいのは気は使います」

なら従者のお前が出て行ったらどうだ。と口もききたくなく自分の部屋である筈のそこを出て行った。

『大嫌い』

ち、と言うのに合わせたように椿の花がぼとりと落ちる。

「天？」

足音に気がつかなかった。顔を上げると雪解け水のように清らかな白肌に水色の瞳の母親がいる。

自分の顔を見て途端にびっくりしたように頬をぺたりと触った。ひりひり熱の持つ肌にひんやりと心地よい。

「どうしたのですか、誰かにぶたれたのですか、天？」

自分が痛そうに眉尻を下げて摩っている。

「これはとてもいいけません。お母さんが天の代わりに言って来ます、



誰に打たれたのですか、天？」

本当、滑稽だ。苛々の気持ちの急に冷えて漏れそうになる笑みを堪える。

「親父って言ったら、」どうするんだ。

「旦那様が？」吃驚したように目を丸くさせる。そして瞳の落ち着かずうつろうして下を向いたが、しかし決心したように顔を上げた。「ぶつのはいけないことです。るりは旦那様に言つて来ます。お母さんがいるので天は安心していてください」

そう言つて恐らく安心させるように微笑んで、傍に付いていた膝を上げて立つ。

「悪い、親父じゃない」離れて行つた手を押さえて言った。

「え、」明かにほつとしてから、「嘘はいけませんよ、天」と叱る顔を作つて言つた。

「嘘じゃねえ。からかつただけだ」

「あ、そうでしたか」そう頷いてから慌てて首を振る。「からかうのもいけませんよ、天。お母さんは本当に心配したのです」

本当、からかい甲斐があるよなあ。

「さ、天。お手当てをしますよ」

親父に向かうことの無くなつた安心のあまり誰にぶたれたか追求するのをもう忘れたようだ。苦笑して、手の引かれるのに特に抵抗をせずに母親と廊下を歩いた。

「できましたよ」

肩頬一面に大きな湿布を貼つてひと安心とでもいうように顔の和らいだ。

こんなの、鍛錬で打ち身なんかしょっちゅうしているのにな。

「天は動かずにいい子にしていました」

微笑んで、ニッキ飴を差し出した。

「ご褒美です」

「褒美だったのか」くつくと笑う。「擦り剥く度にやるから薬だと

思っているのかと思っただけ」

「天は怪我をしても泣かなくて偉かったので、飴をあげたのです。天はとても喜びました」

「あなたの記憶は度々改ざんが入っている。どうして勝手に俺が飴で喜んだりクッキーを好きになったりするんだ」

「るりが初めてお菓子を作ったとき、クッキーは焦げてしまったのに天はうまいと言って全部食べるので、とても好きなのだと思います」

「焦げたからじゃねえのか」

「天は焦げたクッキーが好きなのですか」

「ああ、もういい。違うから焦げたものをわざわざ作るなよ？」

「はい、天」

微笑む母親のまだ手に乗る飴を見る。

「母さん、その飴食わせて」

「いいですよ。天は時々お母さんに甘えます」

嬉しそうに口元に持ってきた来てあーんと言った飴をぱくりと口に入れた。指ごと。ひんやりしていて娘のようにしっとりして細い。すぐに指は口から抜かれて出て行った。

「天はお母さんの指まで食べてしまいました」

わざとしたのも分からずくすくすと笑っている。

「母さんの指は甘い」

舌を出して指先を舐めるとくすぐったそうに笑う。

「天、指は甘くはないですよ。天が甘えん坊なのです」

「母さんだって自分の指を舐めるのが好きなんだろう？」

「え、」ぽけんと見る。

「何でもねえ」

「ではお母さんはもう行きますね。天、困ったことのあったらいつでも言ったださい。お母さんは天の味方です」

「じゃあさ」腕を掴む。「ダンス、教えてくれよ」

「それは…以前にお父様が、お母さんは手伝ってはいけないと、」

困り顔になる。

「なんだ、言っても無駄か」腕を放してそっぽを向いた。あ、とためらう声のあがる。

「お父さんには内緒ですよ」

そう言ってきたのにやりと笑った。

腰と背を支えてくるりと回る。くるくるくるりと大きく小さく一緒になつて。軽快なリズムに乗ってぼんぼん音そのものになったようだ。人と息の合うのがこつも小気味よいとは。

ひと休憩して、ふう、と女が玉汗を拭った。きらきら輝いて、こつちに気がついてにつこりした。

「天はとても早く覚えますね。本当はお母さんは中々できなくて、旦那様をととても煩わせてしまったのです。旦那様は全部一回でおできになるのにるりはできなくて、尖った履物でたくさん足を踏んでしまいました…」

しょぼんと顔を落とす。

「けれど旦那様はるりの頭を撫でて気にするなと言って、できるよになるまで同じことを何度もとても丁寧に教えてくれたのです」  
「ふーん……」

本当、態度が違うよなあ。これが使用人や家臣、あるいは他の貴族でも、他の人間だったらあの冷めた黒の瞳でいとも簡単に切り捨てるはずだ。他人に興味などない、自分以外を信じていない。目の前にいても自分がそれに映っているか分らない、何をも塗り潰すあの黒の眼で。それでも確かに器は本物だから、自ずからその前に人は膝をついてしまうのだ。

## 二十九・天狗

馬車が石畳を走ってからからと。

「ここはどこですか、旦那様。お外の様子が違うようです」

「異人を住まわせている区画だ。普段は出入りの無いようにしている。一時交渉の場だ」

杵に手をつき津々と見ている頭越しに、男はふう、と街灯のぽつぽつを見る。

「別段文化は否定しねえが、あいつらは美を解するに欠けるところがある。放って置くと花の咲かない地になりそうだ。俺がお前を置いて出なければならねえのは全くこの所為なんだぜ。他の者に任せではあいつらのいいようにされちまうから任せおけねえ」

「お花の咲かなくなってしまうのですか」

「大丈夫だ。俺の目の黒い内はお前に灰の空は見させねえ」

男はふ、と笑って心配気な女の頭を撫でる。「それはさておき」

「瑠璃、瑠璃、今日は洋館に泊まるぞ」

「お羊羹、」

「たまに気分を変えるのもいいだろう。今夜はたくさん可愛がってやる」

布一枚の上から線を違わず円をなぞると女はひや、と背を反らす。胸を突き出すように反ってしまったのを慌てて元に戻し取り繕うように訊いた。

「天のお嫁さんはいるでしょうか」

「どうせいないだろう」

「え」

「そんなことより、お前と連れ合うのが愉しみだ。あいつらは何の偏見もなしに俺たちを夫婦と見るだろう。お前の美しさに素直に感嘆するに違いない」

「異人さんはどのようなのですか。本当の人間なのですか」

「髪や目色が黒でなくお前と似たものがある。しかし俺たちと同じ人間だ」

「黒でないのに人間なのですか」

「お前は自分をなんだと思っている」男は苦笑した。

「旦那様の……奥さまです」頬を染めて女がおずおず言う。

「ああ、可愛い。それだけを言わせるのにどれだけかかったことか。ああ、今日はお前のこの世に生まれたのを祝う日だ。盛大に皆に祝わせよう。色直しを二回はするぞ」

「るりを二回も着せ替えるのですか」

「お前、そういう言い方は悪い癖だぜ。言葉は意識をつくる」

「るりは二回も着替えるのですか」

「そうだ。空の色と月の色に。きつとお前に似合うだろう」

男の瞳の中に街灯の輝くのを見た。

「お喜び頂けるのならるりは幾度も着替えます」

「まあ結局お前は何も着けないのが一番美しいんだが、周りに見せるにはそういかなからな」

「旦那様が一番と思うのならるりは着るものの何もいらなです」

「よく言った。そうだこれを今から使つてやろう」

男は小瓶を振る。女はきょとんと見た。

「お前が何も考えずに俺に甘えられるように用意させた。愛し合いたいというのにお前は俺に気を配つてばかりいるからな。今夜は唯只管にお前に気持ちよく感じて欲しい」

「るりは気持ちよく思っています」

「もっと良くなる」男は女の口に手をかけ開かせた。されるままに開いたところにとろりと小瓶から液を入れる。

「これくらいか」閉じさせると女はこくんと飲み込んだ。

「愉しみだな。効くまで少し時間のかかるらしいが、一体どれほど効くんだろう」

くすりと笑って男は女の髪を整えた。

\*

「日那樣……？」

「ああ、悪い。やはりお前が美しいという話だ。異国と言えども人の心は共通だな。やはり美というのは素晴らしい」

しかし今度は青の目の色が自分の方を向いてきて目が合ってしまった。何か手振りをして言っている。

男は笑って代わりに何か答えた。

「天狗？」

男が懷中時計を見る。

自分を連れて高い高い天井の部屋の中央へと行く。

「さあ瑠璃… shall we dance?」

見たこと無い顔立ちの大勢の人がじっとこっちを見ていて、動いているのは自分達だけで、だけど怖くない。ここだけに明かりが照らされて周りは暗くてその通り、ここだけが明るいここだけが自分の場所。

二人きりになってくるくる回る。

手、背、腰。安定した感覚。眼差し、髪の毛、洋服。優しい黒体がどんどん熱くなっていく。回転して回転して、軸から熱く熱くなっていく。きちんと止まれるだろうか。止まってしまったこの熱が内に巡って焼かれてしまいそうだ。

一曲の終わった。波の音のように大きな拍手の音が響く。高い天井を打鳴らす。

「楽しかったな？瑠璃」

耳の熱くなってこくと頷く。

それからぱつと明かりが点いて、ざわざわと人波が広がり始めた。そこやかしここにざわめき衣擦れの音がして、そして止まった。指揮棒の振られてまた音楽が始まった。

「どうする？もう一度踊っておくか？」

「少し…立ちくらみのするようです」

「何？大丈夫か」

男は女の肩に触れた。ぴくんと動く。男は目を睨めた。

「ほお…」

### 三十＊・乱髪

グラスに小豆色の液体を入れて其れを持ちながら会話をしていると、相手が少し興奮して背後を指し示した。

少し体を捻って振りると黒髪の男が通り過ぎる。嫌なものを目にしたとすぐに視線を外しかけた、が。

「母さん…？」

隣を歩いている母の顔は逆上せたように紅潮し、自分で歩く力の弱まっているように体を男の方に傾けていた。すぐに足が向かう。

「大丈夫か」

「あ…天…」

瞳が濡れていた。すぐにその水溜りの目を俯きがちに逸らせる。吐くと息は熱そうだ。

「酒を飲ませただろう」

睨むと、「いや、」と笑っている。具合の悪そうなのにどこか笑っている。

「水を持ってくる」給仕人の姿を見つけて急いだ。

「だんなさ、ま…るり、も…あるけなくて…」

「もう少し辛抱しろ」

足の震えている女を抱え上げた。

「あ、」

乱れた吐息を上げる女を抱えてホールを横切っていく。人の目など気にはしない。

考え深げにじっと見ている男がいた。



### 三十一・出生

ざわつく会場に戻る。

人だからのできている方を見ると中心にいるのは黒髪の子だ。年の近い若者同士で談笑をしていて、娘は遠巻きに固まりながらもそちらにちらちら視線をやっている。年配の者は年配で腰掛に深深と落ち着き情勢やらを話している。国より年で固まるもんだな、と思う。

しかしあいつは本当に娘に目もくれない。

時間のあれば遊郭で遊んでいると聞いたが、あの様子ではまだまだ女を知らないな。

「ミスター・サー・キリサキ」

「ん？」

振り向くと老年に差し掛かる頃の男がいた。

「なんだ？嫁候補の話ならあいつに直接つける」

「奥様のことです、サー」

男は僅かに眉を動かした。微笑の消えるのは滅多に無いことだった。

「ルリ……なんだと？分かり難い。自国語で話せ」

蝋燭灯りの揺らめく薄暗の応接間、白髪交じりの男と黒髪の男がソファに腰掛け向かい合っている。男が鋭い眼光で言うと、その老年の男は驚いた顔をし、試しに自国の言葉で問いかける。

「サー・キリサキ、我国の言葉もお判りですか」

「黙れ。話せ」

頷いて、前かがみに手を組んで話し始めた。

「ルリイニヤ・マリヤ・アレクサンドリア皇女です。かつて皇太子  
夫御夫妻が日本視察の折に誕生為された。しかし御子は生まれて間  
もないうちに何者かによって連れ去られました。当然騒然としたの  
ですが、門外に出てはならない取り決めで、この国に働きかけても  
口では言うものの一向に腰の上げる気配は無く、遂には帰国の刻限  
に迫り無念に去ったのです」

「その昔話が俺の妻とどう関係のある」

「お解りでしょう。その姫が実質この国を取り仕切る権力者、セン  
ジ・キリサキ貴方に見初められ妻となつていようとは……。もう諦  
められていたものを……やはり血筋というのはどうしようと顯われる  
ものだ」

「憶測甚だしい。何の証拠があつて言っている」

「あの見事な銀の御髪は我国皇族代々に伝わる証、空色の瞳は王妃  
様そのものです」

「は」と鼻で笑う。

「黒髪黒目の人間が何人いる？髪眼の色など証になるか」

「ルリと呼んでいましたな。それはこの国に良くある名ですか？偶  
然と言うには最早不自然過ぎる。その名を持つことが何よりの証で  
はないですか」

「下らねえな、下らねえよ。二度と俺に同じ話はするな」

男は立ち上がった。

「サー、何故拒むのです。何も貴国を責めようとや連れ戻そうと権  
利を主張する訳ではありません。失礼ながら我国との血縁のことは  
貴国にとって願ってもない話ではないのですか。率直に言つて対外  
軍事力に乏しい貴国が今均衡を保つていられるのは貴方の手腕に依  
るもの。貴方もその不安定さを承知で御子息の婚姻を他国との架け  
橋にしようとか此度の催しをされた筈だ」

男は溜息を吐いた。

「違つな、単なる興だ」

「それならば尚更、」

「今役に立たたずとも足掛かり、か。姻戚を理由にすれば他国に先じて踏み入れることも容易い」

言葉の詰まる老紳士に男の口元は笑っている。

「下らねえな。只管<sup>ただ</sup>下らないだけだ、浮世の事は」

はあ、と老年の男は何か苦笑する。

「敵いませんな、腹の探りあいには付き合ってくれないとは。興味深い人だ。しかし正直なところ、どうする気なのでしょうか。この情勢で力無き均衡はありませんよ。真偽は重要ではない事は貴方に言うまでもない。言わば協定、援助が得られるのは確かなことです。国を考えるのなら領くのが当然のところを、それとも東洋の黒い虎には一体どんな深淵なお考えがおりなのかお聞きたい」

「単純なことだ。唯許せねえのは」

鋭い目を真直ぐに向けられ、自分よりも随分若い男に思わず怯む。

「あいつを下らねえ政に利用することだ」

「国より女が大事と？」

くすくすあがる笑い声。その姿は影にすらりとしたシルエツト。

「当然だろ？国など俺とあいつの生きる間保てさえすればいい」

「不思議な人だ」ふう、と息を吐く。

「勝手が過ぎて潔い。国の為に生きること誇りと使命を持つ気持ちには変わらず確かなのに、どこかで貴方を羨んでいるのかもしれない……何か力の要る時は言って下さい、サー・キリサキ。力になります。友人として」

片目を瞑って笑って見せた。

「『友人』達に言っておく」

口元は不敵な微笑、瞳は日本刀のように研ぎ澄まされて黒い。

「俺とあいつの生きる間は、この国は何にも侵させねえ」

言い放ち、その男は立ち去って行った。



## 三十二・殴拳

父親は一人で戻ってきた。そうして誰か他国の老紳士と連れ立ってどこかへ行く。

母さんを放って、何をしている。

熱ぼったく具合の悪そうな顔を思いだす。

……俺にも責任はある。

連日踊りの練習に付き合わせた疲れが溜まっていたに違いない。顔に出さずに何かと耐えるのが母だから、無理をさせてしまっていたのだらう。やっと今日自分の披露も終わって、一拳に気が抜けて熱が出たのだらう。

そう思うと、早足に廊下に出ていた。

確かに招いた側が席を外す事は躊躇われたが、かと言って苦しむ母親を一人置いて父親が抜け抜けと戻ってきたことは許せない。会場から連れ出したのは心配してではなく、体裁の為だったのだ。

母が居るはずの控え室の戸を叩く。

「母さん？入るぜ」

そして眼を疑った。

椅子に縛り付けられて其処にいる。衣服を緩めて安静にしている筈が。

縄は体に食い込む程きつく縛られて、手足は自由がきかない。胸部を押さえつける縄の間隔はまばらで、柔らかい肉が毀れ出ている。淫らだ。

「天……」

見られて焦り、しかしがたがたと身動きは取れずどうすることもできない。せめてにもか、必死に顔を下に向けている。自分が目を

背ければ人からも見えなくなっている赤子のようだ。冷えた汗が母の首筋を伝うのを見てはつとした。体調が優れないのだった。

急いで縄を解き、寝かせるのに抱き上げようとするとか細い声をだす。

「今お母さんに触ってはいけません」

そうして自ら立ってよたよたとソファに行きとさりと倒れこんだ。「ありがとうございます、天……」

ぐったりとしていて少し息の早く、心なしか頬も染まっている。涙を流した跡、涎の跡が化粧に筋を作ってはつきりと分かった。素肌の部分に残った縄の跡を見て、体中が熱く燃え上がった。

病人に、なんの仕打ちを。

瞳を閉じた母親、その時とたんと扉が開いた。言葉も出ず黒い瞳の男をぎり、と睨みつける。男は自分がいるのに眉根も変えず、いつもより無表情気味に歩いてきた。母親は足音に気づいているだろうが眼を閉じたままにしている。ぎゅ、と縮こまった拳があった。何故か懸命に狸寝入りをしている。

「瑠璃、椅子から降りていいと俺は言ったか？」

声音に細肩が震えるがそのまま身を固くしている。

「母さんは眠っている」睨んだまま阻むように立つ。

「瑠璃、仕置きが必要みたいだな」

母さんの肩がびくんと動き、起き上がった。顔は下を向いたまま、よたつきながらも急いで椅子に戻り座った。

「あんたは……！」

激情のままに近づき、微笑のままのあいづが眼前に来る。その顔を殴った。

ばああん

「旦那様！」

呆気ない程入った。避けられるか逆に返されるかそんな気でもとにかく気の収まらずに拳を振ったのに、酷く自分の思う通りに頬を打つ感触があった。

天才というのは嘘か。

いや、身じろぎもしなかった。飛んでくる拳を前にして何の拳動も示さないというのは有り得ない。反射しないという方がむしろ難しい。

「旦那様……！大丈夫ですか、旦那様！」

母親は椅子から立って駆け寄ると、泣きそうな八の字眉で頬に手を伸ばしている。そして八の字を心なし逆にして自分を向いた。

「天！どうしてこんなことを……ぶつのはいけないことです！天はお父様に謝らなければなりません」

その後ろで父親の口元がくすりと上がったのを見た。

この為か。

一気に立場を入れ替えた。もうばきんと折れそうな程に歯を噛み締めているが、酷く馬鹿らしくなって足は部屋の出口に向かう。

「あ、天……お父さんに……」

気弱くなった声が追ったが、構わず大股で部屋を横切り扉を開ける。

その部屋と自分を繋ぐ長い糸を断ち切るようにばたんと閉じた。

もう、知るか。

女、女。女というものは嫌いだ。

### 三十三＊・動揺

「旦那様：お痛いですか」

男は自分を心配気に見つめる女を抱え上げた。

「あ」とやはりぴくんとする。

「もう自分で歩けます。旦那様：」

恥ずかしそうに視線を逸らせている女に構わず連れ去った。

とすとベツトに降ろされる。

「旦那様、腫れています。すぐにお手当てを」

手首がぐ、と掴まれて押し倒される。一気に体が熱くなったのが恥ずかしい。

「天の事はお前に任せた筈だが：父親の頬を殴るとは、躰がなっていねえみたいだな」

「天は普段とてもいい子なのですが：何か今日はおかしくて、」

「躰のなっていない女に躰のできる訳がないか」

女は途端に目尻を下げ、ふるふると潤む。

「あ：ごめんなさい：悪いのはるりです……」

「そうだろうな」

女の着衣を剥ぎ取ると、しなやかな肢体が現れる。

甘たるい蜜液に濡れていた。足に向かって幾筋も垂れた跡がある。今また滴が流れるのを見た。

「叱られている時でさえ男を求めているのか」

「これは：ごめんなさい……！いつもは違うのです。どうして今日はこんなになってしまふのかるりは分からなくて、」

「分からない？」は、と男は嘲笑う。

「お前が卑しいからだろう」

女の蒼い瞳が見開いた。



言われたことは、無かった。

それは自分で分かっていて、でも卑下すると叱られて胸を張るよう言うのだった。こんなに美しいのだからと優しく髪を撫でてくれるのだった。

男の手が張った胸に伸びる。指の腹で押し潰すと、口から吐息が漏れてしまう。

「本当に卑しい女だ」

言われたことは、無かった。

蔑む眼が自分に向けられることはただの一度も無かった。意地悪ではあったけれど、真っ直ぐな黒い瞳はいつも温かかった。  
のに。

いつもと違う。何か雰囲気が違う。

「お前は卑しい女だ」

耳に直接囁かれ、脳髓を揺さぶる。

「はい」

目尻からぼろりと涙が毀れて頬を横切り布に染みこんだ。

「るりはとても卑しい身です、御主人様……」

男は初めてくす、と笑って自分の衣をも剥いだ。

「人は皆卑しい」

女の脚を割る。

「あ……！」

体は弓なりに反り上がり腰が浮く。意思も関係なしに歓声をあげた。

### 三十四・偽名

朝、気が付くと男の素肌に抱えられていた。

しなやかで固くしまり心地のよい温かさ。巢の中の雛のように安心する。でも何で優しく包まれているんだろうとおずおず顔を見上げると、男はまだ眠っていた。これは初めてだった。いつも先に支度ができていなくて謝ると、人より遅く目を覚ましたことがないから気にするなと言っていた。

初めて寝顔を見る。眉、目、鼻、口、顎……全て完璧に整っている。黒い睫が目元にかかり、寝ても凛々しい口元、もう何年も経つのに初めて顔を見たようだった。

「とても……綺麗です」

呟くとふと口元が笑んだような気がした。錯覚ではなかった。男の眼がすらりと開く。

「だ……あ、御主人様……」

「千次」

「けれど」「昨夜を思いだす。自分は酷く卑しかった。恥ずかしさに今すぐ溶けてなくなってしまうたい。

「すまなかった」

閉じ込めるうに腕が締まった。

「俺という者が、どうかしていた。自分で思うより動揺しているらしい」

「え」

「誰にも渡したくない。散々な仕打ちをして置いて勝手だが、俺の元から離れないで欲しい」

「そんな……るりは旦那様のものです。こんな身をお傍に置いて頂けるのはとても幸せなことです」

「お前は幸せを知らない」男はどこか哀しげに微笑した。

「ぶたれないだけで『幸せ』なんだろう？ 毎日三食食べられて『

「幸せ」なんだろう？ 撫でて貰えばそれで『幸せ』なんだろう？ お前は可哀想だ。いつも身勝手な俺に振り回されて、拒むこともできずにいいように弄ばれている。他に身を置く場所があればお前は俺など捨てて行ってしまう筈だ」

「そんなことはありません。本当はるりには勿体無いほど幸せです」「それが勿体無くなかったら？ もっと然るべき地位を享受できるとしたら？」

「旦那様はなにを言っているのですか……？」空色の瞳が揺れる。

「教えるものか」男はふ、と口を歪める。

「お前はもう死ぬまで俺のものだ」

「本当ですか、旦那様」女は顔を綻ばせる。「るりはとても嬉しいです」

「それは本当なのか？ 瑠璃」

「旦那様はいつもるりの言うことを信じて下さらない」「しょぼんとして言った。

「何があるうと許したいからだ」

「るりは裏切ることありません」

男は何も言わずに口付ける。生暖かい舌を責め立てた。

まどろみながら腕枕に乗せた頭を眺める。きらきらと朝日を浴びていた。

「瑠璃……父と母を覚えているか」

「るりにお父さんとお母さんはいません」

女はできるだけ声をいつも通りにして答えた。

「お前の名は誰に貰った？」

「……………」

「言いたくないのか？」

「言わなくてもよいですか？」

「駄目だ」

女はまた口を噤む。

「また今度に……お話します」

「駄目だ」

「調べさせればすぐ分かる。しかしお前の口から直に聞きたい。それならば何があるうとを許す」

女は目を彷徨わせてから震えて男を見上げた。

「話しますので最後になるりを抱きしめてください」

「最後なら嫌だ」

「とてもお好きでした、千次様」

女は男の肌に手を置いて言う。

「ごめんなさい……けれどるりは旦那様を騙そうとした訳ではないのです」

「何？」

「るりは……本当はるりの名ではないのです」

### 三十五・真名

「本当は扇子は名を持たないものなのです」

女は俯いて何かに押し潰されているようにか細く口を開く。

「必要があれば、買っていたから御主人様に名付けられます」  
「だがお前は名を聞いた時に名乗ったな」

「はい……るりは名前が無かったのですが、るりの中にはるりもいたのでそう答えてしまったのです」

「お前の中にお前がいる？ 話せ」

「『ルリ』と言うのは……お友達の　　」ふるふると首を振る。

「今思うと、お人形の名前でした。るりは気がついたときからそれを持つていて、いつも二人でいてそれを離さなかったのです。るりを気持ち悪がらないのはその子だけでした。その子も髪と目の違って、るりがいなければ一人きりだったのです。二人でいると余計に気持ち悪がられたのですが、それでもるりは離しませんでした。」

けれど取り上げられてしまったのです。……返してもらえませんでした。頑張っても届かなくて、痛くても届かなくて、るりは助けられずに気を失ってしまったのです。

気のついてからるりは探しにきました。とても探して、そして見つけたのです。手足のばらばらになっていました。裸になって、髪の毛取り取られていました。毛が散らばって、虫のいて、青い目の泣いていました。

るりは怖くなって走りしました。その子を置いて逃げたのです。

るりはばらばらになるのがとても怖くて戻りたく無かったのですが、見つけられてしまいました。けれどばらばらにはなりませんで

した。るりは珍しいので繋がったままで済んだのです。その代わりにとてもお腹のすいて葉っぱを食べることになったのですけれど。」

るりは助かってしまったのです。けれどももう誰もいません。一人になるのは当然のことだったのです。るりはとても悪い子でした」

男はぎり、と奥歯を噛んでいた。女の話す間、地獄の烈火の如き黒い炎を宿しながら何も止めなかった。

「ルリはるりの頭の中にずっといました。るりはとても怖くて眠れなかったです。ルリはるりの代わりにあんなったのです。羨のときはルリを思い出して真似るととてもうまくいきました。それに怖くなくなるようでした。それでるりはとても上等品になりました。るりはるりをルリと思うことにしました。いつのまにかルリとるりは一人になつていたのです」

「それでは人形の名がルリだったということだな」

「はい、旦那様……るりは名前を盗ってしまったのです」

女はこれ以上なく縮こまっていた。触れないように男の体から離れている。男は無理に寄せようとはしなかった。

「何故人形の名はルリという？お前がつけたのか？」

「書いてありました、旦那様。今思うとよく分からない模様なのですがなぜかるりはそれを見てるりと思ったのです。旦那様に習った字の中にはありませんでした」

「こんな字か？」

男は紙に女の名を書いた。この国の文字ではなかった。

「そうです、旦那様。確かそのような模様でした。どうして旦那様がお知りになつているのですか」

女は驚く。

「るりは旦那様のものだったのですか」

「そうだ いや、違う。俺の瑠璃はお前だけだ。人形なんかじゃねえ」

女は驚いて目を見開いている。男は特別感情を込めた訳ではなく分析的な口振りだった。そのまま淡々と続ける。

「その続きになにか書かれていたか」

女は必死に思い出そうとして、毎日見ていたものがぼんやりと浮かんだ。

「なにか……あつたかもしれません。けれど掠れてしまつて判りませんでした」

「そうか……」

男は深く長く溜息を吐いた。

「瑠璃、お前のその名は人形のものじゃねえ。元々お前に与えられた名の一部だ」

「え」

「自分の真の名を知りたいか」

女は表情が止まつたが、しかし布をきゅ、と掴んでふるふると首を振る。

「旦那様に……お名前を頂きたいです。本当はそのはずなのです」

「そうか、ならば」男はじりじりと離れていた女に手を伸ばし頬に触れた。ぴくんと動く。

「お前は瑠璃だ」

「はい、旦那様」

やっと花のように笑つたのにほつとしたのを可笑しく思いながら、男は女を抱き寄せた。慈しむように可憐で脆い花を胸に包む。

自分というものがこれほど女に左右されるとは。

男がくすくす笑っているのがどうしてだか分からなかったが、この耳にくすぐったいくすぐすが好きだった。錘を取ってもらつたようにふんわりと軽くなって、どうしても幸せでいてしまった。

るりは千次様に会えて幸せです。

小さく小さく口の中だけで呟いて、それでも伝わって頭を撫でられたのに女はまたほっこり頬が緩むのだった。



## 三十六・仲良

「あーあ」

「何を溜息ばかり吐いているんですか。そう言えば夜遊びがぱたりと止みましたね。誰か舞踏会で見初めたんですか」

付き人を無視して伸びをしてからまた書に目を戻す。

「何かさあ」ふと言う。

「何です」

「親父と母さん、仲良くなつてねえか？ あの舞踏会から帰つてきてから」

「そうですね？ 前から旦那は奥方に夢中だったじゃないですか」

「それもなにか一方的でなくなった感がある。前は親父に振り回されている感じだったのに」

「それならいいことじゃないですか」

「最後の記憶だと親父が最悪だった覚えしかねえんだが。また何か母さんは騙されているんじゃないのか」

「どうでしょう。旦那は勘違いされ易いですが否定するのを面倒がりますからね。そこは悪い癖だ」

はあ、とまた溜息を吐く。

「男女の機微は分かんねえなあ」

「ほらほら、悩みがあるのなら人に相談がいいですよ、私とか」  
だるそうに何か楽しそうな従者を見る。

「女の機嫌を取るにはどうすればいい」

「ああ、やつと若も人の気を気にする心を持ちましたか。良いことです。やはり社会勉強に連れて行って良かった」

「黙れ。従者風情が」

「そついうのは良くないですよ、身分蔑視をした賢帝は古今東西あ

りません」

「言い方が悪かった。黙れ、影郎風情が」

「ああなんて人だ、旦那はそんな軽口を叩かない」

「あいつは腐つても貴族だからな、腐つても」

「若は貴族じゃないんですかい」

「さあな」と頭に手を組む。

「母さんは元は貴族じゃないと言うし俺も平民の生活で育った。しかし大貴族家の跡取りとかいう。俺は何だろうな」

「若、女の機嫌を取るなら気の利いたものを上げるといいですよ」

「なんだいきなり、てめえで聞いて置いて話を変えとは」

「いや、茶化そうとしただけなのに思いのほか重い話になりそうだったので」

「まあいい。ものを？」

「そうです、そうです。鏡や入れ物なんか」

「買ってこい」

「嫌です」

男は顔を顰める。

「なんですか、その顔は。私は若の用心棒であつて小間使いじゃないんですよ。大体若、ご自分で選ばず使用人に買わせるとは高慢で反って逆効果です」

「しかし何が喜ぶか見当もつかない」

「聞けばいいじゃないですか。母上とか、それが父上に」

「親父に？」はん、と鼻で笑う。

「若い時は源氏の如しもて囃されようだったらしいですよ」

「へえ……あんなのが」

「若は顔が似ていて教養も優れている筈なのに、全く色気がありませんよね」

「うるせえんだよ。いるか」

「これはどうですか、旦那様」  
「美味しいな」

真ん中に穴の開いた菓子肴を口に齧って男は微笑む。

「こねて油で揚げたものです」

「そうか。お前は西洋の菓子が好きだな。作るのも上手い」

「るりは本の通りにしただけです」

ちよつと照れて言つた。

「無い調理器具の多いので心配でしたが良かったです」

「無いのか？ そうだ、この機に西洋型の台所を用意しよう。お前専用によい」

「本当ですか、旦那様」女は顔を輝かせた。

「勿論るりの専用でなくて十分です。けれどオープンというのがあるととても便利になると思います」

「分かつた、言つて置く」

「ありがとうございます、旦那様。るりはたくさんお菓子を作ります」

「そんなに作つても甘いものをそう多くは食べねえよ」

「お配りしてもよいですか、旦那様」

「家族に？」

「ご家族様にも食べていただければ是非……他にもお世話になっている人皆にです。この家で働いている方々と、できるのならこの国のひとみんなに配りたいです」

「そうか、それは割と壮大な計画だな。よし、俺も手伝つてやろう」  
女の顔に花が咲く。

「だが一番初めに食うのは俺だからな」

「はい、千次様」

それからちら、と伺い見る。

「天も呼んで三人で食べれたのならもつと美味しくなると思つてすけれど」

「お前がしたいならいいだろう」男は朗らかに笑つてしつとりした

女の頬を撫でた。

「丁度いい。入ってきたらどうだ」  
「え」

ち、と舌打った。こんな昼間から親父がいるとは思わなかった。帰ろうか構わず聞くか少し足踏みしていただけなのに覗いていたみたいに言いやがって。壁から姿を現すと、「天」と言って母親の顔がほっこりする

「これの匂いがしたのですね。天にも持って行こうとしたのですが、良かったです。まだ出来立てなので」

また何か作ったらしい洋菓子の前で能天気になっこりと笑うので仕方なく踏み入れた。

### 三十七・茶飲

前にやった緑の前掛けをして菓子がたくさん並んでいる皿を出してきた。ほかほかと湯気を上げている。

「ドーナツか」甘たるく油っぱい匂いにげんなりした。

「火傷していないか」

「大丈夫です。上達したのです」

「なんだ、俺より先に食べたことがあるのか」

男は自分の和服の袖に手を入れ、女は遠慮がちな返事をする。

「旦那様は甘いものの苦手でしたので」

「いつから食えるようになったんだ、あんたは」

しらけた目で見ると男はしらつと答える。

「茶だつて菓子はあるだろう」

陶器のポットに手を伸ばし、用意された新しいカップに紅茶を注いだ。毒が入られないかきちんと見張る。

。それはもう随分と紅紅としていた。

「絶対濃いだろ。自分で淹れなおす」

「旦那様のお紅茶は濃くに出します」

母親は何か得意げに言い、その上それを褒めるようにぽんと頭を手を置かれて嬉しそうに見上げ、男と微笑み合った。

「ほんと、なんなんだ……？」

こんな夫婦仲が良いのは初めて見る気がする。今までは何かすれ違っているようだったのに。

「女のことか？」

男が面白げに聞いてきた。何か分かりやすい顔でもしていたか。それを受けて母さんの方も目をきらきらとさせる。

「お嫁さんですか？」

「違う」と即答する。

「そうですか……」

「何で残念そうな顔をするんだよ。母さん楽しんでいるだろ」

「るりは……女の子もほしいと思って、」

「俺に言えよ」男は頬をちゅ、と啄ばむ。

「天にお嫁さんのできたらるりの娘さんになります。一緒にお菓子の作れるでしょうか」

「そうか、それは楽しそうだな。そうしたら三人で暮らそうか」

「旦那様、天を忘れています」

くすくす笑って間違いをただすのを「わざとだよ」と溜息吐きながら教えてやった。

よく分らないことは耳に届かないようでソファにぱたぱた走って行ってぽんぽんと叩く。

「天、こちらに座って食べてみてください」

「いらねえよ。俺は洋菓子よりも　おい、ふざけるな！」

ずるずると腕を引かれていた。親父に触られるのは初めてで肌が泡立つ。しかし見かけから想像できない程の力で抵抗も虚しかった。ソファにばすんと投げ出される。

「食わないって言うてんだろ」

「天……気に入らなかったですか？」少し睫を下げて言う。

「そんな筈ねえだろ？」

答えたのは親父で、菓子を手に取ったのに嫌な予感がした次の瞬間には口に無理やり突っ込まれていた。

「　　んん！」

無理やりに顎を閉じられている。母親はただびっくりして目を丸く見ている。

　　噛めねえんだよ！

　　飲め。

息が苦しくなってきた、だんだん母親もおろおろしてきた。

「旦那様：天はもしかして飲み込めないのでは、」

ち、と小さく舌打つのが俺には聞こえた。手が離れる。ごくんと飲み下してからぷは、と息を吐き出す。

「てめえ……」

ふん、と親父は意地悪く笑う。それも背にいる母さんには見えな  
い。

「母さん、茶！」

「あ、はい。すぐに」

ぐ、と今度は顎が掴まれた。

「おい……俺の瑠璃に何を偉そうに命令している？」

掴まれた手を離そうとするがぐぐと力を込めてもびくともしな  
い。

「はい、天」母さんが紅茶のカップを持ってきたのに合わせて手の  
離れる。

「以後気を付けろ」にこりと笑って言ったのを、何をどう勘違いし  
ているのか母親がにこにここと笑う。

「なんだか旦那様と天の仲が良くてるりはとても嬉しいです」

「誰が」ふん、とそっぽを向いた。

「お前、いつまでいるんだ？さっさと帰れよ」

何かもう面倒そうに母親の隣に座っておまけに肩を寄せる。

「母さんに用があるんだよ」

「何ですか、天」また嬉しそうにする。

「女は何を貰ったら一番嬉しい？」

「え」母は小首を傾げて考えた。「そうですね……」

「エプロンはとても嬉しかったです」

「前掛けは使わない。例えば親父から貰ったもので」

あくまで母親のみ視界に映して聞いて聞いた。

「旦那様から……」はたと止まる。

「何も貰ったことないのか？」

「え……たくさん」そう言うってから助けを求めるように親父の方  
を向いた。

「何もやってねえ」くす、と親父は笑う。

「贈りたくともこの世に瑠璃に釣り合えるほどのものなどない。あ  
るとすれば俺くらいだ。だから瑠璃は俺がいればそれでいいんだよ。  
心通っている俺たちにはものなど必要ねえ」

「結局自己陶醉じゃねえか」呆れ顔で見た。

「分かってねえな」男は笑う。「ものは心だ」

「旦那様にはたくさん頂いています」と柔らかに微笑んだ。

「毎晩、な」

男は笑い、赤くなった女の顎を持って瞳を見つめ合う。どうやら  
また二人しかいない世界にいるようだった。少し自棄になって紅い  
茶をずっと飲む。

\*

「結局分かんねえ」

「そうですか」

にこにこ笑って昆布茶をだす。

「気が利くようになったな」

「いえ、私のです」と言っで自分で飲む。反応するのが面倒で方頬  
杖をついたままだった。

「冗談ですよ、はい、若のも」

「ずっと飲んだ。」

「はあ……いいな、茶は」

「抱いてあげればいいじゃないですか」

吹いた。

「若は面白いですね。市井の男子みたいだ」

「普通で悪かったな」無愛想に答える。

「いえいえ、大事なことですよ」

「親父は普通じゃないだろう？」

「普通じゃないですね。若は旦那のようになりたいんで？」



「なりたくねえよ」

「ならいいじゃないですか」

ち、と舌打つ。何か丸め込まれたような感だ。

「茶でも飲みに行つてはどうです」

「茶？」

「別に何もしなくてもいいんですよ。二人で育む時間が大事なんです」

「お前は知つたような口振りだな。誰か大事な女がいるのか」

「それもあつてこんな貴族の屋敷で下仕えをしているんです」

「本当一語余計とお前のことだな、こんなとは」

「それではいつてらっしゃい」笑顔だ。

「行かねえよ」溜息を吐く。「喧嘩は面倒だ」

### 三十八・手作

あれやこれやと構って子が帰った後。

手作りの菓子を三人仲良く囲むという夢が叶い、るんるんと洗い物をしていた。

「瑠璃……」

「あ、旦那様」

背後に来たその人を振り返ろうとしたが、

「ひや、」

着物の裾を割ってひんやりした手が腿に触れる。

「あの、もうすぐに洗い終わりますので、」

濡れた手は食器を落とさないようにしてもじもじと言うが。

「俺が食べたことのない菓子を天には随分と作ってやったみたいだな？」

その手は撫で上がったかと思うと尻をつねる。

「はああ」

思わず声が出たのは、それは餅なら千切れてしまうような痛さだった。膝から力が抜けて手を台に付く。

「それはその……旦那様は召し上がらないかと思い……天は好きでしたので……」

つまみは取れてほっとする。ひりひりするのをさすりたい。

「作れ」

「え」

「天にも手伝わせて、俺に菓子を作れ」

「あの、けれど御貴人がお台所に立つのはいけないことでは……るりでは天に言うことは　ひ、」

ぎゅい、と抓られて言葉が止まる。背後の声が囁くように。

「仕置きをしてからの方が分かりやすいか？」

「あ、るり、天と一緒に菓子を作ります。すぐに、」

竦んで女は早口に答える。

「いい子だ」

指が離れ、耳を甘噛みすると男は離れていった。女はひりひりしながら痺れていた。

＊

母親が戸口に立って何か言い難そうにもじもじしている。

「なんだよ？」

「天：お手伝いして頂けませんか」

「手伝い？別に構わねえけど」

「では、お願いします」

ひとまずほつとして、だがまだ何か不安げにとことこ歩くのについて行った。

どうやら台所に連れて行かれて戸口でちょっと立ち止まる。

「………なんの手伝いだ？」

「え………と、お菓子を作るのを手伝って頂きたくて、」

「俺より女中の方が役に立つだろ、料理なら」そうくりと背を向きかけた、がはっしと服端を掴まれていた。瞳が潤んでいる。

「天に手伝って頂かないとお母さんはとても困ったことになってしまいます」

「はあ？」

「お願いします、天」

「………」

なんでそう必死で泣きそうなのか意味不明だ。

++++

「なんだっただ、一体？」

持たされた焼き菓子の袋を手にして訳の分からないまま廊下を歩く。焼きあがった頃にはとつぷり日の暮れていた。

『天、これを混ぜてください』

『天、この型で抜いてください』

誰にでもできそうなことで、余り自分のいる意味はなかった気がするが。

『ありがとうございます。天のおかげでたくさんできました』

酷く嬉しそうに笑った顔を思いだす。そう言えば作業中も、始めてしまえば途端に浮かない顔の消えててきばきと、非常にうきうきとして『天は上手です』『力のあります』としきりに感心してみせていた。なんだか悪い気もなくて、母親と二人台所に立っているのを時々可笑しく思いながらも、時間を忘れて楽しんでいた気がする。

部屋に戻る。そのいつもを見て一挙に現実に戻ってきた来たようだった。

「若、なにか白く汚れていますよ」

「ああ、」粉のついてているのをぱんと払う。

「そこで払わないで下さい。誰が掃除をすると思っっているんですか」

「お前じゃねえだろ」

「若でないことは確かです」

「全く口煩いな。余計な口出しをするな」

「はあ、とベットに横たわり、ぽんと包みを枕元に投げる。」

「おや、もうお休みですか」

「疲れた。お前に」

「それはなんですか、甘い匂いがしますが。まさか私の為に？」

「黙れ。灯りを消して出て行け」

灯りと気配の消えるのに合わせて瞳を閉じた。鼻に甘い香りのする。

台所に女の姿がある。何か作っていた。

『夕飯はなんだ？』

手元を覗くと鉢に白いものを練っている。

『クッキーが夕飯になるかよ』

呆れて笑うとはにかむ。その白い顔の顎を持って上げる。

愛しい

林檎色の唇に近づいた　　が、

『大嫌い！』

ばきい

「痛つてえ！」

布団、朝日、生々しい頬の痛み、　　従者。

「てめえ……！寝起きの挨拶がそれか！」

立ち上がってすぐに従者に掴みかかる。

「仕方ないでしょう！防衛本能です」

「何の防衛だ。寝てる者に殴りかかるとは不道德の過ぎるぞ」

「朝御飯のできたというので、寝坊をしている若を起こそうとしてあげたんですよ、そしたら若が私の顎を掴んで　　これ以上は言わせないで下さい」

「何の言い訳も立ってないぞ。覚悟はできているな？そこに直れ」

投げようとするが流石に用心棒らしくうまくいかない。相手も仕掛けて来る。

「刃向う気か」

「悪いのは若です！」

「丁度言い、手前には日ごろから鬱憤していたんだ。相手になれ！」

「望むところです。若に手ほどきして差し上げましょう」

「ほお……舐めるなよ。手加減しないぜ」

喧嘩が始まった。

.....

「若、中々腕をあげましたね」

「ふん、俺の勝ち越しだな」

「いやそれは違うでしょう」

「お前の方が多く投げられた」

「若の方が痣の多い」

「もう一度はつきりさせてやろうか」

「嫌です。腹の減りました。それにやり過ぎると解雇されかねない」

「それは丁度いい。一挙両得じゃねえか」

「分かりました、私の負けです。手加減の難しい程に若は強くなりました」

「だから一言余計なんだよ、手前は」

「噛み付くようにぐ、と睨みあげる。合わせてぐぐ、と腹の音が鳴る。」

「あはは、若は可愛いですね。弟のようだ」

「何を従者風情が……」ぴき、と青筋の立って手を上げるが掴まれる。

「まあまあ、若は昨夜夕飯も夜食も抜かして寝たんですからそう恥ずかしがらずとも」

「減ってねえよ」ふん、とそっぽを向く。

「貴人は食わずとも高楊枝、ですか。誇り高いんだか意固地なのか」

「影郎、行くぞ。折角作ったものが冷める」

「はいはい」

大股に歩いていく背に笑って従者は従いて行つた。

### 三十九・市井

久々に市街を散歩した。

空気は清しいが雪溶けの道はびちゃびちゃと抜かんでいる。靴を履いてくれば良かったかな、と思ったが引きかえすのも面倒で濡れたまま行く。市井のものは藁を結ったものを履いていて自分だけ浮いている気もした。

ふいといつかの呉服屋を思い出した。

「よお」

吃驚と目を丸くした店の者にすかさず「忍びだ」と言い含めると、ははつと萎縮しながらも心得たように普通の風を装いいそいそと茶を用意してきた。

「今日は何をお求めでござんしょう」

「靴はあるか」

「少々お待ちくださいませ」

店の者が奥に行った後、気を抜いて茶を啜りながらなんとはなしに店の様子を見ていた。

来る者は多いが買う者はなくほとんど売って帰って行く。それも二束三文のようで、断られることもある。横を通り過ぎる店の者を捕まえて聞いた。

「商売になるのか」

「商売がったりですよ。近頃の物価の上がりようときたら。西洋にものが流れて国内の流通が滞っているんです。儲けた金は貴族の手元に行くばかり、生活は苦しくなる一方だ。この都はまだそうでもないませんが、不作も相まって農民には飢餓する者もいます」

「ほお……」

呼ばれて、引っこ切り無しに来る客の相手をしに忙しそうに戻っていった。それと入れ替わるように先の店員が靴を持ってくる。なん

だか目がうつろうつろとしようもない顔をしている。

「若旦那様。あるにはありましたが……、いえ、申し訳ありませんがやはりこちらはちよつと……」

「それでいい、間に合わせだ」

手から受け取り、履き替える。

「失礼ですがこちらをお履きになつて外に？」

「ああ」

「あの、やはり見てくれの悪いですからお止めになつた方が」

「なんだ、齒切れの悪い。もう行くぞ」

「毎度有難うございます。お氣をつけて！」との声を後ろに聞いた。

やはりさくさく歩ける。気分がいい。

少し上機嫌に団子屋を見つけて入り、団子を貪っていると世間話が聞こえた。

また米が値上がりしたぞ。

今じゃ白飯食うのは貴族と奴隷、作つたもんが食えずに米を貰うのに奴隷と偽る始末、全く可笑しな世の中だ。

あちらこちらで米屋に一揆の起こっているというが、物騒になつたものだ。

何、この都では関係の無い。天下の霧崎様のお膝元だ。

しかし霧崎様は奴隷を優遇しすぎじゃないのか。喧嘩が起こればひつ捕らえられるのは必ず平民というぞ。

滅多なことを言うな。誰が聞いているとも知れない。

ひそひそと声は小さくなつてそこで聞こえなくなった。

興味深くはあるがなんとも落ち着かない心地がして、錢を置いて店を出た。そういえば雪道の歩き難いのもあつてか人の混みようも無く以前の活気が無い。



さつさと帰ろう。」

足を帰りに進めたその途中、何やらいやいや人だかりのあった。怒鳴る声が聞こえて、人の輪の中に二人男がいて揉めているようだった。

「なんだと、奴隷がいい気になりやがって！」

「奴隷じゃねえや、平民でえ」

「ならその米はなんだ！」

どすんと押されて小男が引っくり返り、白い米が泥水に浮かんた。泥まみれで小男がどもる。

「あ、あ、あんたを訴えますぜ！」

「なに、」

少し引いた男の態度に小男がは立ち上がった。

「役所に言えばすぐに手が回りますぜ。さあ、謝って下せえ」

「くそ……誰が奴隷なんかに、」ぎり、と噛んで睨み付け、小男は息巻く。

「今まで散々こき使いやがって、なのに許してやるって言うてんだ、土下座をしなけりやあんたは今すぐ豚箱行きだ！」

訛りに滑舌も悪く捲くし立てるので聞き取りがたい。

「土下座だと、」

「有り金も置いていきんなせえ。そうしたら無かったことにしてやりますぜ」

ところどころ抜けた並びの悪い歯を見せて笑う。

「もう我慢できるか」

「ばがん、

きゃあああ

小男を殴り飛ばして観衆の悲鳴歓声が上がった。

「やったな！もう許しませんぜ、見てろ」

と膝を立てて背を向けるのをぐい、と掴んだ。

「歩けない体にしてやりや問題ない」

「そりゃいい、手を貸すぜ、」

輪から出てきた者がいた。それを見て次々と傍観者だった者が輪に入ってくる。

「曰ころ鬱憤してたんだ」

「どうせならぼろにした後こいつを橋下に括り付けて役所に見せ付けてやるうぜ」

「そりゃあいい、御貴族様に尻尾を振るしか能の無い犬畜生が」

「ごき、と拳を鳴らしてじりじりと近づくのに垢にまみれたような赤ら顔が青くなっていく。

「や、やめろ。あんたら皆豚箱に放らせませすぜ」

「ふん、二度と口の聞けないようにしやる」

脅すように拳を振り上げる、怯える小男ににやにやと皆嗜虐的な笑みを浮かべている。

「すいやせんでしたあ！」

土下座をしたのは小男だった。

「旦那様、慈悲深い旦那様、どうかこの卑しい身にお情けを」

額を泥水に擦り付けてへつらうが、男達はふん、と嘲け笑って横腹を蹴った。軽々と犬ころのように転がるが、なおもまた額を擦り付けてぶるぶると謝っている。皆大笑いをした。一人の男が困む者達に向かって大声で言う。

「この畜生を皆で一回ずつ蹴って回そうぜ。それで許してやる」

ひい、と小男は頭を抱える。男達が幅を狭めていく。

「おい、もういいだろう」

誰か若い男の声に皆振り向く。日焼けも無いすんなりと涼しい目元の若者がいた。

「なんだてめえは」

「邪魔なんだよ。通りを塞ぐな」

「偉そうに……どこの坊主だ」

若者の革靴を見てふん、と鼻を鳴らす。庶民には手の届かない代物だ。

「若造が高く止まりやがって。てめえら金持ちはそりやすかしてられるだろうな、誰が飢えようと病にかかろうと関係ねえもんなあ」「ちようどいい、こいつにもちよつくら世間勉強してもらおうぜ。せいぜい後で親父さんに泣きつくんだな」

脅すように拳骨を見せるが、しかしその若者は眉一つ動かさず冷めた目をしている。

「生意気な奴だ、本当にやるぞ！」

拳が振り下ろされる。

雑で鈍い。

体を避けようとしたが、ぐいと思い切り背が引つ張られる。  
泥濘ぬかるみに足を取られた。

しまった、背から。

引つ張られつつも体勢を整え、拳を鼻先で避ける。後ろの奴をどうにかと振り向きかけるが、今度は手首を掴んできた。

「早く！」

「？」

目端を流すと女だった。そのまま走る。

「どいてどいて！」

どやどやする野次馬をかき分けて、女はぐいぐい引つ張り行く。

「おい、あの奴隷がいないぞ！ 気の逸れた間に逃げやがった！」

もう面倒だったので女に引つ張られるままに歩を合わせて走った。どうやっていいのか着物のくせに思い切り走るので脚の白いの見える。男はふ、と笑った。

相変わらず女らしくない女だ。

## 四十・告白

女に手を引かれて街の通りを走っていた。  
雪水が跳ねている。

可笑しいな。

しかし頬に刺さる寒風はどこか爽快だった。  
橋のところで漸く止まって女は身を折りぜえぜえと息を切らした。  
息の限界だったらしい。白い吐息が湯気のようにあがり結った髪も  
ところどころほぐれて、頬はりんごのように赤くなっている。その  
様子が可笑しくてくっくと笑った。

「何よ、笑うことないじゃない」

耳まで真赤になりつつ急いで髪を整える。肌当たる冷気がどう  
いうことか温かく感じられた。

「ありがとう、雪」

「べ……別に、」

下を向いても、「と、言う。「あ」と言ったのは、鼻緒が切れてい  
たようだった。

「これを履け」

風呂敷に入っていた草履をやった。靴では先のような事のありま  
ずいだろう。

「……いいの？」

「おぶれと言われるよりましだ」

「そんなこと言わないわよ！」

膨れた顔にまた腹から温かい笑いがこみ上げてきた。

こんなに可愛い奴だったのだろうか。

会わない間に何か様子が違くなった。肌の白かったのはより白く、

唇の赤かったのはもつと赤い。目元の黒子がちゃんと付いている。何も変わっていないのに変わっている。

「お前、何か変わったか」

「天も、なんか」

「なんか、なんだ」

「なんでもない」

「変なところは変わらないな」

「元から変じゃありません」

ぷいと向くのは相変わらずで、くつくと笑う。見ていると本当に可笑的い。しかし。

男は瞼をゆっくり閉じてから開けてもう一度女を見、微笑した口元は少し寂しい。くると踵を返す。

「じゃあな」

「あ…」と女は背を見る。

行ってしまう。

「天！」

男は片顔だけ振り向いた。

さらりとした黒髪、涼しげな瞳、整った口元、細身のすらりとした背……前よりもずっと凛々しくなった。

「ありがとう！ ずっと大事にする、この草履」

女は顔いっぱい笑顔を作って手を振った。

「許婚さんとお幸せに！」

一気に目頭が熱くなって、いけないと思って橋に駆けた。

早く渡ってしまおう、この橋を。向こう側まで。早く川を越えてしまおう。

橋の真ん中で足が止まってしまったのは、ぐと手首が掴まれていた。

「……離して」

「勝手な勘違いをして行くな。許婚はいない」

「え、」

振り返り、すぐ近くで目が真っ直ぐぶつかってしまって触れられている手首が熱い。

「だって……今、会ったのにすぐ行って……許婚さんがいるから、」

「お前は俺など嫌いなんだろう」

「馬鹿……」

ぼろぼろと涙が零れた。

「何も分かってない」

「お前が言った」

「離してよ」

「俺が勘違いしているなら言え」

「してる」

「それじゃよく分かんねえ」

「……すき」

「聞こえねえ」

「天が好き！大好き……！」

橋の真ん中、大声で叫ぶ。男はぼろぼろ泣く自分を黙って見ている。

「離して」

「嫌だ」

「天は嫌いなんですよ、泣く女は」

「嫌いだ」

女は掴まれた腕を振る。鼻水まで出てくる。もうぐしゃぐしゃだ。もう嫌だ。皆見ている。何で自分だけこんな恥ずかしい目に合っ

いるのか。

「だが差し引いてもお前は好きだ」

男が女を抱きしめた。

女は吃驚して涙が止まる。噓。男の胸しか見えない。ああ厭だ、自分の涙が男の衣に染みを作っている。

「小雪、俺の許婚になれ」

涙がぼろぼろ出た。しゃくり上げて、男の胸で泣いた。

「小雪……」

「天……」

真っ直ぐの男の瞳に、目を閉じた。

何かごそ、と音がして 唇に、当たる。甘い匂い

思わず瞳を開けると、男が自分の口に洋菓子差し込んでいた。

「雪、クッキーを食うか」

「なに、それ……」

気が抜けて笑ってしまった。

そういうところはあんまり変わってない。



## 四十一・春思

「抱きてえ」

ぼんやりと男が呟き、松の雪がどき、と落ちる。

「何をおもむろに……よく街に出るようになったと思ったたらまた遊郭通いを始めたんですか」

瞳をどこか遠くにやっではあ、と吐息を着く。

「おや」

従者は悩ましげな若者を眺める。少し上を向いたその顔は、唇の裏に隠れた黒子が見える。

「色っぽくなりましたね、若」

「阿呆」

「ほらほら、全然進んでないじゃないですか」

「お前、大事な女がいると言ったな」

「全く……」

「抱いたか」

「やだやだ、前は何故皆そう好色なんだとか自分だけ綺麗なつもりでいたくせに好いた女の出来た途端これだから。そういう男に男に限って発情すると止まらない」

「好きな女は抱きたいものだな」

「そういうことです」

「梅花の色が似合うだろう……」そう呟いたかと思うと立つ。

「ちょっと、どこに行くんですか」

いつもの無視をしているのか本当に聞こえてないのか黙ってさっさと出て行く。

「あーあ。春ですねえ」

苦笑いをして腕を組み、窓外を見る。

「梅ですか……」

松の木の傍にはまだ蕾の固い梅の木があった。

「雪、」

男は女に手鏡を渡す。黒の漆に金箔の散っていて絵を造つてある。繊細な造りは職人の手によるものだろう。

「ありがとう」

女は微笑んで受け取るが、どこか少しぎこちなく陰る。

「でも、天……」

「気に入らないか」

「そんなことない。とっても素敵」

「そうか」女の笑顔を見て微笑み肩を寄せた。

来る度に男からものを受け取る。家具など大きなものではなく手に持つてくる小物が多いが、趣味のよくいずれも見たことがないような美しさで一つ一つとても高価なものなんだろうと思う。無意識に中々使うのには慎重になつてしまふ。ひよつとしたらそのへんの調度品や着物よりも値の張るんじゃないだろうか。

「雪、次は何が欲しい」

結び上げてある頭をそつと撫でて微笑む。これも男から贈られた髪飾りの貝が灯りを受けて七色に輝いていた。

「　　なんか、天じゃないみたいだね」

「そうか？」

「前はもつとがさつだった」

「そうか」

仏頂面をするかと思つたらくす、と笑つた。店の看板芸妓も嫉妬するほど艶やかだ。以前と同じ顔の筈なのに、なんだろうこの花を磨り潰したような噎せ返るほどの色気は。こんな近くでこんな風に微笑されて、百戦錬磨の芸妓だつてきつと惚れてしまふだろう。

「大人になつたみたい」

頬に熱を感じながらも、声が出たより寂し気な響きになってしまったのに自分で驚く。

「そうか」

「もう、そればかり」

「お前が可愛くて他を考えられねえ」

「嘘、」

「本当だ……」

男は女をもつと胸に抱き寄せて、すると白い頂うなじが見える。女の前に腕を回して後ろから抱く形になった。

耳の形が可愛い。鼻の形もいい。睫が長い。花より美しいのは女だ。摘み取って愛でたいものだ。

「雪……もういいか」

ぴくりと耳が動く。

「ま、まだ……」

「そうか……」残念そうだが苛付きは無く、代わりに柔らかく腕に収める。

「そうだ、天　膝枕はいいの？」

氣をとりなすように言つとそつと手が重ねられる。

「うん？　いや、いい。こうしている方がお前に触れていられる」

「前はそればかりだったのね」

「子供がきだったな」男はふ、と笑う。

「お前の魅力にも氣が付かなかった」

「そつでしょ。やつと気づいたんだから」

「ああ」

「　　変なの」

男はぎゅ、と女を抱きしめると、唇を奪った。

「ん……」

ぼてんとした唇を割り入って、長く、濃く、貪るように。欲する氣持をそこに注ぎ込むように。

愛しいなどというよりも情欲のそれだった。

息の苦しくなる頃に唇がゆっくりと離れた。

この口付けの後、決まって言うのは。

「また来る」

そう言って腕の解かれて立ち上がった。

「まだ時間あるよ……？」

「お前がゆっくりすればいい」

男は笑って、少しの乱れも残さず衣服をただす。そうして何の後腐れもなく行ってしまった。

分かっている。

「抱きたくて、時間を取ったんだよね……」  
女は一人やる瀬なく笑った。

## 四十二・欲心

「お前は嘔吐きだな」

「まあ、それなりに」

「二三度と言わねえ。だが何度逢いに行っても頷いてはくれねえ……」

「え、嘘。まだ抱いたことのないんですか、遊女を？あれほど通つておいて？」

男は余程驚いたのか素つ頓狂な声を出す、若干汚券を傷つける台詞はわざとか否か、それから勝手に得心したように頷く。

「流石若、狙っていたのは太夫ですか」

「どうなんだ？いやだがあの可愛さならそうかもな」

「可愛い、ね。太夫なら一応の年はあると思いますが」

「いや、小娘だ。しかしどうだろう、女というのは年の分からない生き物だからな」

「奥様とかね。美しさが氷中に閉じ込められているようだ」

「お前、俺の母を変な目で見てるんじゃないやねえだろうな」

「若よりはましです」

「どういう意味だ」

「変だと思っているでしょう」

「確かに思っているな。身の回りの女に限ってどこか普通の女と違うようだ」

「皆違うんですけどね。良く見ているから他と違って見えるんです」

「ほお。相変わらず知った口を聞くな。影郎風情が」

「それも段々に口癖と思えば愛嬌のありますね」

「本当、お前は憎たらしいなあ。雪と違って」

「若に愛でられる筋合いはありません」

「昼の喧嘩でもするか」

「食後の運動みたいになってきましたね」

ぼきぼきと拳を鳴らして薄っすら不敵に主従は笑う。

「女って、好いていても男に抱かれるのは嫌なのか」  
「え」

半分開いて唇から紅茶がしたたと流れ落ちる。「あ」と焦ったのを合いの手のようにぼんぼんと白布で拭われていた。

「ごめんなさい。有難うございます、旦那様」

「天が悪い」ふう、と相変わらず嫌そうな目を自分に向ける。「八つの茶中に品のねえな」

「るりは旦那様がとても好きなので抱いていただくのはとても嬉しいことです」

恥ずかしげもなくごく生真面目な顔で答えたのを男は笑って見る。「どうだろうな、お前は抱かれることそのものが好きなんじゃねえか」

「そんなことはありません。るりははしたくないです」

「良く言うぜ。暫く抱いてやらないと寂しがって欲しがくるくせに」

「そ。旦那様、そんなことはないです！ 天が勘違いをしてしまいます」

「はいはい」必死に言つのを男は笑っている。

「欲しがって……」

「生娘は割合難いぞ」にやりと笑って言う。

「雪は生娘か」

「な、」女は言葉の詰まる。

「どう思うの？」

「生娘なんだろう」

「……天は？」

「お前が初めてだ」

「まだ抱いてないのに」ぷ、と笑う。「やっぱり天、初めてなんだ」

「可笑しいか」

「ううん。前は全然女の子に興味無さそうだったもんね」

「早く抱きたいなあ」

男は女を寄せて言う。

「　　触ってみる？」一寸頬を染めて言う。

「いいのか」

「触るだけ」

そう言つて男の手を胸の上に被せる。

「分かんねえ。お前は重ね着をしすぎだ。雪というくせに寒がりか」

「もう。お洒落でしょ、これは」

「別に俺は胸が無くてでもいいから気にするな」

「失礼ね。決め付けないでよ　じゃあ、仕方ないわね」

そう言つて女は何枚か下の着物に手を入れさせる。

「お、」

男の手が胸の輪郭を確かめるように腕を作る。

「見かけによらずあるな」

「どつという見かけよ」

「しかし思つたより固いものだ」

「だから着物でしょ」

そう言つて今度は肌衣一枚の上に乗せる。

「柔らけえ」

「ほら」

外そうとしたがしかし男の手はそのまま女の胸の質量を確かめるように下から持ち上げる。

「ちょ、ちよつと」

「ある」

「やっぱり嬉しいんだ」女は笑う。

「俺の手に丁度いい」

そう言つて揉み出す。

「あん」女は声を漏らした。「やん、天…」

「面白いな」そう言って止めないどころか余計に緩急をつけて揉む。

「だ、だめ……ん、」

唇に吸い付かれた。

「あ、ふ……ん」

口角を何度と無く変えられてから中に男の舌が入って口内を味わう。乳房は揉まれている。

初めてなんて、信じられない。

男というのは女を相手にすれば本能で扱いを知っているものなのだろうか。

ああもう駄目。もどかしい

唇が離れる。唾液が自分の口を伝っているのが分かって官能的な気分になる。

「天……」潤む瞳で女は男を見上げた。目の合ったのにしかし男は女の肌蹴た胸を正して立ち上がる。

「さて、帰ろうか」

「いいの？」

「こう見えても理性を保つのは大変なんだぜ？　そう長くいられるか」

笑い、いつもあつて飾り物の奥の床を背にして男は行く。

またぼつんと女だけが残った。

「幻滅するよね」ぼつんと呟く。「天は綺麗過ぎる」

「私は遊女なのに」

決まって心に穴の空いた気持ちになる。

「お前はまた豆に貢ぐなあ」

感心しているのか馬鹿にしているのか腕を組んで微笑している。

ち、と舌打つ。女物の着物一揃いを届けさせるのを見られたのだった。

「遊女に惚れたのか」くすくすと笑っている。「難儀だな」何か厭



わしげに目を瞑った。

これか。

影郎が色のあると言っていたのは。確かに憂いのある表情が何か女の心を買いそうだった。

しかし関係ない。さっさと行くに越したことは無かった。

「梅の花咲く春の頃、か」  
ふ、と男は笑う。

### 四十三・遊女

「また今日も？」

影郎は身なりを整えている若旦那に茶化した口調で声をかける。

「早く会いたい。夜を待てない」

「若は本当見事に引つかかっていますね」

「何に」

「遊女に」

「遊女じゃねえ。雪だ」

「ちよつと入れ込みすぎじゃないですか。遊んでも遊ばれぬのが粹ですよ」

「遊んでる訳じゃねえ」

「若はね」

「雪が遊んでいると言いたいのか」

「雪さんが悪いんじゃない、遊ぶのが遊女の仕事なんです」

「雪は違う」

「でも結局実を見れば若は遊女に金を落としている訳でしょう。裕福なのをいいことに湯水のように親の金を使って、いいように焦らされ足繁く通っている。世間じゃそれをいい鴨というんです」「雪を愚弄するな」

「愚弄じゃない、いや小娘と言いますが遊女としては大したことです。若は純粹で騙されたと思うかもしれませんが、遊郭というのは男女ともそういう遊びを承知の上の付き合いなんですからどうか責めないでやってください」

「違う」

男は背を向ける。

「約束はしたんですか？売れっ子ならいきなりいつでも駄目ですよ」「雪は俺だけだ」

やれやれ、と少し哀れんだ目で背を見送った。

まあ、女を知るのも大事な勉強でしょう。

「もう三度も通わせて置いて、酷いじゃないか。今日はてつきり床に入れてくれると思って来たものを。」

生き地獄に落とす気なら初めから袖を振ってくれた方がましだった」  
「だって、どれほど私を好いてくれているのか確かめてからじゃないかや嫌なんだもの」

詰る男に、女は恥じらう娘の瞳で見上げる。

「よく言う。お前は父子程年が離れた金持ちばかりを客に持つと聞くぞ。若い男はすぐに破綻してしまうと知っているんだろう。娘と一つのに末恐ろしいな。お前はきつと都一の遊女になるぞ」

笑う男に娘は少し拗ねたように頬を膨らます。

「でも私が袖振らないのは本当に少しなのよ」

「どうだか」

「ねえ、じゃあ特別に次は……」

女の背伸びに合わせて男は少し膝を折る。肩に手を置いて、ひそ、と女は囁くように何か耳打ちした。男は思わず口元を綻ばせる。

「本当か」

「その代わり、鞍替えなんかしたら遊郭に登楼<sup>あが</sup>れなくしちゃうから」

「怖い怖い」

「私を好きなら問題ないでしょ？」

女の顔は無邪気で悪戯気だった。男は水ぼったい果実のような唇を見つめる。

「ああ、待ちきれない。今夜は駄目か」

「夜は駄目」

「なんだ、やはり他に男がいるのか。俺よりもいいのか」

「夜はいつも空けているの」

女は答えにならない答えを返して袖を口元にふふふと微笑する。

それは途端に艶やかな女の顔つきになり、男はぞくりと背を粟立たせて女の手首を掴み体を引き寄せる。

「約束、本当だな」

「どうしようかな。強引な人は苦手」

女はやはり蟲惑的に笑いながら、抱かれた体を抵抗はしない。

「分かった、分かった、今のはなしだ。ただ俺はそれだけお前を好いているということだ」

そう言うとき男は突然に女の水ぼった唇に吸い付いた。

「ん……！」

女は弾みで身を擦じったが、がっちりとは肩は押さえられており、巧みに蠢く男の舌に次第に忤えていく。

……

「はあっ、は、あ……」

随分長く貪られて、唇を離されると同時に女は乱れた息を吐く。

雪のように白い頬は淡い梅の花の色に染まっていた。

男はそれを見て上機嫌に笑う。所詮は遊女。幾らお高く止まろうと、高い金を払わせているのだからこれ位のことには忤えられなければ買われる価値は無い。

小娘の身でそれを分かっているのが可愛いところだ。

「ではな、小雪」

楽しみにしているぞ。

お返しとばかりに女の耳に囁いて、男は漸く女を離し去って行く。

人気の小娘と言うからその手腕を拝見するかと遊んでいたが、やはり主導権はこちらが握らなければいつまで立っても上手く躲されるだけだ。

男の口元は心なしあがる。

今までの分、次で元を取らせて貰おうか。

ほくそ笑んで木を回ったところで、どん、と人と肩がぶつかった。

「おっと、すまない」

「……………」

答える代りに若い男は睨み付けてくる。その殺気立った眼に、男は合点してにやりと笑った。

あの女を買えずに袖を振られたんだな。無理もない。若造如きが、此所に登楼するだけでも大したぼんぼんだ。

「いいものが見れて良かったな、坊主。覗き見代はただだ」

から、と笑って背にした。



## 四十四・失恋

座敷、男と遊女が居た。

対面しているが不自然な沈黙だった。いつもは待ちきれないとかりに合わせに手を入れたがるのに、何か男の様子がおかしい。最近は見なくなっていた仏頂面だが、それも前に増している。

「天……？ どうしたの、黙っちゃって」

耐えかねて、とうとう女が口を開いた。

「……何でもねえ」

それは妙に心をざわつかせた。線香花火のぼてりと膨らんだ緊張のような。

「なんなの？」

この、なにか叱られる子供のような対面は。

この場に似つかわない張り詰めた空気について苛立った口調になってしまった。

「分かんねえ。 帰る」

沈黙の次にやっと口を開いたと思ったら男はもう立ち上がった。

「ちよっと、待ってよ。それじゃ分からない」

「お前の方が分からねえ」

袖を引っ張って振り向いた男の顔にはつとした。初めて見る。

「天……？」

「俺だけじゃなかったのか、雪」

その余りに物苦しい表情に言葉が出なかった。

「その唇……幾人の男に好きだと仄めかした？ 幾度男に口を吸わせた？」

「何……何で急にそんなこと」

「俺と睦みあう前に、その潤した瞳をどんな男に向けなんという名

を呼んでいた？」

「天、」

「どれだけの男に肌を晒し枕を共にした？」

「天！」

「なんだ……」

暗い目の男に気圧されて何も言えず、ぐ、と黙る。

「私……遊女なの」

ただ泣きたい気持ちでそれしか言えなかった。願えるならばその胸を貸して欲しい。

「そうだな……」

しかし男はどこか諦めた微笑で答える。

「天は此処をどこだと思っっているの？ 私は親の顔も虚ろな小さな頃にここに売られてきたの。生きる場所なんて此処しか知らない。ここで育ってここで水揚げされて、遊女として籠に入っているの。金で男に身を売っているの！ 天はその客の一人に過ぎないの！」

爆ぜた気持ちが止まらない女の声は震える。

「天は……天は綺麗だから分らないよね。こうして生きるしか知らない。こうして待つことしかできない。

男を受け入れることでしか生きていけない……！それ以外の生き方なんか知らない……！前は天といると普通の町娘になったような気分になった。他愛もないお喋りで、憎まれ口を叩いたり、天は来る癖に全然体には興味の無くて、私を遊女として扱わなかった。

だけでももう今の天は私の体を求めるばかり……高価な贈り物をすれば心も買えると思っている。他の男ひとと一緒に。でも私は遊女なんだから当然よね」

「そうか、」

「興冷め？」無表情の男に女は笑う。

「ああ」男は立った。「帰る」



「そう」

涙を拭いて、女も立ち上がる。

いつも涼し気で余裕気だった男は、今は目の光りも暗く、無気力で投げやりな倦怠した空気を漂わせていた。

「なあ雪、あの時俺を好きだと言ったのは本当だったのか」

「本当、だったよ」

「そうか」力ないまま微笑する。

「俺も本当だった」

籠を出て行く男の背に向かって叫ぶように女は言う。

「裏切られたと思うっているんでしょ。だけど遊女なんかと本気で恋をしたと思った自分の馬鹿さも笑って何も責められないんでしょ」

何も返さなかった男の姿が消え、女の頬をはらはらと涙が落ちる。

「だって好きな人の前では娘でいたかった」

\*

「振られたか」

くす、と笑われた。

「振られずらしていねえ」

「許婚を連れてくるという日取りは取り消していいんだな？」  
無言で通り過ぎた。

さらさらと筆の流れる。沈黙に耐え切れずに口を開く。

「若…？」

「なんだ」

そう言っではらりと頁を捲る。文字を追って視線は上げない。

「随分勉強熱心ですね……？」

「ああ、大分遅れてしまったからな」

男は薄く笑う。

「遊びすぎた」

「　　そう気を落とさずに。ほら、次は貴族の女にすればいいじゃないですか」

「もういい」

さらさらと。一層、けれど今までと何か隔絶した大人びた表情をしていた。

「徒馬鹿<sup>ただ</sup>だった」

「千次様、千次様、天のお嫁さんはいつに来ますか。るりはお菓子

をたくさん用意したいのですけれど」

「聞いてやるな」

「え」

「初恋は男の愚かで実らぬものだ」

「旦那様……？」

「俺は別だけどな」

微笑んで、男は不安気な女の頭を撫でた。

## 四十五・縁側の子守唄（前書き）

章末閑話。

#### 四十五・縁側の子守唄

ねんねこせ　ねんねこせ　ねんねこやまの赤犬こ  
いっぴき吠えればみな吠える　ねんねこせ　ねんねこせ

ばん、と白い布が翻る。

一列に洗濯物のかかったを物干しを見上げ、嬉しそうに微笑んだ。

「……何の歌」

振り返ると、縁側に座った小さな息子がいた。

「子守唄ですよ、天。お母さんはたくさん歌えます。たくさん覚え  
たのです」

笑顔を余計に綻ばせて、空になった籠を持ってその傍に座った。  
それから、ん、と膝に抱き上げて、腕の中に抱える。一緒に青い空  
を眺めた。

「父さんで、どんな人」

「とてもお優しくとてもご立派な方です」

「次、帰ってきたらさ……」

「はい、天」

「やっぱり、いいや」

「天、何でもお母さんに言ってください」

「習字……母さんから」

「はい、天の御文字をお父様にお見せするのですね。とても感心な

さると思います。天はとても上手なので」

「そういう訳じゃねえけど。　母さんは見なくても褒めてばかりいるから、本当が分からねえし、」

「天は本当にとても上手いのですよ。きつと天は旦那様のように立派な方になります。お母さんは毎日とても嬉しいです」

「ふーん……母さんは、寂しくないのか？　俺と二人で」

「旦那様も一緒にいます。旦那様と天とお母さんと、ここは三人のお家なのです」

「三人、」くす、と笑う。

「三人です」ふふ、と笑う。

本当に、嘘みたいに幸せそうに笑う。

俺で寂しさが紛れると言っのなら。　そうして笑っていてくれるなら、俺は。

「　父さんのように、なるよ」

母親と青い空を眺めた。

子守唄が聞こえる。

ねんねいせ、ねんねいせ……

## 四十六・添寝

「天様 相済みません、小雪は今夜は別の、」

「誰でもいい」

男は構わずくぐる。

「小雪以外の女なら」

\*

蛙のようだ。

ひっくり返る女を見て、思った。其れは卑猥な水音と耳障りな嬌声を上げる。

涎。汗。粘液。痙攣。

ああ、浅ましい、浅ましい。

快樂とはこんなものか。

夢にまで見た甘美な世界は。

朧月夜、行く長い廊下に白く浮かび上がっている姿がある。

「天、」

微笑んだ。華奢な体で包むように腕を背に回してくる。

「天はとても辛いのですね。お母さんには分かります」

小さな体のくせにぽんぽんと、あやすように背を叩く。

「甘えていいですよ、天」

冷え切った体だった。こんなに夜更けになるまで、一体いつからあの廊下に立っていたのだろう。

「母さん……」

「お母さんが慰めてあげますよー」

微笑む声でそう言った。胸の中のもの温かった。

ねんねんころりよー。おころりよー。

月が格子に落ちる布団で、母親が添い寝をして歌っている。

「母さん……」

白い着物の体をぎゅ、と抱いた。抱きついた。

「何ですか、天？」

「俺 この家を出てもいいか」

銀色の頭を今更不思議に思いながら見つめ降ろす。かぐや姫だとか影郎が言っていたが、丸く銀の光りを反射して月の様だ。

「俺は当主の器じゃねえ」

目奥が熱くなるのをぎゅ、と抱いて耐える。

「馬鹿で、馬鹿で、本当に浅ましい。塵になりたい」

「天はいい子ですよ。お母さんは知っています」

「悪い、そういうのに疲れた。俺は親父の様にはなれねえよ」

「天は天です。天はどうしたいのですか」

「勤めもせずには有る金を使って、何も考えずただ遊郭で女を抱きた  
い」

「それでは天はこの家にいたいのですね」

「いたくねえよ。だけど出て行く程の理由もねえ。ああ浅ましい。

もう何もかもが厭だ」

「天はとても苦しんでいるのです。 とても好きだったのです」

「違う」

ぐ、と腕に力がこもった。

「色欲だったんだ。だって有り得ねえだろ、遊郭の女に本気で惚れるなんて。遊女に惚れるなんて間抜けで好色な男だけだ。ただの客

なのに自惚れて本当に阿呆だ。貢ぐたびに阿呆だとほくそ笑んでいたに違いない」

「そんなことはありません」

「母さんに何が分かるんだよ」

「お父様もとても苦しみました。苦しいと人にも自分にも辛く当たってしまうのです」

「親父が？親父になにか酷いことをされたのか」

「それは仕方の無いことだったのです。旦那様はそれで今でも御自分をお責めになります。旦那様は悪くないのでりもそれで辛くなってしまうて、けれどるりが辛いと旦那様も余計辛くなって、二人で酷く哀しくなってしまうのです。けれど二人で哀しめば不思議でその分深く繋がるのです。だからとても幸せになるのです」

「……よく分かんねえ」

「天、お母さんもとて怖かったです。全部うまくはいかないかもしれません。とても哀しいことの大きくなるかもしれません。けれどお父さんは諦めなかったのです」

「結局、母さんは親父が一番に好きだったことだろ」

「はあ、と溜息笑いをして閉じ込めていた腕を離れた。」

「これも、親父のだ。俺には結局何も無い。」



## 四十七・池底

月夜に水を遣る男がいる。

花の根元、夜の土に水を遣り池には朧月と男とが照らし出されていた。

廊下に行く息子の姿に気が付いて、ふ、とその口元を穏やかに緩める。

「天、こっちに来い」

「……」

無愛想に、行く。

詰るなら詰り嘲るなら嘲ればいい。

「憐れな男だ」

仏頂面のまま庭に降りてきた自分を見てくすくすと笑った。

「どこが俺似だ。しかしこれで汚名も晴れるだろう」

上機嫌に笑うのははそういう理由か。

「俺が慰めてやろうか、天？」

冷たく長い指が顎に触れてくいと上げられた。防ぐ間もなく蛇の前に喉元をさらしていた。見下ろす切れ長の黒く冷たい眼。口元の微笑は人の首の刎ねられる時さえ変わらないだろう。

「可愛い息子だ」

くすりと笑んで 頭にぽんと手が乗った。

有り得ない。何で…今まで一度も

「な ……」

ばき

月があつた。朧月。視界は夜の空のみ。冷たい池水にぶかぶか浮いている。氷と蓮も浮いている。

くつくと笑う声が聞こえる。遂にあっはっはっはと聞いたことのない程愉快そうに笑いだす。ばしゃんと盛大な音を立てた波も揺らいでぶかぶか仰向けに浮いてる。

どうやら殴り飛ばされたらしい。よろけて落ちたのではなく、立っていた場所からこの池の真ん中まで一瞬で。本当、有り得ねえ。

「ざまあねえな、天」

一しきり笑うのに満足すると、そう一言残して遠ざかって行き、最後には物音が消えた。

油断した。

投げるとき、力の抜けた人間は呆気ない程軽く飛ぶが、ああ、そういうことだ。それにしても親父に手を乗せられただけで動揺したというのが涙が出るほど悔しい。頬がつうんと熱い。体が冷たい。水をすった衣服が重たい。

肺から息を吐き出した。それとともにぶくんぶくと体が沈んでいく。

冷たく冷たく、頬だけ熱い。いや、本当は体も熱いのか冷たいのかもう分らない。

本当、ざまあねえ。

このまま水を飲めば死ぬだろう。生きようとしなければ死ぬだろう。死んだところで親父は絶対に何の咎も抱かない。

生死いきしにを選ぶのは、俺の意思だから。

+

「旦那様、天はどうでしたか」

「ああ、慰めてきてやったぜ」

「有難うございます。天はとても喜んだと思います」

「そうか？」

「天は本当は旦那様に習いたかったのです。小さな頃はお父さんがどんな人がたくさん聞きました。お父さんのようになると言いました」

「お前は罪な女だな、瑠璃」

「え」

「男はな、母親の求める男になりたいと想っちゃうんだ。だからあいつがなりたいたいののは、俺じゃなくてお前が見ている俺だろう。しかしそんな人間はいねえから絶対に叶わねえ。憐れな奴だ」

「なにか……るりの所為なのですか」

「ああ、そうだ」

妖艶な微笑。

「美しさは罪だ」

女の白い手を取って胸に引き寄せた。

「さあ、暖め合おう。外は寒かったな」

## 四十八・菩薩

女は乱れてただの獣になる。

心内で浅ましさを嘲笑<sup>わら</sup>う。笑う度にささくれた氷柱が五臓六腑を突き刺していく。

このような手酷い扱いを受けても女は嫌と言わない。言えないのか。

あいつも。

他の男から同様のことをされて、それでお前は何も言わず男にされるままなのだろう。あの時もあの時も、初々しい娘の振りをして俺が帰れば他の男の情婦となっていたのか。俺がお前のはにかんだ笑顔を懸想をしている間、お前は他の男の前で涎を垂らしていたのか。

燻る怒りは収まらず、爆ぜる。爆ぜ口を求める。ただぶつけるだけ。

汚れている。

こんな汚れた行為で人ができるというのか。

どこにいる人間も、貴族も坊主も賤民も、等しく汚れた肉の塊だ。この自分の身でさえも。

ああ、浅ましい。

その媚態も嬌声も、嘘。乱れた様も、嘘。

獣となっているのは男だけ。嘲笑っているの女の側。

+

「天が元気になりません…」

「元気じゃねえか。三日も空けず遊郭通い、いや不健康と言えば不健康だな。俺も夜街に出はしたが淫事に耽つていた訳じゃねえ。夜の活気が好きだった。ここは割と重要だからな？」

女は聞いているのか顔は曇ったままだった。

「天の夜遊びを止めさせてえのか？」

「そうではないのですけれど」

「もう添い寝に行くのは辞める」

「え」

「お前が慰めるから甘えるんだ」

「けれどるりはお母さんなので…放つて置けません」

「俺は近頃放られてるな。俺の妻じゃねえのか」

「ごめんなさい」しゅんという。

「夜のお勤めは？」

「今夜、」

生真面目に言う女に冗談だ、と男は笑った。

「近頃はお前を腕に包んで眠るだけで満たされる。お前はどうか？」

「るりも、旦那様の腕の中で眠るのがとても幸せです」

くすと笑う。

「俺の抱き枕を返して貰おうか」

来なくなった。

いよいよあの母親にすら見放されたか。影郎もいるのかいないのか姿を見せない。一人ベットにごろんと仰向ける。

抱き心地が良かった。ふんわり良い匂いにしてすっぽりと腕に収まって柔らかく、肌は滑らかで髪は月色ですらすらとして、そして

温かった。ずっと抱いていたかった。浅ましい気持ちは沈んで、ただ腕に抱いて心が安らいだ。夜に地獄六道を彷徨うこともなく眠れることができた。まるで菩薩を抱いているようだった。

あれが欲しい。

さらさらと、墨の匂いは心を落ち着かせる。このまま何も無かったように忘れていけそうだった。しかし発作の如くに胸は掻き毟られる。遊郭を踏んでまた心は般若となる。二度と見たくない。いや一目だけ。

この無意味な繰り返し。無意味な行為。なのに何故来てしまう。何故自らを墮としめる。

雪……

障子越しの雪明り、畳に一枚布団、男と女

違う女を腕に抱いて、胸の内で呟いた。ああ、苦しい。一体何をやっている。あの女は遊女。遊女に過ぎない。夫婦になるなど懸想してなんと幼く世間知らずで馬鹿だったんだろう。ただ情欲と混ぜこぜにしてそれを恋心と勘違いして。忠告を受けていたのに違うなどと言いつつたあげくがこの様だ。

寒くてこの布団から出られない。温かくてこの布団から出られない。

また今日も、女を抱いて眠りに着く。

## 四十九・早川

「若、」

家来が立っていた。

「久しく顔を見せなかったな」

「前の話、つけて来ましたよ」

「なんだ、前の話？」

「話を聞くて話です。まあ付いてくればいいですよ」

物知り顔で言う男に、まあどうでもいい、気晴らしにかと思い頷いた。

+

「いやあ、これがあいつの息子か！ そっくりだ、そっくりじゃないか」

しきりに歓声の声を上げるのは。

「おつとすまない、早川光次郎 君の親父さんの友人だ」

唯一無二の、と言って片目を瞑ってみせる。早川家は由緒ある上流貴族に名を連ねているが、経済力の淘汰にさらされて前代が故人となった際に没落の危機にさらされた貴族だ。親父の友人というのは本当か。早川は規範から敢えて外れるような奔放な家風があるが、それにしてもこの目の前の男はなんというか、軽薄すぎる。

「おい、それは疑いの目だな？ 俺みたいなのがあの貴公子と付き合いを持つ筈がないと？」

あの親父をびくともしない巨大な壁石だとすれば、この男は石ころのようにころころ転がっていけそうで、その姿の全てが隠れず見えるようだ。

「いえ、父の御友人にお目にかかれ、恐縮をしてしまいました」

「いや、いい、いい。そう固くなるな。一昔前のあいつのようで気味が悪い」

「親父の……若い頃？」つい呟く。

「そうだ、懐かしいな……よく二人で外に繰り出しては博打をしたものだ」

成程悪友というやつか。もしかしたらあの外面はいい筈の父親を夜遊びにひきずりこんだのはこいつか。

「それが女ができた途端にぱたりと止んで付き合いが悪くなったと思つたら、今じゃ完全にもう、忘れてるんじゃないかという程顔を見せない。この共に戦線に挑んだ盟友を！」

「父上は、遊郭には行きましたか」

「勿論。一時期は酷かったな。婚約者がいる分際で芸妓どころか貴族の女にまで片端から手を……」

おっと、とそこで止まる。

「知っています。父上は勝手で放蕩者です」

「そうかそうか、いやそうか。きつとあいつは息子に嫌われるだろうと思つていたがやはりそうか。世界で一番持ちたくない親父だよな」

唯一無二と言つておいて散々ない様で納得してから話す。

「まあそれでな、異常に女に持て囃されたところを来るもの拒まずという按配で節操が無かった訳だ。最低だろ？男として」

ふん、と何か恨みが込もっているようだった。

「婚約者つて……母さんの前に、決まった人がいたんですか」

「ああ、いた。全く、申し分のない許婚がいながらないがしろにして遊び呆けて　しかし遂にあいつの心を射止めたのが君の今の母さん、瑠璃ちゃんと言う訳だ。あいつの傍仕えだったんだが、本当に愛らしかったな。手の二つや三つ出したくなつて当然だが、それにしてもあいつの惚れ込みようには驚いたものだ」

しみじみと男は自分で頷いた。

「いい女は男を変えると言うが。あくまで掟には沿つて貴族・霧崎・



跡継ぎ、家家と言っていたのが一介の傍仕えを妻にしたんだからな。全く普通じゃない。貴族たる特権の奴隷制を崩壊させたのが貴族一の貴族で、理由は偏に奴隷の女を妻にしたいから、だ。これによりあいつの華々しき傲岸不遜も粹を極めたとも言えるだろう」

「奴隷……！？」

「え、ああ……なんだ、まさか知らなかったのか」

男はしまった、という顔をしたが、ままよと思ったようだ。

「奴隷だったよ、瑠璃ちゃんは。それも『扇子』っていう特殊な奴隷でな、あいつの小間使いだったんだ。そう、あいつの所有物だった。あいつはそれに嫌気が差して制度をぶち壊したんだ」

窓の外の空をぼんやりと見遣る。

「大勢の人が死んだ　瑠璃ちゃんがどう思ったのか知らない。ただあいつは一層厭世的になった」

『とても怖いこと』

『二人で哀しくなる』

月の下儚げだったのを思いだす。親父はそんな素振りは一切ないが。

「……」

「衝撃が大きかったか？母親が元奴隷で」

「別に……俺は、」そう口で答えても白々しく、頭は整理のつかない混乱に陥っていた。

それから混乱に陥りながらも混乱に陥っている自分に嫌悪を覚えてきた。

母だ。それで身分がどうだろうと何の関係がある？

「当然だ」男は微妙な表情で言った。「あの家では平民だって『卑しいもの』だから尚更だ」

「いや実際あいつが変なんだよ。俺もさあ、いたんだ、奴隷の子が」

何故だか自嘲のような笑みを浮かべる。

「好きだとかそういうのは分からない。どっという気持ちで見ていた

のか。奴隷じゃなくなつて、どう接したらいいか分からなくなつち  
まった。やはり奴隷として見ていたんだなあ、と思つた。可愛いと  
思つていたんだが、あいつのように堂堂と妻にするなんてことはで  
きなかった。どんな荒波から守れる自信はない。そこまで愛して  
いるのかというと分らない。……なんて深くも考えない内に、あ  
の娘は俺に見切りをつけて出て行つちまった。止める理由もない。  
あの子は逞しいから、どこでも生きていけるだろう」

男は束の間瞳を閉じてから、濃茶色の目を薄く開いて微笑む。

「俺は結局、普通の嫁を貰つて普通に楽しく生きたかつたんだ」  
しかしどこか寂しそうな微笑み方だつた。

## 五十・身分

母さんが、奴隷……

信じられない。花のようなあの人が。貴族の娘にはないような滑稽なところがあるがそれは愛らしさとも呼べる。とにかくも信じられない。

しかし信じられないとはどういう意味か。

やはり奴隷を卑しいものとして見ていたのか。いや違う、いや違う。町で見たあの小男　元奴隷だったらしいあの男が卑しかったのだ。それで並べて奴隷に嫌悪を覚えてしまったのだ。それだけではない。弱い者を集団で虐めそれに笑い声を上げる　あの市井のもの達にも嫌悪を感じた。

貴族が尊いなど思っていない。貴族というのは見てくれの白粉の塗り固まり、それに嫌気すらさしていた。しかしそれは忍耐だ。倫理というものを教え込まれそれから外れないようにすることで、見てくれを保っている。思ったことをそのまま行動や口に出すなど、そんなことをすれば表面に醜い亀裂が走る。その亀裂を表に出せばそれを割ってしまおうと輩が出るとも限らない。表に出さずに係を保つというのは忍耐のものでそれは美徳と言ってもいいのではないのか。

いや違う、違う。どちらがどうだという問題ではない。

「天？」

きよとんとしかしどこか心配気な顔でその人が見ていた。  
「むつかしい顔をしています」

母親手製の洋菓子を親子三人で食べるといふ恒例の茶会。父親と  
同席など胃がむかついてきて美味いものも美味くなくなるといふも  
のだったが『同感だが我慢しろ、瑠璃の望みだ』と言われ渋々と席  
を同じくしている。

「何かお悩みですか。お母さんにお話し」

「光次郎に会ったんだってな」恐らくわざと遮って、男がくすりと  
微笑んだ。

「元気だったか」

「まあ。変わった人だった。貴族であるということも忘れてし  
まう」

それを聞いて、やはりそうかとくつくと笑う。割と上機嫌らしい  
時の笑い方を見るに、やはり本当に親しい友人だったのだろう。

『千次に殴られた？』

面白そうに、興味津々という様子で聞き返してきた。

『ほお。あいつも一丁前に親父振りやがって。俺もあいつを殴って  
やったものだ。全く良き友だった。誰も殴ることのできなかった可  
哀相なあいつの為にあいつの捻くれた根性を叩いてやったんだから  
な』

『いや、単に笑いものにする為だった』

『いやいやあいつは無駄なことを一切しない。笑いものにされたな  
ら笑いものにされたことに意味がある筈だ』

『あいつは人を嘲笑うのが趣味なんだ』

『まあ俺もそう勘違いしていた。いや確かに勘違いだとは未だに言  
い切れない』

結局悟す訳でもなくなにか思い出話をしだすような風だったので、  
さっさと暇いひせて貰もらって出てきたのだった。

「御友人様に、」母親もほっこりと笑顔になる。「ちよは元気でしたか」

「ちよ?」

「あれはあの家を出て他所に出て行ったそうだけ」

親父が気を引こうとするように母親のフォークを持つ手を取って自分の口にケーキを入れた。

「当然だ、あんな奴のところに義務もないのに居たいものか」  
くすくす愉快そうに笑う。

「自ら解放に尽力して逃げられるなんて皮肉だな」

母親は浮かない顔をする。本当に相手の心を慮らない奴だ。  
「まあ感謝はしている。俺達の愛の為によく頑張ってくれた」  
そう言って女の手を自分の口元に持ってきて軽く口付けた。

「身分は関係ないか」

ぼつりと言うと、父親はくすくす笑った。

「本当に馬鹿だな、お前は」

依然どういいう意味なのかはつきりとは分からない。

五十一・自慰（前書き）

\*

五十一＊・自慰

「おやすみ、瑠璃」

半身起こして額にちゅ、と口付けると同じ布団の中に身を沈めた。ちよいと袖を引っ張られて、ん？と片目を開く。

「あの、旦那様……今晚も、宜しいですか」

「何が」

「それは、その、なんでもないです。      おやすみなさいませ、旦那様」

「ああ、おやすみ」

しどろおどろして隠れるように布団に潜ったのを可笑しく思いながらまた目を閉じた。

+

隣の小さく膨らんだ布団が時折寝返りを打ってはもぞもぞとしている。

「眠れないか」

「あ、旦那様……起こしてしまいましたか？」

「お前の無防備な寝顔を見ないと眠れねえ」

焦って申し訳なさそうな顔をした女の頬を撫でると、熱が出たようにその頬を染めてもじと足を摺り寄せた。

「白湯を持って来ようか」

「あ、大丈夫です、旦那様」

「遠慮はするな。それとも卵酒か、ああそうだ、お前の好きなあの甘い飲み物……ココアでも作ってやろう」

「違うのです、旦那様。体は温かいです」

半身起き上がった裾を必死になつてはっしと掴んでいる。それから視線を自分の臍に向き、顔を赤くさせた。

「反対に、体の熱くて……」

「お前も盛りだなあ。俺の盛りの過ぎた頃にとは年差があると丁度しねえな」

笑うと、女はきゅと唇を結ぶ。

「盛ってはいません」

「そうか？」

背筋に一本指を這わせるとしかし細い体をぞくぞくと身震わせる。その手で尻を円を描くように撫でると、吐息を漏らして潤んだ声を出した。

「あ……旦那様」

「ほら、盛ってるだろ」

手を離すと物足りなさげな息を漏らしたが、しかしそれから慌てて首を振った。

「るりはそうではありません」

頑な態度に口元は弧を描き、着物の裾を捲り上げる。

「あ、」

露になった白い腿を開帳させると太腿をくっつき合わせようと必死になるが、抵抗は虚しかった。せめて見えないようにと恥ずかしそうに足の間を両手で覆う。

「どうだ、瑠璃。湿っているか」

「るりは湿っていません」

両足首を広げたまま拘束して聞くと、自分の恥部を押さえながら首をぶんぶんと振って答える。銀色の髪が散らばり乱れた。

「そうか？」

女の手をなんとなくかすと、そこに自分の指を宛てた。少し探ってから離すと透明で粘った糸が引く。女は顔を真っ赤にさせて手で口を覆った。男はくすりと笑う。

「あ、あ……」

「湿ってるんじゃないかって濡れてるんだな？ 随分と淫乱だ」

「るりは……いんらんでなくて……」



「気にするな」

ふ、と笑つてもごもご言う女の頭を撫でた。

「お前の体をそうしたのは俺だからな」

「旦那様……ぎゅ、と服にしがみつく。「大好きなのです」

「るりは千次様がとても好きで……だからなのです」

「分かつている」

笑うと女はぽつと頬を染めた。

「お前に新しいことを教えてやろう」

「旦那様のお役に立つことですか」

「お前の役に立つことだ」

「え」

+

胡坐の上に座らせて、その姿が鏡に写るように向いた。抱きかかえた腕の中できょとんとしている愛らしい女の姿が映っている。

「旦那様……？」

ふんわりと抱きしめられて男の頭が自分の首にうずまる。黒髪がくすぐつたい。そつと耳に心地よい低い声が伝く。

「酷く可愛い……俺だけの瑠璃」

「んっ」

唇に吸い付かれた。すぐに離されると息継ぐ前にまた口角を変えて合わせられる。何度も、何度も、焦れっなくなる程に、浅く何度も啄ばまれる。

「ん、ん……ん」

唇の柔らかさを堪能してから離された。上気しだした頬を撫でて男は鏡越しに聞く。

「瑠璃……先ほどは何と言った？もう一度言え」

「千次様が、大好きです」

「この世で一番？」

「一番です…」とろんとして鏡の中の黒い瞳に取り憑かれていた。

「この体と心は誰のものなんだ？」

「千次様のものです…るりの全部は千次様のものです」

「ああ、なんて可愛い…」

男は銀の茂みの奥の股をまさぐると指を挿し入れた。

「あつ…」

くちゅくちゅと男の指が小さくかき混ぜている。

「ここもか」

「あつ、そこも…そこもっ…で、す」

「何があるうと俺以外の男に捧げることはないな？」

「ありません、千次様、だけに…」

「本当だな？もしもお前が他の男に腰を揺るようなことがあったら……」

男の声は酷く低くなり抱いていた片手が女の首に絡みつく。

「殺してください。千次様のお手であるりの首を絞めて止めて下さい」

「瑠璃、瑠璃…ああなんて可愛い」

男は微笑してその手を顎まで持つていき、柔らかい唇を割らせる  
と指で舌を弄んだ。口端から唾液が一筋零れる。それが恥ずかしく  
て口を閉じようとすると、もう片方の手の指も歯と歯の間に入れら  
れて、口を目いっぱい開かせられた。舌を弄り回しながら綺麗に  
並ぶ小粒の歯をなぞったり歯茎を撫でたりして口内を犯していく。

閉じられない口からは唾液が溢れて毀れていった。

「見ろ、瑠璃」

漸く手が外されると、鏡には酷く淫らな女がいた。頬を上気して  
涎を垂らし、開いた脚の奥の銀の茂みはきらきらと雫が垂れ落ちて  
畳にとろりとした水溜りを作っている。

「それほど俺に契り立てているというのなら、自慰を許してやろう」

「じい…」

「そうだ」

男は女の手に手を重ねると、それを女の茂みに潜らせた。

「あ…」ぴくんと女は動く。「るりの指が…」

「お前自身の指でここを弄るんだ」

「あ！」

指に指を乗せて器用に操りそこを弄らせると、女はあ、あ、と喘いだ。「ほら、」と言ってさらにぐいと指を一本中に入れさせると、女は一層切ない鳴き声をあげた。

「はあああ…！」

「どうだ、自分の中は？」くすと笑う。

「あ…なんだか、とても変な気持ちのします…」

「さあ、自分でもう一本中に入れてみる」

「え…入りません、旦那様…それはきついようです」

「俺がお前の指二本より狭いと言う気か？」

「あ…違います、違うのですけれど…るりは壊れませんか」

「まあお前は壊れると淫らになるが、体の方は問題ねえ。入れろ」

「はい、旦那様…」

女は中指を押し込む。第一関節で止まったところを男にゆつくりと押されて根元付近まで呑み込まれていった。

「あ、るりの指がるりの中にあります。とても変です」

「次は動かしてみろ」

「う、それはとても頭の痺れて」

最後まで聞かずに男は手の甲を持って指を抜き差しさせた。水音が鳴る。

「あ、あ、あ…」

「自分で掻き混ぜろ」

「そんな、」

「目を瞑って…俺の指だと思っただ」

男の手が外れて、言われた通りに目を閉じ想像した。

蜜液が

壺から溢れ出ていく。

「そうだ…それは俺の指だ。お前の中でどう動くかは体に染込んで  
いる筈だ」

「あ、あ、あ、あ…！」

先ほどのつたない動きと違い、指は見えない手に操られてでもい  
るように巧みに動く。女の声は高く早くなっている。

「あ、あ、旦那様…そ、そこ…あ、」

鏡に写った女は、瞳を閉じて少し唇を開いて喘ぎ、いつも命じら  
れている程に自分から大きく脚を開いている。そして自分の指で自  
分の茂みの奥を掻き混ぜ弄っている。もう夢中のようだった。

「あ、旦那様…るり、あ、るり…」

男は耳元に囁く。「いいぞ、瑠璃」

耳を通り抜け直接脳を揺さぶるような甘く低い声にぴくんと女は  
背を反らした。

「あ…！」

きゅんと指は締め付けられて、自分の中に指を入れたまま女は体  
を反らせた。ぴくぴく痙攣した後、くたと男の胸に背を預けた。

自分の指が入っているのに気がついて漸く抜く。はあはあとまだ  
少し苦しうに息を吐いて、頬は紅潮していた。

「どうだ？自分の中の感触は」

「とても温かく…ぐちゅぐちゅしてぎゅうぎゅうしていました。指  
が取り込まれてしまうかと思いました」

「そうか」微笑して頭を撫でた。「それでいつも俺を気持ちよくさ  
せているんだぜ」

「本当ですか…るりは気持ち良いですか」

「ああ、お前は最高だ」

微笑んで言うと女はほっこりと笑顔になった。体の芯からじんわ  
りと暖まっていくように、ひどく嬉しそうだった。

「今度は旦那様にお気持ち良くなって頂きたいです」

女は向きを変え、少し自分にのしかかってすぐ下から顔を見上げてきた。尻尾があれば振っているだろう。

微笑したまま手の甲を掴んで口元に持っていく。

「あ、旦那様……」

男の均整の取れた口元に自分の指先が入るのを見る。濡れて生暖かで鋭敏な感覚に、電流が走ったようにぞくりと肌が震え、熱い体液がまた漲っていくのを感じる。ちゅぷんと綺麗になった指が抜かれた。

「可愛い瑠璃」

月を背に影のかかった男の微笑に、見惚れていた。

## 五十二・蝶々

「ご、ごめんなさい、旦那様……」

「駄目だ。全く許せねえな」

男が女の手首を掴み、捻りあげて両の腕を上げさせている。背は壁。

「るり、一人でじいするのが悪いことと分からなくて……」  
心なしぴんくに染まった頬。潤う瞳、濡れた白魚の指先。

「分からない？」

いつもよりも低い声にびくりとする。

「お前は自分を誰のものだと言った？」

「だ、旦那様のものです」

「ここは？」

膝をぐりと押し付けられ、ひ、と言う。布越しに敏感に反応してまた染みをつくった。

「旦那様のものです……」

「ならば何故勝手に弄った？」

「ごめんなさい……けれどるりは、旦那様に習ったことを忘れないようにと思って、」

「俺に許可を取ればよかったんじゃないのか？」

「お手を、煩わせたくなくて」

ぐり。

「は、恥ずかしくて」

「俺のいない間に欲情していたのが？」

「欲情という訳では、あつ」

ぐりぐりと、押し上げられてほとんど男の片膝に乗る。

「お前は淫らな女だ……俺の膝に乗るだけで喘ぐ」

「ふ、う……旦那様……許し……あああ」

つま先立って男の角ばった膝に体重のほとんどが乗り、股の下が熱くじんじんとむずる。

「も、もう……お許しく……っ」

遂に床からつま先が離れ、ひくんと電気が走ってつま先が伸びた。「全く」

ふう、と軽い溜息と共に膝を降ろすと、女は自分の足で立たない。ずるずると、両手を降ろされるままに床に尻をつけた。糸が切れたように脛も半分に綴じ、長い銀の睫は下を向いている。

「参ったな」

襦袢から覗く白い脚に、蟻を誘うような甘い蜜がてらりと垂れるのが見えた。

「お前に仕置きしようとする、俺までが欲情しちまう」

滑る銀の髪を手に絡め掴んで上に引き上げると、頭皮の刺激に女が気を戻す。着物の一番上の紐が解かれて手首を縛った。

「これで悪いことができないだろう」

「はい……」

まだ虚ろに小さく頷いた女の頭を男は導く。

「分かっているな？褒美じゃないぜ」

「はい、御主人様……」

頭に乗った男の手がぴくりと止まり、何も言わずに女の瞳を見た。女も冷水を浴びたようにはっきりとして黒の瞳を見返す。重く震える沈黙だった。

「千次様、」

女は慌てて名前を呼んだが、薄暗い瞳の男は自嘲して口元が歪む。

「……いい。俺がこういうことをするからいけねんだ」

細い紐を解くが、女は解かれた手首を不安げにくつつけたままにしている。

「俺の所為だ」

男は女を離れた。

「るりが悪いのです！」

女は立ち上がり、扉に向かう男に向かって泣き出しそんな顔で訴える。

「もう勝手にじいをしません」

「いい……それも本来夫が定めるようなことじゃねえ」

「るりが悪いのです……待って……待ってください、旦那様。るりにお仕置きを、」

「お前は悪くねえ」

もう扉を出て行ってしまふ。

「どこへ……旦那様」

「鎮めてくる」

「るりでっ……」

ぱたんと閉まった。女は崩れた。ひくひく泣いた。

+

「縛ってください」

「はあ？」

母親が紐と手首を差し出している。

「……そういうのは親父とやれよ」

「旦那様は……お怒りなので……」

俯いて泣き出しそうだった。なんだか分からないが面倒だ。はあ、と一つ溜息をついて手早くきゅ、きゅ、と結んだ。蝶々結びで綴じてやる。

「とても上手です」女は結び具合を確認して、自分では解けないのを見ると笑顔になる。

「痛くないのに固いです。天はやはり旦那様とよく似ていらっしやいます」

「だから」能天気さに怒りの気も失せる。

「心の底から不本意だ」



……

「旦那様、」

帰ってきた男の元にとたとと駆け寄った。

「るりはいい子にしてみました、旦那様」

蝶々に結ばれた両方の手首を男に見せる。

「そうか」

男はちらりと見たがそれ以上何も言わずに横を通り過ぎた。ふわりとぴんくの匂いがした。怯む。しかし香がじんわりと心の穴を通り抜ける前に男を追いかける。手首を前にとたと足がつまづく。あつ、と当然手はつけずにどうしようもなくおでこを下にしてぶつかるのにぎゅ、と目を閉じる。

ぼすんと身体が抱きとめられた。

「危なつかしいな、お前は」

「旦那様……」また手を煩わせた哀しさと、固い温もりの安心が入り混じる。

「俺の前以外で結ぶな。俺のいないところでこけたらどうする」

「るりは痛くないので、」

「俺が痛い」

ぎゅ、と腕に抱く。ぼろ、と一つ零れる。

「もうしません」

「俺を想ってするならいい」

「千次様……るりはあいしています」

「俺もだ」

手を解いて、抱きしめあった。

暫く抱き合ってから紐を拾う。

「しかし先ほどの結び方は存外可愛かったな」  
それで女の首に紐を回し蝶々をつくる。

「ほら、可愛い」女は頬を染めた。

「もつと色とりどりの着物の紐でお前を色々に結んでみよう」

新しい遊びを見つけたように楽しそうな男の笑みに、女も嬉しそうにこくと頷いた。

### 五十三・団子

「あーあ」

赤い長椅子、空を向く。団子屋。日光を遮る赤の蛇腹傘の遥か上に広がるのは、清清しく乾いた晴れ空。横に置いた蓬団子よもぎだんごも美味い。茶を啜った。

「くそ親父」

ぽつりと呟く。

目を腫らして結んでくれと頼み込む母。何があつたか知らないが、絶対に親父が統べて諸悪の根源に決まっている。

あれほど一途に、好いた女に想われたら、

それなのにあいつは。どうしてそう不実なことができるんだ。それともあべこべなのかもしれない。両方誠実ではうまくいかなくて、どちらか不誠実な方がうまく行くのかもしれない。しかし俺は。

どちらも気が進まない。

女を手酷く扱ってみても、するほどに自分が情けなく惨めに思えてくる。やはり互いに誠実でないと安らがないだろう。

団子をぐい、と歯で筆り取る。そろそろ出るか。

「相すみません、こちら、隣に宜しいですか」

「ああ、どうぞ。今出るところなので」

柔らかな女の声に、櫛の乗る皿と茶碗をどかし、そこで気がつく。女の顔に覚えがあつたが、知らぬ振りをして土産の団子を手に立ち上がった。

「今日は天氣が宜しいどすなあ」

どうだろう。遊郭の外で女に会つたらどんな態度を取るべきなんだ。

「ああ、まあ」

適当に生返事をして立ち去るがいいだろう。しかしひんやり柔らかな手に手を留められる。遊女というのは肌の触れ合いを簡単にするのはいけない。屋敷の者など恐れ多くと、一定以上に俺に近寄りすらないのに。

「遊女と客の痴話喧嘩は珍しくありまへんが、随分ひいきにして貰つたのにあてつけのように他の芸妓を呼んでばかりでは小雪が可哀相でありんす。何かうちの娘が御粗相を？」

「お前の娘？」

眉を顰める。口元の黒子。こいつは確か、初めにあの女のところへ案内した遣り手という取り持ちだ。もし親子で遊郭にいたとしても娘を知りもしない男に平気で差しだすのか。

「小雪のかつての姉女郎、秋桜と申す者にございます」

どうもこれは、面倒だな。

「関係ねえだろ」

柔らかな物腰だった表情がきりとして、女の声が凜とする。

「単なる妹への情にございません。小雪は見世の看板娘。ないがしろにされては見世の暖簾に泥を塗られるのと同じこと」

「それで？」

「本来芸妓は三日通えばその一人を通すのが礼にございます。気まぐれにお慰み頂いて袖を濡らすのは雪ばかりにございません。ご愛

顧頂けるならば芸妓を誰ぞとお決めくださいませ」

「相分かった」ふう、と息を吐いた。

「もう、あの暖簾はくぐらねえよ」

女の手を柔らかに振り解く。

「迷惑をかけた」

「お待ちを」

黒子の女を見下ろす。物哀しげに口元が歪む。

「どうしてあの時雪を俺に引き合わせたんだ」

元々、そうすればこんな辛い　そんな仕様も無い責めにまで及ぶとは、情けない。

「あの方の……息子様だったからです」

「何？」

去りかけた足を思わず振り向いた。

+++

「との次第にございます」

溜息一つ。

「それで、紹介も無いのに俺を通したのか」

「はい、お見かけして一目でそうと分かりました」

女は懐かしげに、そして少しだけ哀しそうな微笑をした。

「雪は自分で気づいていませんが、あの方が通わなくなってしまうたあの日以来、本当には笑わなくなっていたのです。それは単なる

寂しさだけではないでしょう。遊女というものの哀しさを知ってしまっただけかもしれない。あの子が本来の笑顔を取り戻したのは天様のおかげなのです」

「あの子の人氣は容姿以上に努力で身に着けた賜物。その意地もあって、泣き伏せることもせず恋いもしない男に愛嬌を振り向く。遊女の籠にいるあの子が余計に痛々しくて、」

「もういい」女を止めて、赤みの差す羊雲に目を細める。

「雪のところへ」

不思議と、胸のつかえが取れたようだった。

+

「天……」

幼い頃……

帰ってこない父親、寂しそうな母親……遊郭通い……

小雪。

何もかも。女の顔を見ても、猛る感情は何も無かった。此処まで来ると、笑いたくなる。いいだろう。

「ついてこい。親父に会わせてやる」

お前の誠の待ち人に



## 五十四・割器

「千次様……！」

一目見て、堰が切れたように娘は男に駆け寄った。

「雪、」

抱きついてすすり泣く女。男は懐かしむように頭を撫でる。少し離れたところで母親が睫を伏せたのを見た。自分はそのまま何も言わずその場を離れる。誰も気がつかなかった。

惚れた女は父親の情婦。

父と娘程もある年差で、今まで愛しさを込めて呼んできた名は親父のつけた芸妓名。幼い頃から見初められて手懐けられて、水揚げしたのもあの親父。親父が飽きた女にまんまと惚れこんで貢いで。

あのはにかんだ笑顔。

初めて向けられた、初めて胸の高鳴ったあの笑顔は、表情は。元から自分に向けられたものではなかった。

「天……ごめんね」

縁側、ぼんやりと朧月を眺めていたところを女が隣に座った。

「黙っていた訳じゃないんだけど、」

「いい」

欠けた月を写す波立ちの無い黒の池。心は不思議な程静かだった。諸行無常、悟りを開いたような。

「これでもう完全に、未練を断ち切れた」



隣で空気が震える。

「あの…天、天のことは本当に」

「言っな」

立ち上がる。女の顔は見えていない。

「もういいんだ」

池にぐにやりと浮かんでいたそれに、ぽんと石を投げた。黒い波にぐにやぐにや揺ぐ。元の形になる前に、立ち去った。

今まで布を被せたままだった調度品。暗い影に写すのは、黒い髪と黒い瞳。

『生き写しで』

『瓜二つ』

『本当によく似て』

『だけど才は』

『どこが俺似だ？』

「似てねえよ」

小刀を鏡に突き立てる。ぴしぴしとひびが入って割れ、からんからんと落ちた。

+

「ご内儀様も一緒に、」

「あの…るりはお茶を入れてくるので、少し」

奥の方に引っ込んでいくのを、あ、と追いかける。

「それなら私が、」

袖を引きとめられた。

「気にするな、あいつは人見知りだから」

「……美しい奥様ですね」

「そうだろ」

朗らかに笑い、ほらお前の番だろ、と言われて双六を受け取った。

しかし時間がかかっても戻ってこない。

「火傷したのかもしれない。見てくる」

女は床に膝をついてわたたと緑の茶っ葉もかき集めていた。傍にはお湯でぐつしよりと濡れた雑巾がある。無残に割れた陶器が散らばっている。

「何をしているんだ、お前は」

「あ、」びくりと背を震わせるがこちらを向かない。「今、すぐに」

男は茶緑に流れ雲の描かれていた陶器の破片を摘み上げた。

「ごめんなさい……旦那様の大事な御湯のみを……」

ぐず、と啜るのが聞こえた。

「危ねえからどけ」

女の両脇に手をいれ猫のように持ち上げると、離れたところに降ろす。女の目は真っ赤だった。

「これくらいで泣くんじゃねえ」

溜息交じりで言うと、「大丈夫でしたか」と遠慮がちに後ろから声が掛かる。娘は床の有様を見ると、あ、と声をあげ急いで雑巾を拾い絞った。

いい、と男が制止した。後ろでひくひくとしゃくりあげる声。床の惨状。

「ごめんなさい」

「雪？」

「私、そんなつもりじゃなくて…。本当に、ごめんなさい！」  
ぱつと頭を下げたかと思うと、走って行く。

「雪、」追いかけてきたが、後ろの噺り泣きにち、と舌打ち、振り  
返り女の傍にしゃがんで頭を撫でる。

「泣くな、瑠璃。湯呑は気にするな」

\*

布団、しゃくりの漸く落ち着いた女。

「ごめんなさい」

「謝るなら居心地の悪い思いをさせて帰ってしまった客人に向けて  
くれ」

「御客人…」ぽつんと呟く。

「全く、天の奴も連れて来た早々にどこかに消えやがって。何が  
たかったんだ、あいつは」

「天は…悪くないです」

女はぎゅ、と布団を握る。

「あの方は…天のお好きな人だったのではないですか。けれど旦那  
様の…御寵愛を受けていて、天は悲しくなったのではないですか」

「寵愛？ 何か違う。何かお前は勘違いしている」

「あいつは娘のようなものだ。本当に引き取るうかと思ったことも  
ある」

「けれど、」

「俺を信用していないな？ 瑠璃。まあ結婚以来一度も他の女を抱  
いていないとは言わねえ。しかし兎に角あいつはそういうんじゃない  
えよ」

「はい……」

「納得してねえ癖に嘸いた口ぶりはやめろ」

女を抱き寄せて首に口付け、細い腕を慈しむ様に愛撫した。

「身体で教えてやろう。俺がどれほどお前だけを想っているか」

身をよじるのを押さえつける。しかしいつもと違い本当に抗っているようだった。

「嫌です」

それは一緒になって以来初めて聞く、拒絶の言葉だった。

## 五十五・疑心

「何……？」

男は顔を顰めた。それに怯えるように女の声も震える。

「旦那様は……いやならいやと言っていていいとおっしゃいました」

「嫌なのか」

目を瞑ってこくと頷く。

「俺に抱かれるのが、嫌なのか」

「今は、今は、とても……眠いのです」

「嘘をつくな」

ぐいと肌着を左右に割り、身体を露にした。白い肌に桃のような乳房が零れる。身体を使って押さえ込んだまま手を肌に滑らせた。

「や、」

女は嫌がるように体を振り、柔らかい肌がくすぐる。顔は涙を溜めている。

「その顔、懐かしいな、瑠璃……」

男の舌がちろりとその口端を舐めたのに怯えて一層もがくが、敵うはずのない腕中の小さな抵抗が余計に煽らせると知らない。女の細い腰を掴む。

「やあ！」

「や……あ……」

狭く深い鍾乳洞の奥までを塞いで、男は感嘆の息を漏らした。

「お前よりいい女はいねえ」

「だ、ひどい……いやと、いった、のに……」

女は紅潮しながら小刻みに震えている。

「聞き入れるとは言ってるねえ」

「ひどい……あつ」

律動と共に女はもう言葉を喋れなくなった。

+

最後、柔肌に指を食い込ませて達した。抜き出すと、吐き出した欲がかき出されて零れ落ちる。ぐたりとうつ伏せている女の頭を持つて来させるが、しかし女は嫌がるように顔を背けた。

「本当にどうしたんだ、瑠璃」

「とても……ひどいです。るりは嫌と言ったのに……やはり旦那様はるりのこと……」

「何故嫌がる」

「……眠くて、」

「まだそういうことを言うのか」

「今日はとても……多かったです」

「そうだな。今晚は酷くそそられた」

男は汗ではりついた女の髪を除けてやる。

「久々に余裕を失くした。すまなかったな、るり。だがたまにはいいだろう？ お前だってあんなに気持ちよさそうに声をあげていたじゃねえか」

「……雪さんが、いたから」

枕に顔を押しつぶして微かなほど声はくもぐるが男は聞き取った。

「お前、」ぐに、と強めに頬を指で押す。

「いい加減に怒るぜ。雪をそういう目で見たことはねえ」

「分かっています。そうではないのです……」

女はもぞりと起きて、肌掛けを被り自分の脚を腹を体を拭き出した。時折くすんと鼻を鳴らしている。

肌掛けの紐を結ぶとさらに上から着物を羽織った。

「……どこに行くんだよ」

男は半身起き上がり着替える女の後ろを見やる。

「天のところへ」

「悪かった…もうしねえ」

「そうではないのです、天が気になるので」

「お前の方こそ、天を気にかけ過ぎじゃねえのか。あいつの年で添い寝って…毎晩毎晩、慰めるって、本当は何してるんだよ」

「旦那様！」

女は振り返り、銀の瞳で強く眼差す。睨んだようでもあった。

「るりは天のお母さんです」

「結局は血の繋がりがねえだろ」

女の瞳にぐ、と涙が滲む。

「瑠璃、」

少し男の声が怯み、自分も着物を掛けるとベットから降りる。それと同時に逃げるようになりと扉を開けた。

「雪さんは…えりか様に似ていました…！」

女は走って出て行ってしまった。男は呆然とする。

「えりかに…？」

独り、答える。

「そんな訳、ねえだろ」

+

「こんにちは、こんにちは叩く。

「お母さんです、天」

「から、と戸が開いた。

「何しに来たんだよ？」

「天…！？」

血に、塗れていた。



## 五十六・暗鬼

「また親父と喧嘩か」

母親は目を泣き腫らしていた。

「親父が駄目なら俺、どいつもこいつも都合良く代わりにしゃがって」

「天…それは」母親は口に手を当てて震えている。

月が照らす。額から臉頬、首に衣服にべったりついた血糊。黒を塗り替えて、鮮烈な赤。

「あんたも、こうしてやろうか」

切り裂かれた片顔、小刀を滑る、紅。

「そうすれば、もう親父の人形にならなくて済むぜ」

「人、形…？」

「その外見じゃなくて、あいつがあんたをを本当に愛しているのなら何も変わらねえだろ？」

くすりと笑って、一步、近づく。

「よ…」刃と血に怯え、異形の子に怯え、目を見開き震える母親。

逃げればいい。傷つけられて、逃げて、突き放されればいい。きつとあの男は突き放すだろう。血塗れで救いを求めた、顔に傷だらけの女をあの冷たい目で一瞥して。その時盲目な母親から幻想が崩れ、あの冷酷な男が見えるようになるだろう。

真実は傷つかなければ見えない。

刀を振り上げた。

とすん……

白い肌が血に濡れる。

「天…」

頬に宛てられた白い手に赤の血が伝う。 母親が、抱きついて  
いた。

「とても、とてもとても痛いです。手当てをしなければなりません」  
「母さん……」

母親の手を重ね、ゆっくりと降ろす。

「大丈夫だ。…もう、固まった」

「けれど、天、血がたくさん…たくさん、そのままでは…そのままでは天は、」

かたかた震えている。震えていたのは。

「大丈夫だ…死のうとした訳じゃねえ。顔は致命傷になんねえよ」

「本当…ですか。けれどとても痛くて……」自分の片頬を押さえて  
涙を流している。

「すまなかった…」

母親の折れそうな細いからだをぎゅ、と抱く。

「天…？また、辛いのですか」

ぎゅ、と抱きしめ返される。ひどく温かい。

「いや、」母親を放す。

「天…お手当てを」

着物が血に濡れてしまった母を見る。

「そうだな」

とくとくと、顔が脈打っている。巻かれた包帯に手を当てると温  
かい。

白い包帯は、母親の肌掛けだった。

「ありがとう、母さん」

「いいえ、天。お母さんは何もできなくて…きちんと見て貰わない  
と、」

「今まで、俺を育ててくれて」

「天…？」

「出来の悪い子に育ってごめんな」

「え……」

ふ、と笑う。

「俺はこの家を出て行く」

「天……!？」

かし、と小さな両手で服にしがみつく。

「どうして……」

「今の俺に、此処にはいれねえ」

「何か……嫌なことのあるのなら言っして下さい。お母さんがなんとかします」

「そっぴいんじゃねえよ」と笑う。

「御跡継ぎですか」銀色の瞳がなんとか留めようと必死な様子だった。

「お母さんからお父さんにお話します。旦那様はきつとなんとかしてくれます。天が後を継がなくてもここにいられるように」

「親父の力なんか借りたくねえ。其れが嫌だから、出るんだ。この家に囲われて自分で立てない自分が」

「天はもう立派です……!」

「俺は、親父の影に付き纏われる心を振り払いてえ。このままだがキでいるのは耐えられねえ。もっと、もっと……親父を越える男になつたら、母さんに会いに来る。此処で、あんたが誇らしく思えるような霧崎家当主に」

「甘えてんじゃねえ」

声が夜を通り裂く。

黒い流し姿の男がいた。

## 五十七・家出

夜闇を背負って立つ男。その直刃すくはの如き黒い眼が、自分の喉元に切っ先を当てている。

「一度此処ひとたびを出て行くのなら、霧崎の名を捨てろ」

「ふらふらと好き勝手放蕩をして、霧崎の名を貶めるんじゃない。此処で当主になるか、其れが嫌なら名を捨てて出て行け。遠慮はいらねえ、家の一つお前がいなくともどうともなる。むしろそんな甘えた奴に継がれるよりは、潰れちまった方がまだましだ」

膝をついてしまいたくなるような、このびりびりと引き裂くような空気。暗く大きく全てを支配するこの夜そのものが男の纏のようだった。

「継ぐか、名を捨てるか。覚悟もなしにほざいてんじゃない」

これが、親父。

俺は。

「霧崎なんて、いらねえよ」

崩れそうな膝に力を入れて立たせる。

「正直、実感沸かねえよ。男も女も貴族の連中とは肌が合わねえ。白々しい、意味も無い人形に見えて仕方ねえ。ここの使用人も家名も てめえの家族すら、俺は命を張れる程大事には思えねえ。その通りだ、こんな奴が、幾らめつきを固めたところで柱になんかなれる訳がねえ。支える為の芯が入ってねえんだからな」

「俺がこの家にいたのは、俺が大事なのは唯ただ一人」

分け与えて破れた布を纏った、ところどころ自分の血のついた、

「　　だけどそれは、俺のものにはならねえ」

白い体を浮かび上がせるのは、大きな大きな、触れることもできない黒い夜。

「霧崎の名なんかいらねえよ。俺は、母の呼んでくれたこの名一つで十分だ」

「　　そうか」

「ならば出て行け」

男の声は静かに、抑揚もなく。

「但しこれのみは覚えておけ。二度とこの屋敷に足を踏み入れるんじゃない。俺を殺す覚悟がねえならな。もしもお前が甘えてこの家に足を踏み入れるようなことがあれば、俺がお前の息根を止めてやる」

「上等だ。二度と帰って来ねえよ、こんな家。次にあんたの面を拝むのは死に顔だ」

切った啖呵は戻らない。今までで一番悲しい表情の母親に胸をしめつけられて、最後に絞りだす。

「　　母さんに何かあったら、あんたを殺しに来る」

そして、長い廊下に背を向けた。

「天……！」

伸ばした手を、握って。

「じゃあな、母さん。　　元気で」

放して、背を向く。もう、振り返らない。

「天　　！」

悲痛な声がするが、とたと駆け出そうとした足音は不自然に止まる。

「お前も…俺の妻として生きる覚悟を決めた筈だ」

「旦那様……はい……」

「天、天、いつてらっしゃいませ！ るりはずっとずっと、天のお母さんです！」

透き通る叫び声が、背を追いかけて夜を縫って届いた。

「天　お前もお前の道を行け」

## 五十七・家出（後書き）

三章、完。ここまで読んでいただき有難うございました。次幕まで少し間が開きます。

「ところで瑠璃、随分危うい格好をしているな。そう肌を見せては男の目に毒だぜ?。」

「駄目です」

「……そうか」

五十八・外伝 梅の蕾の咲く頃に。(一)

「お前は此処の見習いか？」

引つ込み思案で、地味な子だった。

梅の蕾の咲く頃に。

そう不器量という訳ではないけれど、この大見世には選りすぐられた華やかな娘が大勢いた。

都一の格式で、公家も上流御用達、そうとくれば顧客好みに洗練されていなければならないから、そこで芸妓と名乗るには立ち居振る舞い、舞や歌に三味線、気の利いた会話もできないといけない。桐楼郭の太夫と名乗れば貴族の屋敷でも丁重に扱われる程だった。それが元は田舎か出てきた頼の赤い娘であつたとしても。

そんな訳で、此処にいるのは売られて来た田舎娘だけでなく、それなりに裕福な町の子だつて門戸を叩く。うまく貴族に寵愛を受ければ妾にしてもらつて使用人を顎で使う生活ができたり、あるいは大商人の嫁とか、そんな逆転劇の起こりうることを夢見て。

それほど夢見がちでなくとも、ここに登楼できるのはある程度以上の格式のある男達。そんな男達にちやほやされて袖を振ることもできるとなれば、冴えない男の嫁になつて何人と子の面倒を見、家事炊事店に追われ皺くちやになつた末に邪魔者扱い、最期はお陀仏、そんな人生よりも思う女も少なくない。

「いえ、ちがいます。わっちは勝手女です」



芸妓の見習いなのかと聞いてきた客に答える。

ここで働いて、しかも芸妓の見習いになれないということはつまり上の下というような位置だろう。

でもそれでいい。三食きちんと食べられるし、そんな華やかな世界なんて自分には縁遠い。覚えだつてきつと良くないし、そんな目の色を変えて努力する意味も見出せない。なんてはつきりは思っていた訳ではないけれど、幼ながらにどこか諦めの心があった。

「そうか」

男は茶を飲む。自分はすぐに下がる。入れ替わるように襖が開いて遣り手の女がすつと襖を開けた。

ここの遣り手は年増でなく、大抵は年季明けでも十分女の色香を持つ女だ。

「誠麗しゅうございます……本日はどちらの芸妓になさいますか」

普通、日替わりで芸妓を抱くなんて許されないので驚いて口が開いて遣り手を見る。

「そこの子で遊ぶ」

後ろを振り返ったが誰もいなかったので肝が冷えた。

「申し訳ありませんなあ。そちらの子は飯炊き童で、禿どころか見習いでもないのです……」

「いい」

「いい、じゃねえよ」

もう一人いた連れの男が、困った様子の遣り手とぽかんと口の空いた自分と決定事項のように動じない男との止まった場を取り持った。

「何考えてんだ、お前。流石にこんな小さな子にまで手を出すのは

友として見過ごせねえ」

「手を出す？」男はくすりと笑う。「低俗なお前と一緒にするな」  
「なんだとっ」

ぴきりと筋の立つ男を無視して烏の濡羽のような黒髪の男は遣り手を見やる。

「下がれ」

「は…失礼いたしました…ごゆるりと」

黒い瞳に見下ろされただけで、案内人は頭を下げた襖を綴じてしまった。

取り残された。そんな。

「来い」

男が手招いていた。

+

「なあ、実はお前って幼めの娘が好みだろう、変な意味で」

「穢れのない女が好きだ」

男に櫛で髪をすかれている。持ってこさせた化粧道具箱と姿見がある。後ろで髪をすいている男の顔を見れる訳が無く縮こまっていた。ひどい、ひどいよ。こういう仕事じゃないのに。どうなってしまっただろう。何をされるんだろう。

「そしてお前に穢れさせられるんだろ」

思わずびく、と震える。こういう場所で育っているから男がどういうことをするか分かる。でも、まだ初潮も来ていないのに。ひどい、ひどい。なんで。

「全く、お前の所為で震えているじゃねえか」

やれやれ、と男は嘆息する。

「十割お前の所為だ」口を尖らせてもう一方が抗議した。

そして髪を結んで紐を括り付けられると、顔に手が伸びた。強張る。

……

「ほら」

「ほう」

はつと目を覚ませた。頬をくすぐったい毛で撫でられ唇につんとあたりぽふふされて、顔をくすぐる余りの気持ちよさに眠りかけていた。涎を出ないように嚙ってごくんと飲み込む。

「目を開ける」

開く。

「わ……」

そこには別の子がいた。元々白すぎる肌に赤みが差して、頬は柔らかそうで口紅は小さく桃に近い紅色が差されていた。分かったところはそれだけけど、何もかもが変わって見えた。

「わたし……？」

その通りに口が動く。

「女は皆原石だ。磨いた者が光る」

男はくす、と笑った。初めてまともに見たのは鏡越し。ひどく整った、今まで見たどんな男よりも、いや女よりも美形の人だった。

「そしてお前が女の化粧ができるというのも軽く気色悪い。まさかそんなことまで習うのか、坊ちゃん。最高貴族で括るにも程があるぞ」

「お前だって化粧した女の顔位毎日見飽きているだろう」

「ああ、はい。十を知って一から九を知るといっやつですね。分かりました、この天才が」

「十五位じゃねえか？」

「そうですね」

半ば呆れた様子で相槌を打っていた。

「お前、名は？」

「こ……小梅」

「成程。お前は雪がいいだろう。これから小雪と名乗れ」

「勝手に名をつけるな。そしてつけるなら何で名を聞いた？」

「馬鹿。芸妓名だ。それに雪に梅は美しいだろう」

「あ、の……」

私、芸妓じゃ……

「どちらにせよなんでお前にそんな権利がある？」

「俺が後見をしてやる」

「はあ？お前、なあ……酔狂な遊びは悪い癖だぞ。しかも今じゃお前も、」

妻子持ちだろ、と言つのが耳に残った。男は構わずぽんと頭に手を置き瞳を覗く。黒い瞳に吸い込まれた。

「小雪、お前は都一の芸妓になる」

五十九・外伝 梅の蕾の咲く頃に。(二)

と言つて何をするでもなく、男はただ遊びに来ていた。

遊んでくれに来ていたというか。鞠や独楽の玩具や、飴や駄菓子、綺麗な鏡など、はたまた珍しい土地の物、異国のもの、とそういうものを手土産に、一緒に時をすごす。一緒になつて遊ぶのではなく、鞠突きをしているのを穏やかに見ているとか、そういった。

「雪は東北の生まれだそうだな」

「はい」

記憶はないが、そうらしかった。奥州武家の血筋だと。なら何故物心もつく前に売りに出されたのか。成長してから疑問に思つのを経て、見世の適当に作った経歴だろうと理解した。何せこういう場所だから、浅ましいのを嫌う。血筋は良いが売りに出されて、という『悲劇の子』がほとんどだった。

「話を聞かせてくれ」

父が娘を慈しむような態度で、膝に乗せて戯れる。

「とうほくでは、雪のいえをつくります。いえの大きさほどたくさん雪がふるので、みんなで穴をほればいえになります。冬のあいだはみんなでそこに住みます。おふろは雪でできていて、あたためれば雪がとけて水をはこばなくてもおふろのお湯になります」

「へえ」男は時々相槌を打って、面白そうに話を聞いている。

「雪は食べるとおいしいのでとっておきます。なつにはみんなでおらずに雪を食べます」

でたらめの想像だったが、男は時折髪を耳にかけてくれながら楽しそうに耳を傾けるので、得意になつて話をするのだった。東北なんて異国ほど遠い場所で、きつとばれたりなんかしない。

「雪、りんごを持ってきたぜ」

「りんご、」

「東北の果実だろう。好きか？」

「はい、ゆきのこうぶつです」

そうか、と男は笑つてそれをぽんと手渡す。赤い小ぶりの果実がころんと手の平に収まつた。

「洗つてあるから食べて良いぜ」

言われるままに初めてその果実に皮ごと齧りついた。

すっぱい。

「どうだ？」

「おいしいです。なつかしいです」

くちゆりと水水しいそれに齧りついた。

「そうか」男は笑つて眺めている。

それから季節になると度々『りんご』を持って来てくれた。

今でも、すももを見るとりんごと言ってしまふ。思えばからかわれていたのだろう。

+

芸妓としての姉さんがついて、見習いが始まつた。男は気ままに来る。皆羨ましがった。特に看板の姉さんについている禿は、どう

してあたしじゃないのと悔しがっていた。だけど大きくになるにつれてだんだんとそれは自分の気持ちにもなっていた。

「雪、」

会いに来てくれる。だけど、それは。

「千次さん、早う」

此処は女を抱く場所。

芸妓を連れて、行ってしまう。

女は誰と決まっていらないようなので、皆その人の気を引こうとめかしこんでその当時はひどい絢爛振りだった。その人が頻繁に通ったその時は、ここ数十年來の繁盛と言われたほどだ。

だけど通う日の多くなるほどに、目に留めて貰えずに、又は一度きりの契りを結んだそれきりで涙で袖を濡らす遊女でいっぱいになった。

馬鹿ね。

金持ちで身分が高くて美麗で。だから媚を売る。だから振られるのよ。

私は知ってるの。

あの人が言う『美しい』を。あの人はその人を探している。その人になる為に私がいる。

私は袖を濡らす様な惨めな真似は決してしない。男に袖振って笑う、それだけ美しい芸妓になってみせる。

だけど禿<sup>かむろ</sup>も板についてきて、新造もそろそろという頃には姉さんが決まった相手になっていて、それで姉さんが看板太夫にまでのしあがっていた。

一番初めに声をかけてくれるのは自分なのに、時も過ぎさない内

に姉さんが奥の座敷に連れて行ってしまう。朝、ひどく色っぽい乱れ髪で帰ってきては、心がじくりじくりと痛んだ。

姉さんは綺麗だった。綺麗になっていった。それに元々一番の芸達者で、芸を丁寧に仕込んでくれた。小雪のおかげといって優しくしてくれた。

姉さんは好きだった。だけど、じくりじくりとしていた。

子供に戻りたい。早く大人になりたい。

なんなのか分からない。子供が親を取られる気持ちだったのか、それとも。

だけど、覚えている。

「小雪、俺の娘になるか」

「え、」

一度だけ、そう言われた。娘：娘になったら、本当の、娘　こくんとしてしまいそうになった時。

「あいつも喜ぶ」

あいつ、というのはご内儀様のこと。思わぬ程きつぱりと、首を振っていた。

「雪は都一の芸妓になります」

「そうか」

少し残念そうに言って、だけどどこか褒めるように頭を撫でてくれて、これで良かったんだと誇らしげに思った。その話は二度はしなかった。

雪は都一の芸妓になります。そして千次様だけに雪を捧げます。だから待っていてください



そう決意を胸に秘めたのを。

六十・ 外伝 梅の誓の咲く頃に。(三)

思う通り、水揚げはその人がしてくれることに決まった。芸妓史上類を見ない揚げ代だったそうだ。

その日に行われる初めての道中も、姉さんが看板芸妓だったおかげで誰に気兼ねもなく見世一番華やかに行われることになった。姉さんも惜しみなく用意をしてくれたし、その人からもこれ以上ないという程見事な仕掛けの一式を贈って貰った。

決して絶世の美貌という訳ではなかったけれども、姉さんの仕込みと血の滲む努力の甲斐あって芸技は見世一番の腕になった。それ以外でも男女の機微をつぶさに観察して、その仕草や駆け引きを自分のものにしていた。

後ろ盾は大きい。だけどそれに引け目を感じないほど、努力でのし上がったという自負があった。

そして、華やかに華やかに煌びやかに、天女の遊覧と語られ草になった道中を終えた。

座敷に上がる。自分の為に調度も全て新調された広い座敷。手塩にかけて育ててくれた男と二人。白い床。まさに人生最高潮の夜の筈だった。

「千次様……雪はずっとお慕いして参りました」  
男にしなだれかかり、潤んだ瞳で見上げる。体中がすでに火照っている。

「雪、」

頭を撫でてくれた。そうして揺れる蠟燭灯りに目を眇める。

「美しいな……」

涙がぼろりと出た。漸く。漸く可愛いから美しいに。娘から女に。

「雪、もう……」

縋り付いて体を押し付ける。

「もう、子離れだな」

慈しむように撫でていた手が離れる。一欠片の不安を消そうとその手を両手で包む。

「はい……雪を、早く女にして下さいまし……」

男はくすりと笑った。

「それはお前の男に取っておけ」

すらりと立つ。

「千次様……？」

「可愛い雪、」見上げる額に腰を屈めてそつと口付けた。満月の月に向かう。

「千次様……！」言いようの無い不安に襲われて立ち追いかける。仕掛け重ねの着物が重い。

「雪、」彼は変わらざるの微笑を湛えている。

「お前の道を生きろ」

夜に消えていった。

覗いたそこには夜しかなかった。窓の外、身を乗り出しても二階から人影も見えない。

夢……？

どこから……？

あの人は、初めから夢だったの……？

わんわんと、泣きたかった。

だけど、意地が許せなかった。

初見世の日に、買われた男に逃げられるなんて。

誰にも気づかれないう、袖を噛み締めて声を押し殺し、涙だけ濡らした。

翌朝、袖はぐつしよりと濡れていた。

水揚げ代は、身請け代を越えていた。年季も解かれて。

そう、自由にしてくれた。

だけど、私は。だけど、私は。

「あなたに……！」

全て、無くなった。ねえ、都一の芸妓になつてなんの意味があるの？ そうなれば貴方はまた私の元に来てくれるの？ その時は抱いてくれるの？ 私の道つて何。私の男つて何。私は、何のために何をしてきたの……？

遊郭に、残った。

結局私は此处で生まれ育つたようなものだった。出て行く理由も宛てもない。姉さんだけには察してしまわれて、慰めてくれた。

あの方はいつも他の女ひとを想っていた。

しまいには二人でしとしと泣いて慰め合っていた。互いの嫉妬を明かし合った。他の女を想って抱かれるのと、女と見られず可愛がられるのと、どっちが、て。

そんなの決まっている。

姉さんは遣り手になった。もう芸妓を続ける気力の抜けてしまったと。この体をそのままにと。

私は宙ぶらりんに見世の花として居座つて。男に袖を振ってばかりいた。

ただ、ぼんやりと。

ただ、ぼんやりと。

待っていた。

誰を？

あの人が迎えに来てくれるのを？それとも、ワタシノオトコ？

「お会いしとうございました」

黒い瞳を見上げて、妖艶に笑ってみせた。

愛し合って抱かれない。

梅の蕾の咲く頃に。（完）

## 六十一・留守（前書き）

あれから雪が溶け、春になった。だけど外は未だ寒い。せつせと半纏を縫う。

## 六十一・留守

「……」

男は新聞を読んでいた。表情は特にない。逆に言えばいつもの微かな微笑も無かった。ぱたりと閉じ置く、それを見計らったように。

「旦那様、」女がいた。

「どうした？瑠璃」

「いえ、あの、何か面白いことの書かれていますか」  
新聞にちらと目をやった女にくす、と笑う。

「つまらないことだ」

お前も読んでみるか、と手渡すと女は開く。音読しながら目を追ううちにだんだんと申し訳なさそうな顔をした。

「米……て…国の……が、るりには少しむつかしいようです」

「そうだな、悪かった。部屋にこんなものを持ち込んで」

男は女を見上げる。新調した水色の着物と白い真珠の髪飾りをつけていた。

「綺麗だ」くすりと男は笑う。「これを見て欲しくて先ほどからうるうるしていたんだな」

「うるうるしていた訳では…ただお邪魔してはいけなくて、少し、顔を赤らめてもじ、と自分の手を弄った女の頬に手を伸ばし撫ぜる。

「お前は本当に可愛いな、瑠璃」

そつと抱きしめた。

「いつまでも変わらずにいてくれ」

「はい、千次様」

女も遠慮がちにその背に手を回し、頬を染めて微笑む。

「ずっと千次様にあいして頂けるように……」  
胸に包み込んでいたのをゆっくりと離れた。

「さあ、お茶にしよう、瑠璃」

ぼたんと落ちた水滴で、カップが一つ多いことに気がつく。

「天……」

目元の涙を掬った指があった。指に乗った雨露に口付けるようにそれはその唇に吸い込まれる。

「旦那様……」

何も言わず、慰めるように手が頭を撫でる。

「天の、半纏を縫っているのですが……るりはどうやって渡したらよいですか」

「俺が渡してやる」

涙の乾かない女を優しく包んで微笑んだ。

「本当ですか。いつになったら天は見つかりますか」

「分からねえ……瑠璃、俺は少し留守をする」

「え」

「留守番、できるな？」

「ど、どのくらいでお帰りになりますか」

「分からねえ。だが三日四日じゃ帰って来れねえだろう」

かし、と女は袖を掴んだ。ふるふると首を振る。

「るりも連れて行ってください、旦那様。きつとお役に立ちますので」

「すまないな、瑠璃。俺も辛い。だがお前を失う恐ろしさ考えたら連れて行けねえよ」

「お危ないのですか、旦那様。行つては嫌です、旦那様。旦那様……」

「可愛い瑠璃」

男は微笑んで、縋り付く女の頭にぼんと手を置く。



「大丈夫だ、瑠璃。ただお前には俺のいない間、家を守っていて貰いたい」

「けれど……るりは一人はとても……」

「瑠璃、」

男は女に口付けた。

暫く抱擁した後に、ゆっくりと離れる。

「愛してる」

「はい……」

こくと女は頷いた。

「お氣をつけて……行つてらっしゃいませ、旦那様」

冷たい風を切つて、少しの間だ、と言って笑つて行つてしまった。

だがいつになつても男は帰らなかった。

「旦那様……」

とうとう一月が経つたが、音沙汰は無い。女は痩せ細つていった。

「天……旦那様……誰も……るりは」

\* \* \*

三ヶ月が経つた。

「瑠璃、歸つたぜ、瑠璃」

男は部屋を開くが誰もいない。おかしい。それも、昨日のうちに  
もう電報を入れていて、

使用人は皆出揃つて迎えたと言つのにどういうことだ。

「瑠璃？」

誰もいない。

「おい、瑠璃はどこだ」

呼び出して睨んだのは、彼専属の執事だった。乳母兄弟の関係で、今は執務上の片腕と言っている。

「俺が帰るとは言っているんだろっな？」

「……お伝えしてからです」

執事は言い難そうに重々しく口を開く。

「どういうことだ」

「若君がお帰りになると伝えた途端にお部屋に御簾りになられてしまつて……」

「ここにはいなかったぜ」

「若君に仰せつかった様に見守り申し上げていましたが、お食事時にもお部屋から出られてはいません」

「……」

男はちろ、と女の衣裳が仕舞われている部屋を見た。勘だ。

がちやり。

やはりそこには鍵が掛かっていた。更衣室ともなっている為、内側から施錠できるようになっている。もともと女の更衣中に入るような真似はしないので鍵は意味などなかったが。しかしここは唯一と言えば唯一、女の占有する個室でもあった。

「おい瑠璃、どうした。俺だ。帰つたぜ」

しいんと物音一つ立てずに居ぬ振りを続ける態度に、男の目が徐々に険しく眇められる。

「開けないなら開けるまでだ」

「若君っ、実は……」

執事が焦ったように止めようとしたのにも間に合わず、男はばきんと戸を蹴り倒していた。はあ、と執事は手を額に当てる。年とともに落ち着いてきたと思えたがやはり変わらない。

奥でこんもりとした布の塊があった。それは蹴り破られる音とともにびくりと動き、かたかたと震えている。男の近づく気配と共にますますぎゅつと縮まる。もうそこにいるとは分かっているのに観念するどころか余計頑なに身を隠そうとしている。

「また何をしているんだ、お前は」

しかし力一杯の抵抗も男にとっては造作ない。ぱつと布を剥ぎ取った。

「な……」

言葉を、失った。

呆然と、まじまじと、見る。

それは美しい銀色の髪、空色の瞳

丸々と、太った体。

## 六十二・在処

華奢だった面影は見るも無残に、ない。赤ん坊の体がそのまま大きくなったように白く柔らかそうな肉にふっくら覆われ、背が高くはないのも相まってころころとしている。関節を覆う肉に二重の顎。

「は……」

「若君！」

くらりとよろけたのを執事が支える。

「瑠璃が……俺の瑠璃が……」

もそもぞと動く。薄暗い奥、幾重にも重なった色とりどりの着物を敷いて巢にした、それは白い仔猪だった。

肉厚の脛に押し潰された丸い瞳が潤んで見上げる。哀憫を誘う申し訳なさげな八の字眉も今は物乞いのように情けなかった。

「あれは……瑠璃じゃねえ……」

男は半ば放心し、自分に言い聞かせるように額に手を当て正気を保ちよろけた体に力を入れようとする。

「若君、お気を確かに……ひとまずこちらへ」

体を支えて、ふらふらとする男をソファの方へ導いた。

+

かちやりとコーヒーが置かれる。飲み口に青と金の線が引かれたコーヒーカップ、漂う挽きたての豆が香ばしい。しかし男の眉間には険しい皺が寄っていた。

「……何があつた」

「若君、」

「お前がいながら何があつた、川野！ 瑠璃を頼んだ筈だろう！」

執事の襟が掴み上げられ、がたんと揺れたコーヒーターブルに茶黒い液体が毀れる。

「落ち着きくださいませ、若君」

冷静さを崩さない、むしろ嗜めるような口調に、ち、と言って離す。

「話せ」

「いえ、若君」

「……なんだと」

毅然として落着いた調子の言葉に、男の声はますます低く怒気を含む。

「若君はこの三ヶ月ほとんど睡眠も取らず食事も疎かにして政務を執られたと聞きます。それも幾度もお命を狙われて緊張の状態であったと…… 瑠璃様のことは全てお話ししますが、この屋敷に帰られたからには何よりも先ず安心してお休みになられることが第一です」

「俺が帰った第一は瑠璃だ」

「瑠璃様の御為にもです。失礼ですが、若君はお疲れの為気が立っていらつしやる。そのような状態で今瑠璃様にお会いになられても、余計に若君の心身に差し障ります」

「大事なのは俺の体じゃねえ！ それならば初めから出てなどいない」

「ですから、そのように気性の荒れた状態でお接しになられても、かえって瑠璃様をお傷つけになられるだけだと申し上げているのです。今瑠璃様にお会いになられて、若君はどうされるおつもりですか。先ほど何ができたと言うのですか」

ぐい、と一層眉間に皺を寄せて睨みつけ、しかしはあ、という深い溜息と共に男は精根の尽き果てた様子でふらりと立ち上がった。

「……寝る」

ふらふらとしながら、男は一人寢室に向かつていった。その背に深深と執事は礼をする。

「お疲れ様でした。ゆっくりとお休みくださいませ、若君」

+++

眠り続けて三日目の昼過ぎ、着流し姿の男が食事を取っていた。

「そんなに寝ていたか。何度か目覚めはしたが、体が重く起き上がれなかった」

「当然です。常人でしたら目覚めることもなかったでしょう。若君が無事な姿で帰られて、涙を流した者がどれほどいたことか。この三日間、屋敷中の誰もが心配の余り全く身の入らないひどい有様だったのですから。お食事を終えになって医者に診せた後には、皆に顔を見せておやりになってください」

「ああ、分かった。それにしても、帰ってきた時には当たつてすまなかった、川野。記憶に虚ろだが、随分と気が立っていたようだ。俺としたことが辛抱もできずに扉を蹴破つたなど信じられねえ。可哀想に、あいつのことだから余程怯えてしまっただろう。他に俺は瑠璃に何かひどい事をしなかったか。　そうだ、早く瑠璃をここに」

「若君、瑠璃様は……」

「分かっている。三月の間に変わり果ててしまった。だがそれも俺のいない寂しさの所為だったのだろう。辛い思いをさせた」

「もう瑠璃様はここにいらっやしません、若君」

口をつけたみそ汁の器がぴたりと止まり、傾くことなく降りてか  
たと音を立てた。

「……どういう意味だ。此処にいないくてどこにいる」

聞き返した静けさは、返答如何では逆鱗の予兆を孕んだ緊張だっ  
た。

「若君、順を追ってお話しさせて下さいませ」

「……」

無言を了と取って執事は話し始める。

「若君がお出になって七日が過ぎた頃から、瑠璃様はお食事を  
ほとんど召し上がらなくなりました。体調をお崩しになり、ひと月  
目には遂にお倒れになって床に伏せるようになってしまわれました。  
原因は拒食による栄養失調です。私共も試行錯誤をしてなんとかお  
食事を食べて頂くとしたのですが、ほとんどお手をつけられずにお  
残しになるので……止むを得ず、使用人数人がかりで押さえてで  
も召し上がって頂いたのです」

男の眉がぴくりと動くが、表情を変えず黙って聴く。

「それが瑠璃様にはお堪<sup>こた</sup>えになったらしく、それからは御自身で召  
し上がるようになられました。中でも多種取り揃えさせた洋菓子は  
特にお気に召され、洋菓子職人を雇って作らせることにしました。  
瑠璃様専属で作らせた洋菓子を瑠璃様は大層お喜びになり、すっか  
りお元気になられたかと一安心したのですが……」

「気づけば瑠璃様は一日中お茶をなさり、お菓子を召され続けるよ  
うになりました。      それであのようなお姿に……」

「ようになつた、じゃねえだろ」

口を噤んだのを見て、男が糺す。

「姿どうのだけの問題じゃねえ。菓子を取り過ぎは体に毒と分かっているだろう。何故そのままにしていたんだ」

「仰る通りでございます。誠に申し訳ございません。私の不届きによる責任でございます」

「責任の在り処など訊いてねえ。何故だと言った」

「それは……瑠璃様は、お茶の時は必ず菓子もカップも含めて席を三人分用意させました。まるでそこに誰がいるように、一人ままとのように楽しそうにおしゃべりになって……。お控えになるよう申し上げると、大切なものを取り上げられる子供のように怯えて若君に助けをお求めになり……。瑠璃様がそれによって寂しさを紛らわせていることも存じていましたので、また食を拒みお命を危険にさらすよりは、若君がお帰りになる迄と思い強くお止めすることができなかったのでございます」

ふう、と男は嘆息した。

「話は分かった。特に瑠璃を無理に押さえつけたくだけは全く許せねえところだが、お前なりの献身に免じてここまでについては咎めない。だが、」

改めて真っ直ぐにその黒い瞳で射る。

「瑠璃がいなかったのはどういうことだ。幾らお前でも返答には心しろよ」

「瑠璃様は、若君のお目覚めを聞いて自害なさろうとしました」

「何を馬鹿な」

「元々瑠璃様としてもお弱りになつたお心の限界だったのです。も



う二度と若君の目に触れることはできないと取り乱しなざるのをなんとかおなだめしてひとまず竜之介様のいらっしゃるお屋敷にお送りさせ申し上げました」

「　　竜之介だと？」

男の眼が鋭く眇められた。

## 六十三・叶願

男は噛み付かんばかりに執事を見据える。

「何を勝手な真似をしているんだ。過ぎる程忠義立てるあいつが、瑠璃のこととなると俺に背くほど想いを寄せているとお前は知っている筈だろう」

「お言葉ですが若君、瑠璃様のお体を考えればそれが最善かと思えます。瑠璃様の疾患は偏に寂しさに依るもの。この三ヶ月、瑠璃様はただの一人とも会話をなさっていないのです。お話し相手になるどころか、屋敷の者に会うのを恐れるようにお部屋にお引きこもりになって、一步も出られていません。昔のご記憶もあるでしょう。若君のいないこの屋敷は瑠璃様に取って地獄に一人残されたような心だったのかもしれませんが」

「瑠璃様が心許されているのは、若君と天様を除けば竜之介様のみ。若君はまたすぐに家をお空けにならなければなくなる。次に瑠璃様がどうなるかもしれない恐れを考えると、出過ぎた愚考ではございますが、何よりも若君の憂いを考えての所存にございます。せめて天様がいらっしゃれば」

黙って、男は立った。

「どちらへ、若君。恐れながら今瑠璃様を追いかけられても、かえって瑠璃様のお心を追い詰めることになるかと」

「家の者達に顔を見せたら、すぐに此処を発ち仕事に戻る」

「若君、それ以上の御無理はいけません。若君が考えている以上に体に重すぎる負荷をおかけになっているのです」

「瑠璃がいねえのにこの家にいる意味はねえよ。一刻も早くこ

の面倒事に目途をつけて、瑠璃を迎えに行く」

「若君、今度こそ私めも微力ながら若君のお手伝いをさせて頂きま  
す」

執事は追いかけるように男の後ろについたが、主人は軽く足を止  
めて振り向く。

「お前がいるからこの家を任せて出れるんだ。俺の留守中、頼んだ  
ぜ、川野 それと、」

くす、と口元を上げる。

「瑠璃に手を出したら殺す そう竜之介に言って置け」

その微笑は冗談か本気か知れない空恐ろしくなる笑み。だが帰っ  
て初めての余裕不敵のその表情を見て、安堵と嬉しそうな表情を浮  
かべて止まりぴしりと立つ。

「勿体無いお言葉、恐縮でございます。この川野、若君のご期待に  
添えるよう全力を持って応えさせて頂きます」

深深と礼をした。

「行つてらっしゃいませ、若君」

「おう」

男は微妙な微笑で出て行く。

しかし門を出て一人になった時、その笑みは消え口元は引き結ば  
れる。だが黒い瞳には変わらず強い光が宿っていた。

「瑠璃」

「るり」

下に俯いて、自分の衣をぎゅ、と握っている。新しく寸法に合わ

せて作られた着物のようで決してきつそうではなかったが、泣きそうになりながらできるだけ体を締めこみ、連れられてきてからずっとその様子を変えずに黙ってただそこにつつ立っていた。

どうしたことが、今や丸々と太ってしまつて、子供のように華奢で愛らしかった姿とはかけ離れてしまつていた。

だが、その心をぎゅっと締め付けるような愛しさは変わらない。むしろそのなんともいたたまれない様子は余計に憐憫の情を誘い、今すぐにでも手を引いて抱きしめてやりたかった。

「では瑠璃様を宜しくお願い致します。竜之介様」

本家からの執事が、礼をして出て行く。礼儀正しくはあったが、そこに感情は感じられなかった。尤も、冷静で機械的なこの姿こそが何百という使用人を取りまとめるのにあるべき形なのかもしれないが。

「瑠璃……会いたかったよ」

やはりそこに突っ立ったままだった可愛そうなその人にふいと口元が微笑み、腕に抱きしめる。

兄だっがいい。

「りゅ、う……」

う、と言つて唇をかみ締めるのが分かった。

「いいんだよ、泣いて」

撫でてやると、ずっとせき止めていたものが溢れ出したようだった。

「りゅう、りゅう……！」

自分の名前を呼んでしがみ付き泣き咽ぶのを、優しい気持ちですつと撫でていた。

「るりは何も悪くないよ……もう大丈夫だから、安心して泣き」

「りゅう！」

ばたばたと手を引つ張られていつて、何事かと思えば花壇に咲いた花を指差して酷く嬉しそうに笑う。

「お花の咲きました！ るりがお育てしたのです」  
「そうだね、綺麗に咲いたね」

花咲くような笑顔を取り戻していた。

何か気が紛れればと思つて輸入した苗をあげてみたら、毎日せつせと世話をし、遂に赤い実を成らせた。それを一緒に食べて美味しいと言えば大層に喜んで、それからはずっかりと土いじりに夢中になっている。今では花壇というより小さな農園にまで大きくなった一角で、花に野菜までを育てていた。

体の脂肪も綺麗さっぱりと落ちて、もうすっかりと元の体型となっている。それどころか前よりも健康的な肌色で、頬はばら色に染まっていた。やはり華奢ではあるが、抱きしめれば折れてしまいそうな病床の儚さはなく、無邪気に走り回る子供のような健康の美しさで輝いていた。

「これはりゅうです」

「え？」

花の咲く土に水を遣つて嬉しそうに言う。四輪の花が咲いていた。「これは天で、これは旦那様で、これがるりです」

そのいっぱいの笑顔に締め付けられるような切なさを感じた。一輪を囲む花達。そのあまりの無邪気さ。ずっと心の奥にしまっている筈の、叶わない願い。

春が巡っていた。連絡は、一度もない。

「りゅう……」

腕の中の心細い声。

いつからか、一緒に布団の中で毎晩を眠った。それはあの人への背徳の思いはしたのだが、そういう疚しいものではないと言い訳のように思い直す。

夜一人きりで眠るのが怖いと点々と濡れた枕を持って来て言うので、寝付くまでと思って添い寝をしてやった。添い寝だけのつもりでいて、だけどいつの間にか深い眠りに落ちてしまうから、今ではそのまま一緒に眠ってしまっている。不思議なことに、自分までひどく安らいで眠れるのだった。今まで本当に眠ったことがなかったと思うほどに。

「……旦那様は、まだ……帰ってはいないのですか」

「お帰りになられたと連絡を受けたら一番に瑠璃に教えるよ」

「ありがとうございます、りゅう。るりはお花を持っていきます。」

旦那様はお喜びになるでしょうか」

「きつと喜んでくれるよ。るりが育てた花だからね」

腕の中で嬉しそうに笑ったのが、身じろいだくすぐったさで分かった。髪を撫でてやると、ふわりと微笑んで瞼を閉じる。

「りゅうはとても暖かい……」

くすぐったく、温かった。

一番温かな時間だった。

+

石段を登り終え、男は朱色の鳥居を見上げる。

そのままぐり、境内を進んだ。枯葉を掃いていた尼が、手を止

めて見咎めるように声をかけた。

「もし 何か御用でしょうか」

男は砂利石の上に跪く。

「お迎えに上がりました、奥様」

## 六十四・命淵

「顔を上げてください」

毅然とした声に、燕尾服の男は顔を上げた。

「お立ちになって、馬鹿な真似事は止めてください。私はもうあの方の妻ではございません」

艶やかな黒髪を肩で切揃えた女は枯葉を脇に寄せ立ち去ろうとするが、それを追いかけるように男は立ち上がる。

「若君には貴女様が必要なのです、えりか様」

足を止め、しかし振り返らずに尼はひんやりとした声音で言う。

「あの方がそうと？」

「いいえ、」

分かりきった返事を聞いたようにまたざり、と足を踏んだ。

「奥様！ 霧崎を いいえ、ただ若君をお救いください」

いつもは冷静沈着な執事が、膝を砂利につけ絞りだすように声を出していた。

「若君がお倒れになりました」

砂利の音が止まる。

「危篤の状態で、こうしている間にもいつお命が……お命が  
願います、奥様。今だけでも  
お

「ですが私はもう……私よりも  
」

「奥様の名を、うわ言でお呼びになりました！」



振り返る女の瞳は、凜としていた。

「連れなさい、川野」

+

男は床に臥せっていた。額には濡れ布を乗せ、熱を帯びた息を苦しそうに吐いている。

「千次様……！」

狭い八畳間、臥せる布団に駆け寄りその汗ばんだ手を取った。

「こんなにおやつれになつて……一体何のお病に、」

「御過勞でございます」

「過勞？ 主人にこれほどの過勞をかけるとは、一体お前達家臣は何をしているのです！」

「返すお言葉もございません……ですが若君にしか成せない事が余りに多すぎ……御自身を酷使なさるのを止めようにも、今やこの国は若君一人で背負っている状態。誰にも代わることができないのです」

「お世継ぎは……！ 父君の大事に息子は一体何をしておいでですか」  
「御子息様は只今 出奔なされています」

「な…… いえ、分かりました。事情は聞きません。息子ではなく前妻の私までを呼んだからには、今それを糾しても無駄なんでしょう。ですが、あの娘 ただ今の妻まで、一体何故千次様のお傍に付き添っていないのです」

「瑠璃様は別邸にて御養療なさっており、若君の重体はお伝えしております」

「妻に知らせもしないとは、お前ともあろう者が一体何をしているのですか、川野。すぐに伝えなさい」

「若君は弱つたお姿を決して人に見せようとなさらない方です。特に瑠璃様には、御政治に関わるような事に触れさせることは一切無く、不穏な空気もお疲れも微塵も感じ取らせないようにしておいででした。これまでの若君の御意思を私が無碍にする訳には参りません。それに私は……」

口を噤んだ執事を一括するが如くにきつ、と向かった。

「妻とは夫を支える者です。それを余分に背負わせてどうするのですか！外にも内にも休まることが無ければお倒れになるのも当然のことです」

「その通りでございます、奥様。貴女様こそ霧崎家当主の奥方に相応しき器。若君をお支えできるのはえりか様、貴女様を置いていらっしゃるいません。どうか今こそ若君のお傍にお戻りお支え下さいませ」

「今更何を言うのです。あの方にはもう」

「私は今まで、貴方様以外をこの霧崎家当主　若君の奥方と認めたことはございません」

「元々、瑠璃様に当主奥方の役は荷が重過ぎるのでございます。それどころか若君のご負担となつていらつしゃる。もう私には見えないられません。……勿論一介の家臣である私が若君の御意思に背くような事などはありません。若君が御大事になさるといふのならば、私も瑠璃様に誠意を持つて仕えさせて頂きます。ですが、若君の眞の御正妻は貴女様唯一人。私だけではございません。この家の者皆が、貴女様の帰りをお待ちしております」

「川野」

静かな口調で女は口を開いた。

「お前が口を挟む問題ではありません。一刻も早く、あの娘に伝え

るのです」

「…… は。御無礼を致しました」  
執事は下がる。

「瑠璃様は私が責任を持つてお連れします。 留守にする間、どうか若君をお頼み申し上げます」

「言われるまでもありません」

熱に浮かされて意識のない男の顔を見つめ、女はきゅ、と唇を引き絞る。凜としたその姿に、執事は深く礼をして退がると襖を閉めた。

変わらず冷たいその手を握りしめ、女は男を見つめる。

「千次様……」

\*

汗ばんだ男の体を拭く。均整の取れた筋肉質の体は年を経ても昔に変わらず、しかしやはり顔にはやつれが見え、細身な体も余計に痩せているようだ。

意識はない。ただただ苦しそうな息を吐き、汗を流す。

医者の話では、生死の境を彷徨う重体であるそうだった。しかし病ではないので出来ることはない、体の不具を無視して酷使して来た結果で、常人では既に命が尽きている。後はその人の胆力に賭けるしかないということだった。

「どうしてもいつも、貴方は一人で抱えてしまわれるのですか」

湯呑みの水を男の口に流す。しかしそれは大部分が口から滴り落ちてしまう。流す尋常ではない汗の量を考えれば、このままでは衰弱し果て命も尽きてしまうに違いない。

「お許しくださいませ」

女は意を決した表情で、水を口に含んだ。男に覆い被さり、枕に乗る頭を手で抱えて水を口移しに流し込む。

「……は、」と顔を上げ、流しやすいよう頭を抱えたまま、願うように見つめた。

「どうかお飲みくださいませ、千次様……！」

こくん

男の喉仏が動いた。

「千次様……！」

思わず喜びの声を上げると、男の口が何か求めるように僅かに開く。

「ただ今……！」

女はまた水を含み、男の口に流し込んだ。また喉が動き、口を開け、女は口移しに水をやり、それを繰り返す。

「う……」

そして遂に、黒い瞳を開ける。半分だけ開かれた瞳が傍らにいる女をおぼろげに捉える。

「え……りか……？」

「はい、千次様……！えりかで、ございます」

まだ熱に浮かされた様子ではあるが、意識を取り戻した事に女は涙を流す。男はその顔を見上げ、呟いた。

「す……まない」

それからばたと音でも鳴るように瞳を閉じた。

「千次様！？」

不安に駆られたが、聞こえてきた寝息に安堵する。

そのやつと得られた眠りを妨げないように、何もせずに女はただただそこで見守り続けた。

## 六十五・化身

「」安心下さい」

医者の言葉を聞き、ほうつと安堵の息を吐く。そこにすやすやと眠る顔は和らいだ表情で、もう熱も引き深い眠りに落ち着いているようだった。

「もう峠は越えられました。ただ完全な回復という訳ではなく、まだお体は弱られている状態ですので目を覚まされてもまだ十分の安静をお取りになって下さい。さもなくばまたお倒れになるとも分かりませんよ」

医者は微笑んで、それにしても、と続ける。

「本当に、匙を投げるしかないご状態でしたのによくぞお命を取りとめられた。御自身の胆力もさることながら、奥様の献身的な介護が無ければこうはいかなかったでしょう」

「私は…… 妻ではございません」

「それはそれは、ご無礼を致しました。ですが傍らにおられるのが深く心を置き休められる方でなければ、こうも安らかにお眠りにはつけないでしょう」

医者は相変わらずにこにこと言った。女が慇懃に礼を述べると、では私はこれで、と立ち上がった。「お送り致します」と女も続く。

医者を見送った矢先、遠くに二つ人影が見えた。背の高い背広の

男と小柄な西洋服の女。その方へと歩む。歩いていたその二人は自分の姿を認めたと見えて足を止めた。女の方はさりげなくなのか執事の影に隠れるようにしている。

「えりか様、若君のこと本当に有難うございました」

既に医者とすれ違ったのか、執事が深く頭を垂れた。

「礼を言われる覚えなどありません。……目の前の病の者に手を差し伸べるのは、人として当然のことです」

毅然と言いそのまま横を通り過ぎた。娘のように小柄な女は、倣って頭を垂れているのかただ顔を伏せているのか分からない。

「しつかりなさい」

一瞥して言い捨て、女は屋敷を後にした。

+

眠る男の布団の前に正座する。一年の間に痩せやつれてしまっていた。

「旦那様……」

しょぼんと垂れた頭。手をぎゅと握って顔を少し上げ、男の顔に近づいた。手について震える唇でゆっくりと男の薄い唇の上に近く。吐息があつて、ますます唇はふるふる震え、頬に痺れたような熱さを感じる。

ちゅ、と触れたと同時に弾むように唇は離れかけたが、その前にきゅ、と頭が手に押される感覚があつた。

あ

バランスを崩してとさんと男の体に覆いかぶさるようになって、唇が重なり合う。柔らかく重なつて、それからふわりと離れた。髪

を絡めた両手に頭が支えられ、すぐ下でその唇が悪戯っぽく笑うのが見えた。

「瑠璃」

目を覚ました男は春の日差に照らされたような微笑みを向け、暖かな声で言った。

「お前が看着我てくれたんだな。何故か……母が傍らにいらるような気がしていた」

「あ、るりではなく、」

女が言葉を紡ぐ前にまたとさんと引き寄せて、胸に抱きしめた。

「謙遜はいい。ありがとう、瑠璃」

とくんとくんとなる暖かい心音が聴こえる。

「格好悪いところを見せてしまったな……」

それから男は慈しむように懐かしい手つきで髪を撫でた。

「迎えに行くのが遅くなってしまった。随分寂しかっただろう？」

俺もだ。体を休める時はいつもお前のことを考えていた」

「旦那様、旦那様をご看病したのは、……えりか様なのです」

「えりか？ あいつも来たのか」

そんなことより、と男は女の顔を挟んであげさせ覗き込む。

「姿が戻ったな？瑠璃。いや、前よりもより美しい。肌は白い花びらでは頬はばら色だ。お前は本当に稀な奴だ。年を経ることに

美しくなっていく」

黒い金剛石のような瞳に見つめられれば、目は逸らしたくとも逸らせない。頬が染まるばかりだ。

「あの、るり……旦那様、旦那様はお休みにならなければなりません



ん」

「なんだ、もう少しいいだろう。心配をするな。もう倒れてお前を不安にさせるようなことはしねえ」

相変わらず微笑をして、腕に入れたまま庭の方に目をやる。

「美しい庭だろう。母の為に手入れされた庭だ。伏せながらも四季を感じられるように……」

白い花が一面に、しかし僅か僅かに俯くその花はどこか刹那で儚い美しさで佇んでいる。

「お母様……の」

「そうだ。あれは母上の好んだ花……瑠璃、お前は白百合の化身だ。母が俺に与えてくれた」

枕元に丁寧に置いてあった扇子を女の胸元に差し入れる。

「この形見はお前が持っていてくれ、瑠璃。唯一俺の持ち物だ。俺のいない時は俺だと思い、お前がいない時俺はお前と共にいると思う。俺とお前を繋ぐ扇子だ」

「駄目です、旦那様。これはとても大事なもの……るりが持つのはいけないことです」

「大事だからお前に渡すんだぜ？ それに何より大事なのはお前だ」  
「けれど、るりはきれいでないので……」

「何を言っている。お前より綺麗なものはねえ」

男は軽く笑って、女の衣服に手をかけた。ぷちんと青いぼたんを外す。

「さあ可愛い瑠璃、俺に力を与えてくれ」

布団の中に引き入れて、華奢な体を下に轢いた。引きおろして、絹のように滑らかな肩が顕れる。

「あ、旦那様、だめです」

「結び合う時ぐらいいは名を呼べと、思い出させてやらないといけねえな？」

肌に触れただけで、んと唇を結びぎゅと目を瞑りぴくんと体を震わせる。

「いい子だ」

こほん

「若君、お戯れはそこまでに遊ばせ下さいませ」

男は形よい眉端を僅かに上げる。

「わきまえろ、川野」

「御精力が戻られたようで何よりですが、若君の考えになるより体力はまだ戻れておりません」

「だから瑠璃に貰うんだよ」

「瑠璃様は急いた長旅の為まだご休養も取られず体の埃も落ちていません。体をお清めする必要があります」

「あ、るりは大丈夫です。ありがとうございます、御執事様」

「大丈夫ではありません、若君の御衛生の為です」

「おい」

男の声が低くなる。女は恥じ入って申し訳なさに顔を俯いていた。

「なんだその言い方は」

「私がお仕えしているのはあくまで若君でございます。これまで瑠璃様に非礼申し上げた覚えはございませんし、するつもりもございません。常に相応しい態度で接して参りました」

「もういい、下がれ」

不機嫌な声で言うと、執事は頭を下げ退室した。

二人、静かに部屋に残される。

「あの、ではるりはこれで。お休みなさいませ、旦那様」

その場を逃げるようにして女も立ち去った。男もあえては止めず、ち、と舌打っただけだった。

「治せばいいんだろ」

不貞腐れたようにぼすんと布団に戻ったが、しかし枕元にきらりと輝く長い銀の糸を見つけて微笑み、目を瞑った。

+

「瑠璃様」

おずおず横を通り過ぎようとしたら声をかけられ、つんのめりそうになる。

「は、はい」

「少し宜しいでしょうか」

## 六十六・夢花

『瑠璃、可愛い俺の瑠璃、』

男は銀色の髪を撫でている。夜の砂漠に一人立ち、折れそうに華奢な体を抱きしめていた。しかしその体がどんどん細くなっている気がする。男は不安になって訊いた。

『どうした』

女は顔を上げた。

『旦那様が摘み取ってしまわれたので、るりは枯れなければならぬのです』

『何を言っているんだ。水も光も十分に与えただろう』

『けれどもいつかは枯れてしまうのです』

女はいるのに、腕は感じない。いないのが怖くて抱きしめられなかった。

『待て。何が足りない。何でも言え』

女は何も言わずに微笑む。

『ありがとうございます。千次様。るりはとても幸せでした』

腕の中で微笑んだ筈の女は、次の間には初めからそこにいたように、離れたところに立っていた。待て、と男が一步踏み込んだと同時に、女はおぼろげな光になった。男ははっとしてそれ以上動けずに立ち止まる。

『千次様』

背後に別の声が聞こえくりとする。目の前の女は哀しそうに微笑み、それから破片のようにちりじりになっていつて淡く消えていく。

『どうかお幸せに、御主人様』

『瑠璃　！』

光の破片を呆然と眺めていると、背後にやはり名を呼ぶ声が聞こえる。

振り返れないまま、しかし声は近づいてくる……………

「千次様　」

「……………」

「おはようございます、若君」

「想像以上に最悪だな、寢覚めに男を見るとするのは」  
「申し訳ございません」

執事はさらりと受け応えると表情も変えないまま問う。

「少し魘うなされていましたが何か悪いお夢でも見られましたか」  
「忘れた」

ふう、と男は起き上がった。

「瑠璃は？」

「いらっしません」

「早く連れて来い」

「お出掛けになられています」

「何？」

男は顔を顰める。

「聞いてねえ」

「奥方であるならば若君の許可が無くとも屋敷を自由に出られる筈ですが」

「そういう意味じゃねえよ」　ち、と舌打つ。

「なんだよ、俺の目覚めを待ってればいいのに。ちゃんと付き添いの者は付けたんだろ？」

「竜之介様と観劇にお出になりました」

「……」

無口になつてから布団にごろりと寝転んだ。

「可愛くねえな」

\*

「若君」

「なんだ」

目覚めから数日、男は布団に寝転がりながら不機嫌な様子で答える。

「御仮病はお辞めください」

「仮病じゃねえよ。俺は瑠璃に看病されるまで治らねえ」

「御不貞寝はお辞めください」

片目で睨む。

「第一何でお前がいるんだよ。お前がいるから瑠璃が入って来れねえんじゃねえのか」「恐れながら逆でございます。瑠璃様がいらっしやらないから私が若君を御看病申し上げているのです」

「いや絶対お前のせいだ。あいつは極度の遠慮性なんだよ。問題ねえからお前は早く下がれ。一体何が哀しくて男に看病されなきゃならねえんだ」

「問題がないなら起きてくださいませ。すぐに御執務をとはいませんが、寝てばかりでは体が弱まりかえって毒でございます」

五月蠅そうに男は黙って体を向こう側を向いてしまった。執事は一つふつと息を吐く。

「瑠璃様はずっと竜之介様のお部屋にいらっしやいます」

がばりと布団が捲りあがった。男は思い切り眉を寄せていた。

「何なんだよ。……あいつ、一体どういうつもりだ」

「直接御訊きになってはいかがでしょうか」

ち、と舌打つと男は起き上がり部屋を出て行った。執事もその後ろをすつと立つが、しかし主人を追うことはせずに廊下の奥に消える。外ではひひんと馬が啼いた。

+

ぐいと細い手首を掴んで立たせた。二つ並んで置かれた紅茶の力ツプ、ソファから立ち上がった人物を真っ直ぐに見て言う。

「瑠璃が長らく世話になったな、竜」

「いえ、」

目に何か挑戦的な光を認めて男は僅かに目を眇め、だが何も言わずに女の手を引いた。

「行くぜ、瑠璃」

「旦那様、」

立ち留まる素振りを見せた女を訝しげに見る。

「るりはお頼みがあります」

「何でも聞いてやるから早く来い」

女は銀色の瞳で真っ直ぐに見つめた。

「るりは、旦那様とお別れしたいのです」

## 六十七・扇子

沈黙の後、男は静かに口を開いた。

「俺は疲れているみたいだな」

ふう、と息を吐くと構わず手を引いたまま行く。動かない女はとてんとよろけた。

「ごめんなさい、旦那様。けれどるりはりゅうと一緒にいたいのです」

「なんだ。何が起きている？俺が寝ている間に何があった」

男はほとんど困惑した様子で誰にともなしに呟いた。

「るりはもうお役目を果たしたと思うのです。もつるりを自由にしてください、旦那様」

「……なんだよ、それ」

見下ろして、肩を掴む。

「俺がお前を拘束していたというのか。だからお前は俺の傍にいたというのか」

「るりは旦那様がお怒りになるのが恐かった。けれど本当はずっとりゅうと一緒にいたかったのです」

何も言わず、じっと見る。逸らすことのない銀色の瞳から、その視線をもう一人の男に向ける。厳しく睨む黒い眼だった。

「俺の瑠璃に何をした」

「るりは誰のものでもありません。るり自身の意志です」

やはりどこか挑戦的な瞳で答える男の前に無言で立つ。

「今までご苦労だったな、竜之介。いつかのお前の望み通り、自害させてやるっ」

「旦那様！」

女が庇うように両腕を広げてその前に立ちはだかる。

「竜は何も悪いことをしていません」

ぐっと唇を噛んで、目が潤う。



「天の時も……旦那様は、天にあまりお優しくなかった。天は哀しかった……るりも」

「天は関係ねえだろ。そこをどけ、瑠璃。竜之介は俺が手ずから処断してやるう」

「旦那様は乱暴なことのあります。るりは旦那様の乱暴がとても恐い……けれど、りゅうに悪いことをするのは止めなければなりません」

「瑠璃、お前は夫の俺よりもそいつを庇うのか」

「るりは……旦那様のほんとうの奥様ではありません」

「瑠璃！」

もう一度、ぐい、と肩を掴んで女を寄せた。そのまま強く胸に抱く。

「何故そう悲しいことを言うんだ」

「るりは、分かっていました。るりは旦那様のお人形……旦那様がお望みならばるりは何でもそのようにしなければなりません。けれど、旦那様が奥様の代わりと思っても、るりはほんとうには代わることができないのです」

「お前を誰かの代わりだと思ったことはねえ」

「るりは分かるのです、旦那様……」

女は哀しそうに微笑んで、男の胸を離れた。

「さようなら、千次様。るりは戻りません。りゅうのところへ行きます」

「馬鹿を言うな。悪かった、一年もの間寂しい思いをさせて。これからは毎晩一緒にいてやるから気迷うな」

「そうではありません。るりはもう、嫌なのです。ただ一人でお部屋の中にいて旦那様をお待ちするのも、旦那様が他の女ひとのところへ行つたと分かるのも……とても不安で寂しくて、嫌なのです」

「……………」

「りゅうのところで、るりは好きにお外に出ることが出来て、ご使用人の方も話しかけてくれて、るりは何でもすることができました。」

一人にはならなかったのです。るりはとても楽しかった。……  
るりが望むのはとても欲張りなことですけど、

女は申し訳なさに眉を下げたが、僅かに微笑む。

「りゅうはるりはもつと好きにしてよいと言いました。りゅうはとても優しい……るりをとても大事にしてくれる。旦那様よりも」

「りゅうはずつとるりだけと言いました。毎晩慰めてくれました。るりはもつとあいされたい……」 黙りこくっている男に向かい、  
気後れすることなくはつきりと告げた。

「るりはりゅうのところに行きたいです、旦那様」

銀の瞳は真直ぐだった。

「……分かった」

その刹那、女は睫毛を伏せる。背後に控える竜之介も了承に驚いた顔をしていた。

女は男に歩み寄り、藍色の扇子を両手に差し出した。男は黙って受け取る。

「瑠璃……覚えてるか」

「はい、旦那様」

滑らかな銀の髪をよけて、それから首に指が絡みつく。竜之介はただそこにいて声を発しなかった。

「瑠璃……」

哀しそくに呟くと、ぐ、と指に力が籠る。女は一瞬背を反らし、

それから唯唯その黒にぎゅっとしがみついた。厳かな、それは何かの儀式のようできて抱き合う男女であり、しかしそれは確かに

男が女の首を絞めていた。

「旦那様!？」

俄かの信じられない光景に半ば放心していたが、竜之介ははっと気を戻すと慌てて駆け寄る。

女の手がだらりと下がった。

「るり……!!」

首から手が離れ、そのまま細い体は折れるように崩れ落ちる。首には斑に藍の跡があった。

「何故こんなことを……!!？」

悲痛な叫びを上げて抱き起こした女の頬に涙が落ちる。

黒い背は、何も答える事なく立ち去って行った。

## 六十八・愛

『単刀直入に申し上げますと、瑠璃様には身を引いて頂きたいのです』

『え、けれどもりも旦那様のお役に立ちたくて、何か、』

『お倒れになった時、若君はえりか様のお名前をお呼びになりました。若君は必ずや、心深くでは今もえりか様をお思いになられているはずです。若君を変えたのは、えりか様なのですから。……しかし若君のご同情を受ける瑠璃様の存在があつてはお二人の御復縁は難しい』

『るりのあることが……』

『同時に若君が心密かに罪悪感をお覚えなのを私は存じております。竜之介様への御厚遇、瑠璃様へ過保護、度を過ぎる程の若君らしからぬお振る舞いは、御自責の裏返しに他なりません。事実、瑠璃様と竜之介様の縁を引き裂きお二人を遠ざけてきたのは若君なのですから』

『あの、るりはりゅうのことは、』

『これは元々が扱れたこと 私めにお任せください』

『けれど、るりは旦那様の』

『もし若君を本当にお想いになられるのなら、何が若君のお為となるのかお考えくださいませ』

けほんと言って女は息を吹き返した。

竜之介はほつと息をつくが、眉間に力を入れる。

「怒ってはいけません、りゅう……」

微かな声を出して、瞳は上を見上げた。

「旦那様は、お確かめになっただけです。そうでなければるりは生きていません……旦那様はるりのほんとうを知って、るりを手離れたのです」

「……るり、さっき言ったこと　いや、何でもない」

「りゅう……るりが旦那様とお別れしたいのは、旦那様をあいしているからなのです」

「分かってるよ、るり……だけどこれからは一緒に生きて行けるんだよね」

「はい、りゅう。旦那様がお壊しにならなかったということは、るりはまだ役に立たなければならぬのです。るりは今までの分りゅうにもたくさんのお返しをしたい」

「いいんだよ、そういうのは。るりは好きなことをしてくれればいい」

「るりはお役に立つことが嬉しいのです」

「僕はあるりが笑顔でいてくれたら嬉しいんだよ」

懸命に言う女に竜之介は笑って言った。女は何かしゅんとする。

「ごめんなさい、りゅう……るりは、旦那様に会うことのなければ良かった……」

「だから、いいんだよ。るりは旦那様を想っていて。僕はそれでいいんだ」

女は、顔を上げて小指を差し出した。

「りゅうは、とても好きです」

「僕も、るりが好きだよ」

小指を絡めて、微笑んだ。ぼろんと零れた涙の粒に、二人とも気づかないでいた。

「えりか様がお見えです、若君」

「そんな暇はねえ」

男は執務机に座って書簡に目を通しては休めることなく羽根ペンを動かしていた。紙や本が山のように詰まっている。

「若君、まだ病み上がりなのですから少しお休みになって下さい」

「俺がやらなきゃ誰がやる」

部屋は机上以外は相変わらず整然として、主人には一見して別段変化も見られない。予想に反した。

「先ほど、竜之介様と瑠璃様がお出になりました」

「そうか」静かだった。「休憩してやるからコーヒーを持って来い」

「かしこまりました、若君」

退室しかけた時

「待て、川野」

黒の眼。直刃を宛てられたような緊張が走る。

「礼を言う」

男は何か清らしいとも言える表情で、ふ、と笑った。

「これであいつを殺さずに済む」

「若君」

「川野、お前に見えるか」

主人が視線をやった窓先を見るが、何か変わった様子はない。

「霧崎は死ぬ」

声も出せない様子を見ると男は面白そうにくすりと笑った。

「いや、霧崎が朽ちて初めてこの国は生きる。俺には見える。この国が、この国の人間が力強く生きるのを。土を押し潰していた錘が

壊れ、初めて草木は生えるだろう」

「若君が天様をお出しになられたのは、お戻しにならないのは、草木であって欲しいとお思いの為ですか」

それには答えず代わりに男は庭に目をやる。

「俺はこの国の土となるう」

「私は最後までお供します、若君」

口元はふ、と笑う。

「早くえりかを帰して来い」

「かしこまりました。それが若君の愛ならば」  
執事は退室した。

男は一人青い空を見上げて微笑する。

「あいつが花を愛しめるように」

完

## 六十八・愛（後書き）

ありがとうございました。

『瑠璃色』の続編としてはここで終りです。

次作には（今度こそ）天を軸とした話を予定していますが、同時に瑠璃千次えりかにも決着しシリーズを完結したいと考えています。ここまで楽しんで頂いた方々、ありがとうございました。もしまた見えることがあれば幸いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3157p/>

---

続瑠璃色紀

2011年7月20日03時12分発行